

ガンダムビルドダイ
バーズ divers
ensemble

千葉ネリモン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二度の有志連合戦、そしてアルスに纏わる事件を乗り越えたGBN。

未だ発展と拡大を続けるGBNは、世界各所から参加するダイバー達の留まる事のない情熱を受けて更なる活気で溢れていた。

そんなダイバーたちの中にガンプラで作ったバイクで走るダイバーがいた。

対人戦やランキングには興味を示さず、バトルは必要なだけほどに。気ままな電脳世界の一人旅を楽しんでいたそのダイバーが、それぞれの想いで活動するダイバーたちと出会い、関わる事で生まれていく世界の片隅の物語。

※作中に出てくるキャラクター、ガンブラ、ミッシヨン等はハーメルンのビルドダイ
バーズ二次創作で良識の範疇でならば自由に使用頂いて構いません。

目次

第1話	バイクに乗るガンブラ	1
第2話	リベンジマッチ	13
第3話	あぐねる二人	26
第4話	トレジャーハント	41
第5話	砂漠に赤イカ	60
第6話	求めたものは	75
第7話	心の井戸のキャパシテイ	
91		
第8話	熱砂の果て、熱意の行方	
106		
第9話	あるダイバーの拾いモノ	
123		
第10話	ルメ	135
第11話	頑張りたい	156
第12話	それぞれは夜に思う	174
第13話	フェイス・トウ・フェイス	
189		
第14話	決闘	202
第15話	傷の記憶が疼こうと	214
第16話	ELダイバーを探しに	
231		
第17話	この繋がり先の	242
第18話	ミヒロの理由	255
第19話	一水四見	273
第20話	最低の上塗り	286

第21話

ラストチャンス



第1話 バイクに乗るガンブラ

二年前のことだ。

「ごめんよお嬢ちゃん。このプラモデルじゃGBNには入れないんだよ」

模型店の店主が困ったようにそう言った時、私は意味を理解できなかった。

GBNとはロボットのプラモを使って遊ぶゲームではなかったのか。だからこうしてバイクに変形するロボットのプラモデルを作り上げて来たのだ。

私はプレイ出来ない理由を店主に聴くと今度は明確な回答が得られた。

「どうやらプラモデルにもバイクと同じでメーカーが複数あるらしい。そして私が作ったのは残念だがガンブラではないらしい。」

しかし問題さえ分かれば、簡単な話でもあった。

私はパーツを選ぶ。まずはガンブラを買った。バイクそのものなガンブラもあったのでそれも買い、それが少し小さかったので付け足すためのキットも追加購入し、私の財布はすっかり痩せてしまった。

私はバイクが好きだった。現実のバイクのフォルムが好きだった。無骨な大型バイクを颯爽と操る女盗賊がカッコよく見えた。ヒロイックに裝飾されたバイクをカッコ

よく乗り回す特撮ヒーローの姿に憧れた。

私は盗賊ではないし、ヒーローでもない、二輪免許さえ取れないただの中学生だった。それでも彼女らの様に鉄の馬を操りたい。疑似的にはいえそれが出来ると聞いて、実現したい一心で、自分だけのバイクを組み立てた。

そして数日後、私は完成させたガンプラを再び模型店に持っていく、と。

「君がこのガンプラを作ったの？」

声音ですぐに良い意味での驚きだとわかった。

その時私は、自分で作り上げたモノを手に満足げに笑ったと思う。

鼻を明かしてやれて満足だったのか。

してやったりと思えて、晴れがましかったのだろうか。

違う。自分の作ったモノを褒めて貰えて嬉しかったんだ。

その気持ちが第一歩だった。

私……タケウチ・ミヒロがGBNへと踏み出した第一歩だったんだ。

／／

そこは見渡す限りの大平原だった。視界に移る土地の大部分が草原。土地のところ

どころには、池や露出した岩肌が点在しているが、池は澄み切り岩も自然のままといった姿を残しており荒涼とした雰囲気はない。むしろ吹き抜ける風と共に牧歌的な空気が醸し出すのに一役買っているとも言えるだろう。

絵に描いたようなあまりにも美しい自然風景だが、ここは地球のどこかにある風景ではない。すべてGBNという世界が作る電腦の自然、という意味では文字通り絵に描いた世界ではあろうが。

機動戦士ガンダムに出てくるモビルスーツという兵器を模したプラモデル達をデータとして読み取り、戦い合わせるVRMMO。ここはその数知れず存在するディメンションの一つ。

そして今。草原の風を切り裂く様に、一台のバイクが駆け抜けていく。

人間のバイクではない。MSが——ガンブラが騎乗できるほどの巨大なバイクだ。縦にすればHGクラスの全長を凌ぐ車体は、様々なガンブラから集めたミキシングビルドのバイクだった。マシンライダーをベースにしているのは窺えるが、その面影が残るのはシートとハンドル部分のみ。バトルを念頭に作られているため、フロントから正面に突き出る角の様に、ビーム砲が備えられている。車体の後方にはSFSのパーツやブースターを組み合わせており、推進機としての機能が付加されており、時折ノズルから光を噴き出して機体の加速を助けている。

そんな趣味の塊とでも言うべき二輪の特機を操るのは、HGの中でも取り分け小柄な機体、GNアーチャーだった。背にあつた大型GNコンデンサはバイクに股がるために接続部ごと取り外されている。特に目立つ装備を外したことで体格は一層小さく見えるが、大型のバイクを巧みに操る姿からは、原作とはまた違う力強さを醸し出していた。「追加したパーツは特に干渉してない。スピードもいつも通り出ている、と」

GNアーチャーのコックピット内で、深紅のライダースーツを着た女がひとりごちる。アバターの年齢設定は二十歳前後といった見た目だ。170センチを越えるスレンダーな長身と、短く切り揃えたさらさらの黒髪がコンソールのうっすらとした光を浴びている。

彼女は目元にかかる黒髪をかきあげながら。リアタイヤ周りの装甲に追加した装備の具合に手応えを感じているところに、アラートが鳴る。NPDリーオーが出現し、砲火がバイクに向けて放たれる。

低難易度ステージらしい単調な射撃を、ライダースーツの女は鼻歌混じりに操縦しながら、悉くをかわして見せる。

「この調子なら何とかかなりそうかな」

ウエポンスロットを操作し、ビームライフルを選択。バイクのハンドルグリップが分離し、固定ビーム砲は大振りなビームライフルとして機能を変える。

バイクを走らせたままGNアーチャーは慣れた様子でビームを射撃。放たれた光線はリーオーの頭を撃ち抜き無力化。光に包まれ霧散するのを確認すると、彼女はバイクを止める。

ウォーミングアップはこんなものだろう。あとは約束相手を待つのみ、だ。

そう思った丁度その時。約束の相手から連絡が入った。通信用のウインドウが開き相手の姿が映し出される。

相手は二人のプレイヤー。

一人は青い髪にオオカミの耳を付けた少女の姿をしている。本人曰くドモン・カツシュをリスペクトしての真つ赤なマントを羽織り、こちらに向けて細い腕を大きく振り回している。

そして傍らに立つのは真つ赤な髪に黒いハチマキを締めた少年のアバターだった。どこか緊張した面持ちでこちらを見ているのが分かった。

「本当に来ちゃったんだね……」

約束の相手を確認した彼女——ミヒロのアバターの表情は控え目に言っても、歓迎や喜色といったものでは無かった。

／／／

三日前。4月の終わりの放課後の教室での事だ。

「タケウチ・ミヒロさん！　折り入ってお願いしたいことがあります！」

掃除当番を終え帰り支度をしていたミヒロの前に、同じく当番だったスギミ・ユキナという、ろくに話したこともないクラスメイトが突如として両手を合わせて拝み込んできた。

まずミヒロはクラス内では紛う方なき地味のグループだ。伸ばした髪を一束に結っただけの三つ編みに、特徴の少ない顔立ち。身長こそ少し高い方だが、未だ身に着けるブレザーの制服には慣れず、着られている感が強い。そんな模範的に地味な15歳の少女だ。

片やスギミ・ユキナは明るく社交的でついでにミヒロの目から見ても可愛いと来ている。ポニーテールにした髪型は彼女の活発さを表してよく似合っており、整った顔立ちもだがクラスの女子が羨むほどに顔が理想的に小さい。部活で鍛えているので、ところどころ太ましいのが本人の悩みだが、それを言えば周りが笑っていいじり、そしてそれを笑って許す。そんな朗らかさの見本のような子だ。

はつきり言って日陰者の側にいるミヒロとは縁の無い相手でもある。何よりこんな

事をする意図が分からず、ミヒロは目をしばたかさせた。

「ごめんなさい、スギミさん。人違いではないですか？」

「いいえ！ 貴女にしか頼めないことなのです！」

やんわり否定するつもりが、力強い断言が返ってくる。

ミヒロは尚の事戸惑うが、ユキナはおもむろにスマホを取り出すと一枚の写真を見せた。

写真には満面の笑顔のユキナ。その手にはガンブラが抱かれている。画像を見せると、ユキナはどこか気恥ずかしそうにはにかみながら笑い、

「私もやってるんだよね、GBN。タケウチさんもやってるでしょ？」

「どうしてそれを？」

「前にウチの男子が模型屋でダイブしてるのを見たって言うてたよ」

明瞭に返ってきた答えに、ミヒロはため息と共に項垂れる。ミヒロがダイブで利用しているのは近所にある馴染みの模型屋だ。そこにある家庭筐体を厚意で貸してもらっている。個人経営のため、ガンダムベース等で知った顔とぼったり出会う事はないと思っていたが、どうやら甘かったようだ。

「見られてたんだ……」

「分かる。女子だけだとなんか肩身狭いもんね……」

腕を組みしみじみとした様子でユキナはうんうんと頷く。

それは心の底から同感なのだが、どういう意図なのかはまだ分からない。

「……頼みって、フォースとかへの勧誘ですか？　それならごめんさい。私は一人でやりたいから……」

「そうじゃない、そうじゃないの。力を借りたいのはあつてるけど、今回だけ一度だけでいいの」

「……ミツシヨンの協力、という事ですか？」

ミヒロが尋ねると、ユキナは口ごもる。そのままどこか言いにくそうに、スマホを差し出して見せた。

「えっとその……ちよつとこれを見てもらつていいかな」

そう言つてユキナはスマホを操作し動画を再生する。

再生されたのはGBNでのバトルの様子だ。五体のガンプラの戦闘が映し出されている。

それだけなら、ごくありふれたGBNでの一幕だが、ミヒロはすぐに違和感を覚えた。「プレイヤー同士ですよ？　でもこれ何だか変……？　片方の組、全然反撃してないですよ？」

動画の中では五体のガンプラは三対二の組に分かれ、戦闘をしている。だが二体の組

——マックスターとサンドロックの組は攻撃に対してまるで反撃をしていない。そして無抵抗のままバスター、カラミティ、ブリッツの三機の一方的な攻撃を受け、そのまま敗退している。

「この動画を配信してるの、所謂ところの迷惑系GTUBEなんだ。初心者を誘って一緒にミッションをやって、終了間際に後ろから撃って、泡食つてるところを撮って……とにかくそんな奴ら。それで狩られてるマックスターとサンドロックは、私の弟とその友達」

運悪くターゲットにされたって事、とユキナはため息交じりにそう言った。

なんとという事だろう。正面からの接近戦主体の機体の組み合わせに対し、砲撃戦型のバスターとカラミティ、そして迷彩を装備したブリッツ。相性が悪いにもほどがある。しかもそれを動画として残す悪趣味ぶりに、ミヒロは辟易した顔になってため息をついた。

「聞いてるだけでムナクソものですね……」

「そう。弟の友達もそれでGBNが嫌になっちゃったみたいでさ。弟も怒ってこの胸糞の悪い連中にリベンジ申し込んだのよ」

「はあ……それはまた思い切りましたね」

「だからお願い！ 弟と友達の楽しいGBNライフのためにも、どうか力を貸してほし

いのー！」

パン！ と手を合せて拝みこむユキナだったが、頼まれるミヒロはまだ胡乱とした顔で、気のない声を返すだけだった。

「……はあ」

話は分かる。気持ちも汲める。でも無茶な注文だ。あらゆる面で。

こういう事に身内が突っ込んで拗れたりしないのか。マナーの見本であるキャプテンジオンの相手に相談すべきでないのか。

疑問符はいくらでも溢れてきた。しかしその中でミヒロの口から出たのは、一番気になつた疑問だった。

「どうして、私なんですか？　　こういうの頼むなら他に強い男子とかがいるんじゃないですか？」

ミヒロはガンプラバトルがさほど強いわけではない。ランキングには興味も向けず気ままにバイクのガンプラでGBNを駆け回っていただけなので、対人戦の回数は数えるほどしかない。半端者の自分がそんな因縁のある戦いに加わってしまったていいものか。

質問を受けたユキナはまた言葉に詰まる。が、さつきとは少し様子が違う。頬に指を添えどこか気恥ずかし気に目を泳がせながら、彼女は少しでも音量を下げながら答え

た。

「タケウチさんに断られたらそうするつもりだった。けど、女子同士で相談が出来るならそれが一番だと思っただし」

それに、とユキナは一度言葉を区切り、

「……友達になりたいなって」

「え？」

予想もしなかった言葉にミヒロは目を丸くする。

二人だけの教室が急に静かになった。予期せず見つめ合うこととなったミヒロとユキナだったが、沈黙に耐えられなくなったユキナは顔を赤くして言葉をまくしたてた。

「ゴメン今の無し。困ってる弟をダシにして何言ってるんだろ。本当にゴメン。急に變なこと相談してゴメンなさい」

「いえ、そんな……」

「話を聞いてくれただけでもありがとう。今日はこれで……ああでも、もし良ければタケウチさんの作ったガンブラ見せてもらってもいいかな？」

ほら、他にもGBN好きな女子いるとなんか嬉しいし安心するし」

ユキナは早口で言った提案が照れ隠しであろうことはミヒロにも分かった。ミヒロもユキナの作品を見た手前、隠すのもフェアでない。そう思い、

「……見るだけなら」

ミヒロは自分のスマホから写真を選択してユキナに見せる。

途端、ミヒロは既視感を覚えた。写真を見たユキナの表情がみるみる変わっていく。

あ、これなんか前にもあった。

そう思った後に起きた事は、ミヒロにとって未知の経験だった。

そして結果的に三日後GBN内。ミヒロはユキナとその弟と合流する事となった。

第2話 リベンジマッチ

要約すると、ミヒロは誉めごろさされて押し切られ、思わず了承してしまった。

ミヒロのガンプラに対してユキナの食い付きは凄まじかった。ミヒロもそれなりに写真を保存していた事もあって、凄い凄いと興奮するユキナに言われるまま、ほとんどの写真を見せる事になった。

こんなに自分の作ったモノを褒められるのは、小学校の夏休みの工作で賞を取った時以来だった。最初は少なからず嬉しかったが、次第にむず痒さが込み上げて来て最後は顔を伏せながら懇願するようにして場を収めた。

その時うっかり、手伝うから、と言ってしまったのが運の尽きだった。

こうして、現在。ミヒロはアバターの姿でフィールドへと降り立ち、ユキナとその弟のアバターの前に立っている。

(私って、チョロいのかな……)

心の中でため息をつく。そんな彼女の心内も知らぬ青い髪の少女がミヒロのアバターの手を握り、感謝とともに自己紹介を始める。

「今日は本当にありがとう。こっちの方ではキナって名前になってるから、よろしくね。

それでこっちは弟の、えっと……」

「いい加減俺のダイバー名覚えてよ姉ちゃん」

苦笑を浮かべつつ、赤い髪の少年は背筋を伸ばしてコーヤへと向き直り、

「ジンガです。よろしくお願ひします！」

赤い髪の少年は礼儀正しく一礼をする。ユキナに聞いた話ではまだ中学に入学したばかりとの事だったが、思っていた以上に出来た弟さんの様だ。

「ええ、よろしく。私はコーヤです」

簡単な自己紹介を済ませると、キナとジンガは自分の機体呼び出す。

キナの機体はシャイニングガンダム。写真でユキナが持っていたガンプラだ。

ジンガの背後にはガンダムマックスターが姿を現した。初心者との事だったが、丁寧な仕上げが確認できる。頑張ったのが分かる良い機体に見えた。たぶんだが、彼は姉よりも製作が上手いとも思う。

「それじゃあ、手筈通りに」

頷き合い、三人は行動を開始する。



フィールドを探索し、遭遇したNPDを倒しながら時間をつぶしていると、やがてあの三機は現れた。

（うわあ本当に来ちゃったよ。呼び出したとはいえ、本当に来ちゃうのか……）

内心、果たし状を無視して来ないことを期待していたのだが、その思いは脆くも崩れ去った。表には出さずにコーヤががっくりとしていると、相手側から通信が入ってきた。

「わざわざ呼び出してくれるとは、ありがたい話だね」

バスターの乗り手、顎髭を蓄えた男が愉快気に言った。

「今日はサンドロックの友達はいないのか？　もしかして、あの程度の事で嫌になっちゃたのか？」

カラミティを使う、細面の美男は酷薄な笑みを浮かべて笑う。

「あれくらいよくある洗礼だろ。あれで辞めちゃうくらいなら、GBN向いてなかったんだよ」

ブリッツの禿頭の敵めしい顔をした男が忌々し気に言い捨てると、他の二人は同調し、

「そうそう。時間を無駄に使わずに済んで良かったじゃないか」

好き勝手に言うのと、三人はゲラゲラと笑い出す。

その様子が腹に据えかねたのであろう。キナは自機を一步前に出させると、声を張り上げる。

「あんだ達ね、ウチの弟をボコつてくれたのは！ 今日という今日は本気で怒ったからね、覚悟なさい！」

びつとシャイニングガンダムで指をさし、ユキナは毅然と怒りをぶつけるが、相手の三人はまた笑い声を上げるばかりだった。

「何だよ助っ人つて姉ちゃんかよー！」

「うわーん姉ちゃん助けてよ〜つてか？ 男の風上にも置けねえな。やっぱガキはガキか」

「この、言わせておけば……！」

今にも殴りかかりそうになるキナ。そんな彼女のシャイニングガンダムの肩を叩き、ミヒロ——コーヤは彼女に告げる。

「言わせておきなよ。寄つてたかつて初心者狩りするのがカツコいいと思ってるダサイ連中相手に怒るだけ無駄だよ」

口調は穏やかそのもの。だが、早口の中に露骨な棘の含む言葉を、コーヤはオープンラインのまま全員に聞こえる様に言った。

突然のコーヤの言葉に凍り付いたのは敵方の三人だけでは無かった。ジンガは勿論、

キナもまた青い顔になってコーヤに驚きの視線を向けていた。

「ああ？ テメエなんつったコラ？」

低くドスを聞かせた声で、バスターの乗り手が威嚇の声を上げて、コーヤに嘯みつく。それもコーヤにとっては当然想定反応だったらしく、涼しい顔をしたまま追い打ちの言葉を言い放った。

「違いました？ てつきりそうだと思っただけですけど……他に深い理由があたりで？」

「ははは、姉ちゃん威勢いいな？ けどあんましナマ言つてるともうログインできないくらい怖い目ちあつちまうぞ？」

「それは御免被りたいですね。ああ、そうじゃあ用意周到という事にしておきましょう。ルーキー相手といえ相性と数を考えるなんてライオンも真つ青の全力ぶりですね！」

言葉尻に近づくに連れ、コーヤの声のトーンが上がる。敵の三人は頭に血を上らせ、コーヤとジंगाは冷や冷やしながら見守っていると、コーヤはトドメとばかりにニヤリと笑い、

「そんなに負けるのが怖いのか？」

キナは、生唾を飲み込んだ。

「姉ちゃん、コーヤさん結構怖い人なの？」

「ゴメン。これ正直想定外」

勝敗とは別の不安がキナの胸に去来するが、どうやらそんな事を気にしている場合は無さそうだ。

コーヤの煽りを引き金に、敵方の三名は完全に臨戦態勢になっている。

そして、デュエルの申請は既に終えたあとだ。

「おし確定。テメエら全員ボコるう！ テメエら行くぞー！」

号令に応じ、バスター、クラミティ、ブリッツの一斉射が始まる。

ビームと実弾の入り混じる火線が降りかかると、すぐさまコーヤたち三人は手筈通り二手に別れて砲火を避ける。

分散するコーヤ達を追う様に、バスターたちの砲撃も分散する。ミヒロとジンガの二人をクラミティとブリッツが追い、ユキナのシャイニングガンダムをバスターが二種の砲撃で攻め立てる。

ここまでは作戦通り。ビギナーのジンガを孤立させず、且つ敵の砲火をなるべく分散させられた。

だが、コーヤは思う。

やってしまった、と。

（何を煽っているんだ私は。無駄に怒らせたのは良かったかもだけど、アレはひどい。

確かに頭に來たからってアレはひどい、せめて心の中で謝ろうゴメ……いや謝らなくていいか)

下らない事を考えながらも、コーヤの機体は巧みにビームの雨を避ける。ジンガのマックスターもホバーボードにしたシールドに乗り、コーヤの後を着いてきている。

「ジンガくんいくよ」

「は、はい!」

合図と共に、バイクのリア装甲に追加した装備、ミサイルポッドから弾頭を投射。放たれたミサイルは敵の真上で炸裂し、真っ黒な煙幕がまとまっていた三機を包み込んだ。

「くそ、なんなんだよ!」

カラミティは遮二無二になって煙幕に向けて砲撃を続ける。その内の一発が何かに命中し、爆発が生まれる。コーヤが捨てた空のポッドとは気付かなかった。

「や、やった!」

カラミティを操る男は細い顔に歓喜の表情を浮かべた直後、

「失礼します」

煙幕を突き破り、バイクの車輪がカラミティの顔面に飛び込んできた。

頭とほぼ同じ幅の後輪タイヤがカラミティの頭をギャリギャリと撫で回し、すぐに跳

ねる様に飛び退く。不意打ちに視界を塞がれ、砲撃に間が開いたならば、すかさず肉薄したマックスターのパンチがカラミティのボディを強かに捉えた。

「くそが、PS装甲に打撃が効くか!」

悪態を付きつつ、カラミティは胸部のビーム砲スキュラに火を灯す、だが、マックスターが腰の銃を抜く方が早い。

「お返しだあ!!」

一発、二発、三発……。キガンティックマグナムが矢継ぎ早の叫びを上げ、弾丸をスキュラの砲口へと連続でぶち込む。そしてカートリッジが空になった時、胸に大穴を開けたカラミティの目から光が消え、完全に沈黙した。

「ハマしやがって! テメエもいつまで遊んでやがる!」

ブリッツが煙幕から抜け出した。相手の術中に嵌ったのが頭にきたらしく、怒気の籠めた声で残った僚機に檄を飛ばす。

だが、奇妙な事に応答も何もない。まさか、と思ったその時、自機の足に何か当たった。感触があつた。

足元を見ると、バスターガンダムの首が転がっている。焼け焦げたその顔面には、くつきりと、五本の指痕が残されていた。

驚愕するブリッツの使い手の向こうで、首と両腕を失ったバスターが地面に崩れ落

ち、爆発。

吹き上がる炎を背に立っているのは、鬼の様な怒気を纏うシャイニングガンダム。全身の装甲を開き、次なる獲物目掛けて全力で走り出した。

「次はオマエだあ!!」

「怒りのスーパーマードかよ!」

シャイニングガンダムの突進に、ブリッツはミラージユコロイドを展開。電磁迷彩により視界から消えるが、シャイニングガンダムは構わずに拳を振るう。

「ふん!」

力強い踏み込みと共にシャイニングガンダムが正拳突きを放つ。が、ブン! と勢いよく空を切るに留まる。

「ふん!」

空振り。

「ブン! フン! フンツ!!」

空振り。

「ムキイイイイ!!」

空振りを何度も繰り返し、仕舞いには手応えの無さに焦れたユキナは遂に理性を手放した様な叫びを上げて、頭部のバルカン砲をバラ撒き始めた。

「ジンガくん。君のお姉さん結構怖い人なの？」

「お見苦しいところすみません！」

これじゃ作戦も無いな……と思っていると、乱射されたバルカンで飛び散った泥が空中に不自然に付着した。そのままじりじりとユキナのシャイニングガンダムにじり寄っていくのを、ミヒロとジンガは同時に発見する。

「ジンガくん、いいよ。締めちゃって」

「わっかかりました！」

マックスターの胸部装甲が外れ、赤い肩装甲が両腕に装備される。

装甲を落とし、さらに機敏になったマックスターがシャイニングガンダムに迫る敵機に肉薄。

豪熱の右ストレートが不可視の機体を貫いた。

ミラージュコロイドが解除され、灰色のブリッツガンダムが姿を現す。胴体にはマックスターの拳が深々と突き刺さっている。

致命打だ。ジンガの勝ちだ。はつきりそう分かった。

悔しげに、現実を否定するように、ブリッツのダイバーは声を絞り出すように呻く。

「ブレイクデカールさえ、あれば……」

ああ、とミヒロは彼等が初心者相手にこんな真似をしたのか少しだけ分かってしま

う。

けれど、それを分かったところで同情もできない。彼らがやってきた事はモラルに反した到底許されざる行いなのだから。

そしてブリッツは沈黙し、システムはミヒロたち三人の勝利を宣言した。

／／

雪辱を果たした三人がロビーに戻ってくる。

晴れ晴れとした顔をしたジンガを先頭にコーヤとキナが並んで、ダイバー達の溢れるロビーを歩いていく。

「良かったねジンガ。これから気兼ねなく遊べるね」

「ありがとう姉ちゃん。コーヤさんも、本当にありがとうございました」

「うん。どういたしまして」

満面の笑みを浮かべるキナとジンガの姉弟にミヒロは軽く微笑み返す。

最初はどうなるか不安しか無かったが、解決した事はコーヤも素直に嬉しかった。

「そういえば、最後にあいつが言ってたブレイクデカルつてなんですか？　なんか強くなれるアイテムだったら、俺も欲しいんですけど」

邪気の無い言葉だったが、コーヤとキナは顔を見合わせる。

GBNに最近参入したジンガがそれを知らないにも無理はない。それを伝えるのも一応先輩としての義務の様にも思えて、コーヤはジンガへと言い聞かせるように話し出す。

「そんな良いものじゃないよ。ブレイクデカールは結構前に流行ったチート。ただのインチキだよ」

「そういうチーターをマスタイバーなんて呼んでたんだ。けど、それにもう使えなくなってるから。気にしないでいいから」

キナも一緒に念を押すが、ジンガはまだ不服そうに眉根を寄せる。

「……でも、強くなれるんですね？ そうすれば、あんな変な連中なんかには負けたりしないじゃないですか。強ければあいつだって……」

コーヤは僅かに眉をひそめる。味わった理不尽な敗北と一緒に始めた友達を思つての言葉だったのだろうが、あまり関心できない反応だった。

「強さとか勝ちばかりを優先しちゃうと、あの三人みたいになっちゃうよ」

「……え？」

先程の三人はおそらくマスタイバー崩れだ。大方、ブレイクデカールが禁止されてからまともに勝ち星が稼がず、せめてもの勝利に浸ろうとあの様な真似を始めたのだら

う。

きつとあの三人だけではない。他にも似たような思いで勝利という結果を求めすぎて褒められない戦いをしている者はいるかもしれない。

「GBNは勝ちばかりを追求するばかりが遊び方じゃないよ。あんまり根を詰めると逆に辛くなるから、ほどほどにね」

「じゃあ、コーヤさんは何を楽しみにGBNで遊んでるんですか？」

「私？ 私はそうだね……」

不意に神妙な表情になりながら、コーヤは言う。

「自分で組んだバイクを走らせて、どんな風に動いてくれるか確かめて。そうやって世界を走り回って、ELダイバーと会えたらなって、思ってる」

第3話 あぐねる二人

迷惑系GTUBER撃退から数日。リアルでは5月の連休がもうすぐ終る、そんな時期だった。

部活動に所属していないコーヤは、今日も今日とてGBNに入り浸っていた。

コーヤは現在、ダイバー達の溢れるロビーの隅のベンチに腰掛けながら、手元のウインドウと睨めっこをしている最中だった。黒髪の美女と設定された彼女のアバターが真剣な表情で見つめているのは、現在登録されているミツシヨンの一覧表である。

防衛、撃退、採取等々。多種多様なミツシヨンの内容とビルドコインの報酬額を値踏みしながら、羅列される文章をスクロールし、最適条件がないか注視していると、あるミツシヨンに目が止まる。

内容は運搬。機密となる物資を自機で目的地まで輸送するという内容だ。道中、敵機からの襲撃があるとの事だが成功報酬はまずまず。輸送の護衛ではないため、速度を合わせなくて良いのもありがたい。

これならいける、とコーヤは思った。成功すれば、欲しいアイテムの為にしている貯金目標額にもぐっと近付ける。

「よし」

小さな声で気合いを入れつつ、ミツシヨンの受諾をタップ。ロビーからミツシヨンの舞台となるディメンションに向かおうと立ち上がったその時だった。

「あ」

「ああ！ 久しぶり！」

コーヤが青髪に狼耳を付けたダイバーがすぐ目の前にいた。クラスメイトという接点を持っていた二人のダイバーが、GBNのロビーでばったりと再会を果たしたのだった。

先日と同じライダースーツ姿のコーヤを見つけたキナは声をかけるなり、主人を見つけた犬の様に駆け寄ってくる。コーヤと出会えてよほど嬉しいのか、尻尾まで動いていた。

一方で声を掛けられたコーヤの方は、どこか浮かない顔で彼女を一瞥すると目を伏せる。そして小さく会釈だけして、立ち止まる。

「この間ありがとう！ 弟もあれで自信付いたみたいで、メキメキ上達しているよ」「そう、ですか。それは喜ばしいですね」

急に現れ、テンション高めに話すキナにコーヤはやや引き気味で、素っ気の無い声で笑い返す。

それでも喜ばしい、というのは嘘ではない。キナの弟のジンガが迷惑な連中に絡まれずにGBNを楽しんでいるならば、それはコーヤにも喜ばしいことではあった。

しかし、それはそれとして。キナと出会った事はコーヤにとつて、あまり歓迎できる事ではない。

確かに前回のバトルで、彼女の人となりは分かった。いい人であることも分かっている。

けれど、まだリアルの差から来る気後れや、彼女への苦手意識を整理しきれていないと言えなかった。

「それも全部タケウチさんのお陰だよ！」

「どういたしまして、です。けど、こちらでは私はコーヤなので……」

「ああ、ゴメン。できでき、コーヤさんはあれから結構ダイブしてるの？ 連休中は部活で入れなかったから、一番に会えて嬉しくって」

「そういえば空手部でしたね。いいんですか部活は？」

「今日は完全なオフ！ さあ楽しもうつてところなワケよ！ で、これからミツシヨンにいく約束があるんだけど、コーヤさんも一緒に」

「……………めんない」

拒絶と呼べるほど強くない、小さな声だった。だがその謝罪には、明確に拒否の意味

が込められていた。

にべもない言葉を受けたキナは、本当に分からない、といった戸惑い顔で尋ね返す。

「どうしてかな、コーヤさん？」

「だって、一度きりって約束ですし……」

指摘され、キナははつとした顔になる。

一度きりでいい。

それは確かにキナの側から出した条件であり、彼女自身がそれをようやく思い出したのだ。

そうだった、と呟きながら、キナは困った様に笑って見せた。

「うん、そうだった。ごめんうっかりしてた。ダイブしたらすぐに会えたんで、ちよつとテンション間違えちゃった……」

「ごめん！」とキナは手を合わせて拝むように非礼を詫びるが、今度はコーヤが罪悪感を覚えてしまい、彼女もまたキナへと言う。

「いえ、謝って頂く必要なんて……失礼な事をしてるのは、私の方ですし……」

「そんな事ない。それぞれのスタイルがあるなら、それを尊重しない訳にはいかないよ。コーヤさんソロ派だって知ってたのに」

「……まだ、思ってるんですか？」

そう切り出したコーヤの心中で、あの日教室でユキナが言った言葉を反芻しながら、キナへと問う。

「私と、その……」

「うん。まだ友達になりたいよ。まだ、というかあの時よりも、もつとそう思ってる」

「……」

何でこの人は恥ずかしい台詞を然も堂々とと言えるのか。

けれど、拒む理由も無いと言えば無い。

GBNの事をリアルで話せる同性は貴重だ。それに、自分のガンブラも褒めてくれた。

それでも、ミヒロは容易に領けない。

もつと別の理由が、心を竦ませる。

「……まあでも、急に変な事を言ってるのには変わりないもんね。またまた変な事言つてゴメン。じゃあ私も約束があるから、この辺で」

「……はい。私も丁度ミッシヨンを入れたところなので」

「わかった。じゃあ今日はありがと。またどこかでね！」

そう言つてユキナはロビーから去る。その後ろ姿をどこか名残惜しそう見つめながら、コーヤは消え入りそうな声で呟いた。

ミッションの約束がある、と言っていた。そういう友達もちゃんという、という事だろう。

「リアルで上手くやれるなら、こっちでもそうだよね」

私じゃなくても、いいんだよね。

そう呟く口元は、寂しげに笑っていた。

／／

一度きりって約束ですし。

コーヤに言われた言葉は、GBNからリアルに戻った後でもユキナの耳の奥に残響していた。

あんな約束しなければ良かった、とユキナは制服姿のまま寝転がったソファの上でつまらなそうに天井を眺めている。

「なんかダメージ大きそうだね、姉ちゃん」

語りかけたのはユキナの弟のヒトシ。GBNでのジнгаである。赤い髪のダイバー

ルックと打って変わって、黒髪 of 眼鏡をした大人しい雰囲気をしており、今も穏やかな表情でペットの世話をしている最中だった。飼っているインコの籠掃除のため、インコのキュースケを肩に乗せながら糞の付いた底網をブラシを使って洗浄している。その作業の最中、ユキナからコーヤと会った時の話を聞かされていたのだ。

「……ヒトシはさあ、これどう思う?」

「率直に言くと、痛々しいくらいめんどくさい」

本当に率直すぎる答えに慥然としながら、ユキナはソファの上で居住まいを正す。

「男子ってさ、こういう時どうしてるの?」

「どうかな……同じモノが好きって分かったら、ガシツて握手して一緒にウエイってなる」

「参考にならないのはよく分かったわ……」

男子はシンプルだね、とユキナはため息をつく。

そんな簡単な話なら良いのだが、気になるあの子は、これまで会ってきたどんな強敵よりもガードが硬い。妙な感じで。

「分かんないけどさ、難しく考え過ぎてない? 一緒に遊んだ事があるならもうその

時点で友達じゃないの?」

「そうだったら良かったんだけど。イマイチ感触悪いのよ。自分の何が悪かったのか」

とか。タケウチさんは何がダメなのかと色々考えちゃうわけ」

「ネガティブばかりじゃん。いつそ、無理に友達にならなくてもいいんじゃないの？」
「どうしてそうなる!？」

「だって、いつも地雷を気にしなきゃならないんじゃないや、姉ちゃんの方が持たないよ」
「……」

正論である。生意気にも。

「けど、姉ちゃんがコーヤさんと友達になるのは俺としては嬉しいけどね。あの人みたいに尖ったガンブラ使う人とは一緒にミッションやってみたいし」

ヒトシは気楽に言いながら、底網を鳥かごに戻す。そして肩に乗っていたキュースケを手に乗せ変えると、綺麗になった鳥かごの中へと戻す。

弟にとっては掃除の片手間の様な話かもしれないが、自分にとってはそれなりに深刻なのだ。

ただなんとなく、何もせずに色々してもらえて、今は止まり木で呑気に欠伸をしているインコの事が少しだけ怨めしかった。

／
／
／

その日は結局、全然集中できなかった。

GBNでいつも通りにバイクを走らせたが、いつもの様な高揚感も、スピードを感じる爽快感も感じる事は出来なかった。

ミツシヨンも成功はしたが、感触は芳しくない。なので今日は調子が悪い。と早々に切り上げ、ミヒロは馴染みの模型店を後にし、帰路へと着いた。

帰り道の途中、今晚の食材をかうと買い物袋と一緒にもやもやしたものを抱えまま、ミヒロが家の戸を開けた。

「ただいま」

「お帰りミヒロ。今日は早かったね」

家の中からミヒロを出迎えた声は、ミヒロの祖母のキヨだ。

御年七十二歳の小さな体躯の祖母は、居間の座椅子から立ち上がると玄関のミヒロの元までやってくる。

訳あって、ミヒロは祖母と二人で暮らしているのだ。

「ゲームはしてこなかったのかい？」

「したんだけど、ちよつと今日は早く切り上げたの。晩御飯私も作るから待ってて」

「じゃあ一緒に作ろうか。たまには孫の腕前を確かめてあげないとね」

「お手柔らかにね」

ミヒロに料理を教えたのはキヨだった。

齢も七十をとうに過ぎてはいるが、体もしっかりしているので、たまにこうして一緒に台所に並んで料理を作っている。

「今日はカレーでいいかな？ お野菜私が剥くから、切るのお願いね」

「はいよ。そうだ、小玉の玉ねぎが古いからそれを使って」

「わかった」

冷蔵庫や戸棚の中から材料を取り出し、ミヒロはてきぱきと作業を進めていく。玉ねぎ、じゃがいも、ニンジン、それぞれの皮を剥きキヨのまな板に並べる。野菜を受け取ったキヨは慣れた手つきでそれらを細かく刻んでいく。

具を小さくして作るのがタケウチ家のカレーだ。何でも好き嫌いの激しかったミヒロに野菜を食べさせるために、キヨがどのくらい細かければ食べてくれるか試行錯誤したのが始まりらしい。

今では定番となった工程の途中、キヨがミヒロへと尋ねた。

「何かあったのかい？」

「……なんで？」

「好きなゲームを切り上げて、当番でもないのに料理をしたいなんて言い出したら、そ

りや何かあったって思うでしょ？」

「別に。大した事じゃないよ」

にべも無く会話を切るミヒロだったが、キヨはそれが真実でないとすぐに分かったよ
うだ。

「同じゲームをしてる同級生の事だね？」

物の見事に言い当てられた。びっくりしてミヒロは祖母をまじまじと見てしまう。

「……お婆ちゃんって実はニュータイプだった？」

ミヒロは驚きのあまり、ガンダムで例えてしまう。キヨはその意味は分からなかった
が、意味深に微笑んで見せた。

「別に新しいも古いも無いよ。人付き合いの苦手なミヒロが珍しく同級生の話をしたば
かりなんだ。そりゃあお婆ちゃんも気にもなるし、そうじゃないかって思うよ」

「ニュータイプというより年の功か……」

「それで、友達になつたのかい？」

答えにくい問いだった。しかしきつと祖母に下手なその場しのぎは通じないと観念
してミヒロは言う。

「……なつていいのかな」

「んん？」

歯切れの悪いミヒロの声にキヨは包丁を止めた。ミヒロも手にしているジャガイモを剥くでもなく手の中で転がししている。

「ミヒロはその子と友達になれない理由があるのかい？」

「無い……ううん、ある。その子明るくて他にもちゃんと友達がいて……私クラスにあんまり馴染めてないし、カースト下位だし。そんなのが急に仲良くし出したら周りの変な風に思わないかとか」

仮にユキナの友達となったとして、何食わぬ顔でグループに入れるはずもない。ミヒロはまずそれに不安を感じた。

ユキナとは共通の話題が通じるが、彼女の前からの友達がそれを快く受け入れてくれるだろうか。何しろ、プラモデルを使ったゲームという一般の目線からすれば、無縁のサブカルもいところだ。

どう考えてもNO。ネガティブに考えてしまうのは仕方のない事だった。

「カーストねえ。わざわざ他所の国の宗教を当て擦らなくてもいいのに。お婆ちゃんの時やお母さんの時も、仲の良い悪いはあったけど上か下かなんて目に見えてはなかったと思うけどねえ」

「昔と今は違うんだよ。それにガンブラが好きで女子もちゃんというけど、私のクラスほとんどいないし……それだけで変な風に思う人は思うし」

俯いて完全に手が止まってしまふ。そんなミヒロに向き合う様に、キヨは真つ直ぐにミヒロを見る。

「ミヒロ。諦めるのはいいけど、諦める事と友達になろうとする事と、どっちの方が自分にとつて得かはよく考えてから選びなさい」

「得つて、そんな損得勘定で」

「いいんだよ、自分の得くらい考えて。ミヒロは何かにつけてどれが悪いかばかり考えて、やっっちゃいけない理由を欲しがるから、尚更得については考えた方がいいよ」

「……はい」

「それじゃカレーの続きをしようか」



夕飯を終え、ミヒロは自室へと戻りベッドへ腰かけた。ご飯の時、祖母はそれ以上の事は言わずいつもの調子でテレビを見ながら談笑していた。

しかしミヒロの頭には、何が得かという疑問符が貼り付いて離れない。

「お得ではある事は間違いないんだけどね……」

ため息と共に机を見ると、自分のガンプラが見える。

パーツをミキシングしたバイクが本体で、乗っているGNアーチャーはオマケ。GNアーチャーを選んだ理由は、顔がバイクのヘルメットみたいだったから。

継ぎ接ぎで形にはなっているバイクの方も、正直まだ不恰好だ。それでも最初に持っていた時はもつと酷かった。

それを凄いと店長に言ってもらえたのは、初めてにしては上出来だ、という意味だったと今なら分かる。

けれど彼女はそんな不恰好な私のガンプラをあんなにも褒めてくれた。

「褒めてくれたから気になるなんて、本当に安いな私……」

何が彼女の琴線に触れたのかは分からない。

それでも熱っぽく語る彼女の顔は今も鮮明に焼き付いている。

半ばそれに報いるために協力したのが先日の決闘だ。それで十分だと思えた。貸し借りゼロのはずだった。

本音を言えば、ミスギ・ユキナへの苦手意識は依然として存在している。急になれなれしく距離を詰めてき時は、正直怖かった。

自分が周囲と折り合いを付けるため、保っていた領域を飛び越えて来るのが怖かつ

た。

「前よりも友達になりたいと思ってる」

どうして彼女は、私をこうも買ってくれたのだろう。

「だって、一度きりって約束ですし……」

何であんな事を言ってしまったんだろう。

後悔の中、ミヒロは祖母の言葉を反芻していた。

キヨは自分の得を考えろと言った。

ならば、彼女にとっての得とは何なのだろう。自分などが彼女に与えられるモノなの
何もないのに。

幾重にも疑問符は連なり続ける。

得とは何か、それは分からないまま一日が終わった。

第4話 トレジャーハント

リアルはリアル。ゲームはゲーム。

そういう折り合いの付け方もあるとは思った。

学校では今まで通り。クラスが一緒というだけの、滅多な事では話もしないただそれだけの関係。

そしてGBNでは同じ趣味を共有して、一緒に仮想世界で遊ぶ友達に。

別にそれも悪くない。むしろ、こういった世界で出会うダイバーの大半はリアルでの顔も本名も知らない間柄だ。区別し、割り切る事は何も悪い事ではない。

そう思った。思ったけど、無理だとも思った。

リアルの顔を知っている以上、アバターの向こうにある本当の顔が浮かんでしまう。

そしてそれはリアルでも、GBNでの姿を見ってしまう、という事だ。

友達として一緒に遊んでも、夜が明けて学校で出会えば他人の振るまいを努めなくてはならない。

そんな器用な真似を続けるなんて、とても疲れてしまうに違いない。

連休は今日で終わる。

今の気持ちのままでは、明日からまた顔を合わせた時、どんな顔をすればいいかわからない。

はじめを付けよう。今日GBNで出会えたら、区切りを付けよう。
今日また出会えるか、分からないけど。

そんな逃げる口実の様な条件を課しながら、ダイブしたにも関わらず、だ。

五月の連休の最終日。最後の休日で一層賑わうGBNロビーで。

約束も何もしていなかったコーヤとキナの二人は、まるで示し合わせた様に再び出会った。

出会えてしまった。

コーヤは思う。こんな偶然、あつていいのか、と。

巡り合わせの妙にコーヤが立ち尽くし、言葉を失っていると、

「いんこちは……」

先に声をかけたのはキナの方だった。

普段よりもどこか固い、躊躇うような声音だった

「……いんにちは」

コーヤもぎこちなく挨拶を交わすが、心は急速に萎れていった。

いざ相手と対峙すると、構えていた心は簡単に怯え、竦む。決心した事を果たせないまま消えてしまいたくなつて、動けなくなる。

今も周囲には多くの声飛び交っているのに、二人の間だけが切り取った様に静かに感じられた。

キナも昨日の事を思つてか、無理に話を伸ばそうとはしなかった。少しだけ待って、コーヤが何も話さないと判断すると、キナはすこし寂しそうに笑いながら、軽く会釈をして踵を返す。

赤いマントを羽織る背中が見えた時、コーヤが覚えた感情は、安心だった。

もう話さなくていい。勇気をださなくていい。そんな事を思いながら、キナの背中を見送った。

最初は気になるだろうが、すぐ平気になる。元に戻るだけ。平行線の先には、今まで通りの心の乱されない平穏がある。だから……

——甘えるな！

「っー」

コーヤは走り出した。

ロビーにいたるダイバー達を避けながら、消えたキナの背中を追った。足踏みをした後悔は追い付けなかった時にとっておく。今は彼女を探すことにだけ集中する。

右を向く。いない。

左を向く。獣耳はいたがずっと背が低い別人。

もう一度、右。丁度コーラ・サワー似のダイバーが横切ったその先。

いた！ 赤いマントの狼耳。

間に合え。そう念じながら、走り。そして飛び付くようにその手を掴んだ。

突然手を捕まれて、キナは驚きながら振り返ると、耳まで真っ赤にしたコーヤが息を切らしながら言う。

「あ、あの！ み、ミッション！ 一緒にいきませんか？ か!?」

多い。なぜ言った。自分に突っ込むが、もはや恥ずかしいと思う余裕も無い。あとは白か黒か。こんないい加減で面倒くさい自分の誘いを受けてくれるか。

「……いいの?」

キナは問う。

「お、お願いします」

深くお辞儀をするコーヤに対し、どういう心境の変化だろうと、野暮な事は考えな

かった。

嬉しいのだし。

少しだけにはかみながら、キナは答える。

「よろしく、ね」

／／

サルベージミッション。バルチャーワーク。

ガンダムXの世界観を模したトレジャー発掘のミッション。放棄された軍事施設内を舞台に、ステージ内に隠された換金アイテムや、パーツデータ等の素材を探索して入手するのが目的のミッションである。

障害として、バルチャーの競争相手という設定のNPDモバイルスーツが登場するが、さほど強くもなく、アクシデントさえ無ければ手頃な小遣い稼ぎとして使えるため利用するダイバーも多い人気のミッションだ。

コーヤとキナがこのミッションを選びダイブしておよそ十分が経過。

現在二人はより多くのトレジャーを探すため、基地内部を探索していた。基地内だけあつて道は入り組み、多くのゴミが散乱していたが、天井は高く道幅もあるためバイク

での移動は苦では無かった。

互いの機体は前回と同じだ。キナはシャイニングガンダム。コーヤはGNアーチャーとミキシングで出来たバイク。以前バイクに装備していた煙幕弾をミサイルポッドに変更し、武装面に手を加えていた。

二人は共同でアイテムを探し次々に獲得していったが、その間に業務連絡じみた確認はあっても、会話らしい会話は無い。

その事に一番焦っていたのは、誘った側のコーヤだった。

(考えろ、話題……何か共通の話題、お願い降りてきて……)

思考は神にすがっているが、コーヤは作業を適切に行っている。それらしいアイコン表示を探しては瓦礫を押し退けアイテムを入手。妨害機体と遭遇したらユキナと連携し危なげなく撃退。ミッション自体は上手くいってるのにどうしてこうも沈黙が生まれるか。

自分の引き出しの少なさに自己嫌悪を覚えていると、キナから通信が入った。ウインドウが開き、四角い枠の中にシャイニングガンダムの中のキナの姿が表示される。

「コーヤさんはさ、どうしてGBNを始めようと思ったの？ やっぱガンダムが好きだったから？」

「そうではなかったです。GBN始めるまでガンダム全然知らなかったんです。本当

に」

「ならどうして?」

「最初はバイクに乗る気分を味わいたかったとか、それだけだったんです。そんな時に GBN の事を知ったんです」

最初はテレビのCM。次にネットでの噂、配信された動画と移り変わり、その度に興味は強くなっていった。

「自分でバイクに乗るのは違うけど、自分で作ったものを自分で動かせるのって、楽しそうだって思ってた。昔から工作というか、作るのが好きなんですよ」

組み立てる事、作る事は純粋に好きだった。料理に関してもそうだ。自分で手を動かして何かを作り上げることが面白いと感じた延長線の先に、自分が立っている自覚がコーヤにはあった。

もともと、GBNを始めてからガンダムを見るようになって、アニメの方にも興味を持つようになったのだが。

「へえ。じゃあ前からプラモデルは作ってたんだ」

「いいえ、それも全然で。作ったプラモもこのバイクとアーチャーで二体目なんです」

「それ二体目だったの!?!」

「あ、と言っても、最初のころからも色々いじって、もう原型ほとんどないです。一時

期はトライク……三輪だった事もありますし」

「どつちにしろ凄いや。私はミキシングってやらないから」

どうにも不器用なのよね、とキナは肩を竦めて見せる。

「いえいえそんな……キナさんはどうして始めたんですか？」

「私？　私は完全にお父さんの影響」

「もしかしてお父さん、Gガンダム好きでしたか？」

「そうそうよく分かったね、って弟共々モビルファイターじゃ分かっちゃうよね」

ふふつと楽しげに笑い、キナは語り始める。

「小さい頃から暇があればお父さんが私と弟にガンダム見せてさ……。所謂、英才教育されちゃったのよ。おかげで心の底から大好きになっちゃったけど。空手始めたのも、Gガンがきっかけなんだよね」

「きっかけはなんであれ、行動できるのはすごいですよ」

「我ながらそう思う。けど、同じものを好きだと言ってくれる友達は今々できないんだ。ネットにはこんなにもガンダム好きな女子がいるのにさ」

困ったように笑うキナ。その声には僅かに普段と異なる色を含んでいるように思えた。

「私がガンダムに夢中になってた時、周りの女の子はもうオシャレなんか目覚めてて

全然話が合わなかった……我ながら子供っぽかったかなって悩みもしたんだよ」

笑いを交えたままキナは、自分の昔話をコーヤへと話し始める。

その言葉にはまるで、かきぶたをなぞっている様な危うさを感じた。どうしてそうするのかは、分からない。けれどきつと必要なだろう。コーヤは静かにキナの声に耳を傾けた。

「自分が浮いてるって気付いたあとは、なんとか追い付こうって努力した。ハブられなように、みんなの輪に入れるように、興味がなくても必死に流行りを調べたりしながら。今じゃそれも自然と出来るようになったけど……やっぱりそれより深いところにあるのはガンダムなんだよね、お恥ずかしながら」

「……恥ずかしくなんて、ないよ」

彼女の言葉を聴き終えたとき、自然と彼女の卑下を否定する言葉がコーヤからこぼれる。

彼女は、変えようと動ける人なんだ。

「だからかな。ずっと、リアルでも話せる友達が欲しかったの。友達が欲しいって、そういうこと」

悪いね、ちっぽけな女で。キナは笑う。

何がちっぽけか。

小さいのは、私の方だ。

「……私もです。みんなと全然馴染めなかった。けど私はスギミさんみたいに努力は出来ませんでした。自分は違うんだ、って諦めるの早かった」

最初は些細な事だった。

「ガンダムとかガキっぽくない?」「バイクが好きとか、やっぱあの子変わってるね」

普段仲良くしていた友達が、自分の居ない場所でそんな風に話しているのを聞いてしまった。それだけだ。

以来好きなものを話題に上げるのがなんとなく怖くなり、解消されないまま時間だけが過ぎてあとはズブズブだ。話す相手はいても親しい友人は作らず、やり過ぎすことを覚えて、順当にぼっちになっていった。

答えを得ず、求めようともせず、曖昧で重たいモヤモヤの中を納得の上で歩いてきた。

そんな自分と彼女は比べるべくもない。スギミ・ユキナは、タケウチ・ミヒロが諦めたもやつく足枷を払い、走ろうと思う事が出来る人だ。

「だからキナさんは強い、って。そう思います。心から」

それがコーヤが抱いたキナへの率直な評価であり、敬意の言葉だった。

出来ればもつと気の効いた言い回しをしたかったが、シンプルな言葉はしっかりとキナに届いたようだった。

表示されるウインドウの中で、キナは顔を赤くしてそっぽを向くと、必要以上に声を大きくして、

「よ、よし！ 変な話はこのくらいにして。残りのアイテム発掘しにいかうか」

仕切り直し、と言うようにユキナのシャイニングガンダムが手の平を合わせてさらに両腕を振り上げる。

コーヤも同意し、頷いた時だった。

『WARNING』

警告を示すアラート音が、コーヤとキナのコックピットに鳴り響いた。

アクシデントの発生だった。

鳴り響くアラートに続き、メッセージウインドウが表示される。

内容はこうだ。

『軍事施設内の炉心が暴走。三分以内に当該エリアから離脱せよ』

メッセージが閉じると、180と表示されたカウンターが開かれる。眺めている今も179、178とリミットへと近付いていく。

「キナさん！」

「OK！ 脱出しよう！」

シャイニングガンダムがスラスターを全開にして飛び立ち、コーヤは後輪を滑らせて

ターン。退避エリアへ向けスタートする。

放棄された基地内という設定だけあって、整備されていない道は不陸だらけだ。散乱する瓦礫。陥没した路面。二輪が全力を發揮できない条件が多い。

(飛ぶかホバー移動できるようにしておけば良かった)

心中でばやきながら、瓦礫を巧みに避けクリアへと繋がるゲートを目指す。

残り時間は瞬く間に150秒。基地の外周部はまだ走り易い事を踏まえてもギリギリだ。

集中力は切らせない。そう気合いを入れ直した矢先だった。

「！」

GNアーチャーの駆るバイクがブレーキをかけ、急停止する。

唐突の行動に、キナも思わず足を止めて振り返る。

「どうしたの!?! パンク!?!」

「違う! 人が……人がいる!」

「人!?! 嘘でしょ!?!」

ミヒロの操縦室内のウィンドウは、バイクの車輪すぐ傍の映像をアップで表示している。

四角い窓の中には、瓦礫に倒れる一人の少女が映されている。

年は十二、三くらい。褐色の肌と翡翠色の髪と同じ色の瞳が怯えた表情でミヒロの機体を見上げている。羽織るマントはボロボロで、本当に戦場で逃げ惑う子供の様だった。

(NPD? けどこのミッションでNPDなんて聞いた事……けどダイバーならなんで)

「コーヤさん、急いで！ そろそろヤバイよ！」

「……キナさん、先に行つて！ 必ず間に合わせる！」

「……分かつた！」

返事をしたシャイニングガンダムは直ぐ様飛び去っていく。そしてコーヤは搭乗を一時解除。乗機を消してアバターの姿で怯える少女へと接触する。

「私の手を掴んで。ここから逃げるよ」

少女は驚きの表情でコーヤを見る。構わず、コーヤは再度機体呼び出す。操縦室へと少女が招かれた事を確認すると、バイクを再発進させた。

疑問は切り離れた。あとは状況判断だけで行動していた。

アナウンスは炉心の暴走と言っていた。時間になればこの一帯は爆発の炎に焼かれる事になる。

この少女が炎に飲まれる場面をコーヤは想像してしまった。

一も二も無かった。

これはバーチャル。NPDにしろ、ダイバーだったにしろ、命が失われる訳では無い。だが、こうして人間に見えてしまった時点で、コーヤには作り物と割り切る事は出来なかつた。

もう余裕は無い。極力減速せずに飛ばせるだけスピードを出す。

残り時間、60秒を切った。まだゲートは見えない。

「ミサイルポッド、パージー！」

バイクの両サイドから武装が外れ、地面に後方へと飛ぶように転がっていく。

僅かながら、加速が増す。舵も軽くなるが、気を抜けば制御を失う頼りない軽さだ。

「まだ、やれるー！」

残り30秒。

集中しろ。念仏の様に唱える。

視界に入っているのは正面の路面とマッピングのみ。ボロマントの少女がコーヤの服の裾を強く握るが、その事には気付いた様子もない。

マップの情報が正しければ、もうじきゴールが見える。

機体が突き当たり差し掛かった。ここを曲がれば、あとはゲートまで一直線。

後輪を滑らせ、ドリフトでコーナーをクリアする。

見えた。このステージのエリアゲート。

そして、その隣にいるシャイニングガンダムが。

「急げー！ 間に合うよー！」

なんですよ。どうしてよ。

待つてる必要無いのに。自分だけでも抜けられれば報酬は受け取れるのに。失敗すればこの時間が無駄になるって分かっているのに、なのに待つててくれるなんて……！

「ああもう……」

残り10秒。

「嬉しくなっちゃうな！」

残り、6秒。

「トランザム！」

GNアーチャーの駆るバイクが、赤く光輝く。解放されたGN粒子がさらなる加速を呼び、機体を一迅の颯風に変える。

こうなるともう制御は効かない。あとは倒れない様に支えるだけ。

ぐんぐんとゲートが近付いてくる。

シャイニングガンダムもゲートに飛び込むのが見えた。

「……間に合ったよ」

コンマ3秒の時間を残し、二人はミッションを成功させた。



生きた心地がしなかった。

壊滅する基地から脱出を果たした二人は、ロビーに帰って来るなりどつと疲れた様子でベンチへと座り込む。

「いや〜参ったね。あそこでトラップ経験したの初めてだったから焦った！ 本気で死ぬかと思った！ 加減しろ運営！」

やけくそ気味に言いながらも、満ち足りた顔でキナは笑った。

「本当にそれ……。話には聞いてたけど体験するのじゃ全然違う。私絶対にバルチャーにだけはなりたくないよ」

秒単位での死線を経験したコーヤは憔悴の方が濃いのが、声からは固さがとれている。

「そういえばコーヤさんのバイクってトランザム出来たんだね。太陽炉どこに付いてるの？」

「バイクの下の方。縦になってる筒のところ。作り込みが甘いから6秒しか使えないけど」

6秒。自分で言ってる情けない数字と思った。これでも最初は起動しただけでエンジンを起こしたので、動くだけマシンにはなっている。本当に動くだけだが。

「トランザムを入れるのは難しいって聞くけど、本当なんだね。良かったらその時の苦勞話聞かせてよ？ お茶でも飲みながらさ」

「……え？」

「えっ、て……この場でも言われるとは思わなかったな」

さすがにちよつと傷つくかも、とキナが口を尖らせるとコーヤは慌てて取り繕う。

「ごめんなさい！ いやでもでも、そんなの……楽しいかな？」

「楽しいに決まってるじゃん！ 私だって一応ビルダーだよ。弟とよく話しするし、保証するよ」

ミヒロの疑問に満面の笑顔でユキナは即答する。

なんの保証だ、と突っ込みたくなかったが、その時ミヒロは思った。

ユキナにとつての得とはこれなのだ。

友達となった相手に何かを提供してもらうのでなく、友達として繋がる事が得になるんだ。

（おばあちゃん。当たり前前の事、私もちよつと分かったかも）

ただそれだけが、得になるなら悪くないよね。

「……それならお願いしようかな。お店の方も良いところ教えて」
「かしこまり！」

本当にいい顔で笑うんだな、この子は。

自分もいつか、もつと上手く笑えるといいな。

ミヒロは友達の背に続くように腰を上げた。

「ああそういえば。急に止まってたけど、結局なんだったの？ 人が居たって言ってたけど」

「うん。人がいたの。NPDかダイバーか分からなかったけど……」

「NPD？ あのステージにそんな設定無いし聞いたことないけど？」

「じゃあダイバーなのかな？」

ミヒロが首を傾げると、ユキナは先のステージのログを確認する。

「……やっぱり私達の記録しかあのステージに残ってないよ？」

「なら私があつたあの子は一体……」

ゲートから出た時に居なかったのでステージNPDかと思つたが、そうでは無いらしい。

まるで幽霊との遭遇だった。この電腦の世界の中で一体何を、と思う一方で例外とな

りえる存在が思い当たる。

「ELダイバー、だったのかな」

第5話 砂漠に赤イカ

理解もしている。割り切ってもいる。それでも心の底からは納得できていない。称賛と喝采。

最初は興味も薄かった。好きなものを好きなように作れば満足できたはずなのに、いつの間にか分不相応にも証明が欲しくてたまらなくなっていた。

そんな浅ましさに自己嫌悪を覚えながらも、今日もこうして自分の作品を展示している。

誰かから評価を受けたいと思ってる。

何をしてんだろ。

今日何度目かの溜め息をついていると、だ。

視界の端。不思議なダイバーがいた。まだ幼い少女の姿をしているダイバーだった。

多くの人と同じく、自分のガンブラの前を通り過ぎる様に見えたが、ダイバーの少女は急に立ち止まる。

翡翠色の髪を靡かせて、褐色の肌をした少女は振り返り自分の作ったガンブラを見る。

まるで呼び止められて、振り返るように見えた。



乾いた熱砂の風が、キナの青い髪を撫でる。何となく頭の狼の耳に砂がたまった気がして違和感を感じて、手櫛で髪をすくように耳を手入れしていると、コーヤが買ってきた飲み物を手渡してくれた。

「ありがとうコーヤ」

「どうも。バーチャルなのに暑く感じるし、味も分かるのって、改めて思うと凄いですよね、GBN」

キンキンに冷えた容器の感触を確かめながら、二人は揃ってドリンクを啜り始める。現在、二人がいるのはペリシア・エリアだ。

ビルダー達の聖地として名高い砂漠の街へとコーヤとキナは訪れていた。

コーヤもキナも、このエリアに来たのは久しぶりの事だった。相変わらず多くダイバーが行き交い、創意工夫を凝らしたガンブラ達が町中に聳え立っている。

「件の人も出展してるんですっけ？」

「良くも悪くも目立つの作るから、すぐに分かると思うよ。時間はきっちりしてる相手

だから、ちゃんと来てるはず」

探索ミツシオンをこなして以来、二人でダイブする事が増えた事もあってか、コーヤもいくらか砕けた口調でキナと会話が出来るようになっていた。

リアルでの関係も、今までよりも近くなっている。まだ固さはあるが、キナの友人らと昼休みを共にする事もあり、少しずつではあるが懸念していたよりも良い方向に進展している様だった。

そして今回二人がペリシアに来たのはある目的があった。コーヤの言った件の人が、どうやら先のミツシオンで遭遇した正体不明の少女を見た事がある、らしい。

その人物とはキナのアバターの一人で、雑談中にコーヤが出会った少女の話題を上げたところ、似た容姿のアバターを見たと言うのである。

探索ミツシオンで遭遇した彼女がただのバグで現れたNPDなのか、それとも本当にE.L.ダイバーなのか。あるいはもっと別の何者か。少なからず気にかかっていたコーヤは、キナの中継ぎをお願いし、その人物と落ち合って話を聞くために呼ばれたのが、ここペリシアだった。

「普通に会うだけならロビーでいいのに」

「作品展示してるから、あんまり動きたくないんだってさ」

「ここに展示してるってくらいだから、すごいビルダーさんなんですか？」

「う、うーん……スゴいと言えばスゴいけど……まあ見れば分かるよ」

微妙な顔をしたキナが少し気にはなつたが、ひとまず意識から外す事とする。今は友人と一緒に聖地の姿を楽しもうと、コーヤとキナはガンプラの立ち並ぶ街道を歩く。

以前も来たことはあるが、この賑わいはコーヤも好むところだった。

いや、コーヤに限らず、ガンプラというコンテンツを好んでいるなら、誰もが等しく楽しめるだろう。

右手に緻密なディテールを凝らし、極限までクオリティを求めたサザビーがあれば、左手にはジムカスタムをベースに、既存パーツや自作パーツの増設で、装備大盛りのロマンを体現した作品もある。

中東風の屋台の並ぶ道の曲がり角には、旧キットのガンダムアスクレプオスを素体にしながら、稼働とプロポーションの両立を目指し、ダイナミックなポージングで展示されていて、さらに変形のパフォーマンズを見せてくれた。

そして、シャイニングガンダムを抱き抱えるゴッドガンダムの展示を見たキナは大興奮。布施と称し、自分のビルドコインを制作者に向けて送付したりもしていた。

目を奪われるほどの大作もあれば、確かな情熱を感じさせる粗削りな一品もある。

そしてそんな作品達を背にして記念撮影をする者たち。

ガンプラは自由だ。その精神をこれでもかと表している。

ガンダムとして見れば、コーヤも王道とは言えない作り方をしているが、この街はそんな自分の方針も肯定してくれている様に思えてくる。

多種多様なガンプラ達を眺めながらストリートを歩いていると、一体のガンプラの前でキナが歩みを止めた。

「新作ってコレか……ニトラさん変わらないな」

隣のキナがまた微妙な表情をして苦笑している。その様子を訝りながらもコーヤもその作品を見上げ、一言。

「げっ」

混じりけない純粹な感想を一言で見事に表した、と言っただろうか。

コーヤの視線の先にあるのは、グリーンを改造したガンプラである。

その作りは想像以上に独創的、だった。

まず上半身。グーンの原型を多く残しており、特徴的な三角頭もそのままだ。指先の爪が大きく鋭利になっているが、それほど大きな変化はない。

次いで下半身。ジオングのスカートアーマーが装備されている。幅を詰めてウエストサイズを調整し、裾の延長と細かいディテールが追加されている。これもまだいい。

問題となるのは脚部だ。二本の足ではない。かといってジオングの様なバーニアで

もない。

このグーンの足は触手だ。MSの頭が先端に付いている触手だった。Gガンダムに登場するデビルガンダムの眷属ガンダムヘッドよろしく、ジン、シグー、バクウ、グーン等ザフト系MSの首がある。その数が10本と分かったとき、これはイカの怪物だと理解した。

MSで作られた鋼鉄のイカ。それを彩るカラーリングは毒々しいまでの暗い赤と紫色。

モンスターだ。いきなりキシヤ〜と雄叫びを上げて、ニョロニョロと動き出しそうな姿に、呆気にとられるコーヤだったが脳裏には懸念が過る。

(コレ作った人と今から会うのか……)

如何に表現の自由と云えど、趣味には好き嫌いはあるのが人の常。この作品一つで作者の人柄が分かる訳ではないが、不安材料としては十分だった。

「心配になるのは分かるけど、大丈夫だよ。基本的にはいい人だから」
「ならせめて基本的って言葉は付けないでよ……」

肩を落とすコーヤを慰めるように、キナはぽんぽんと背中を叩く。

そんな二人へと声をかける者がいた。

「キナちゃん、やつほー！ 久しぶりっすね！」

コーヤとキナが振り替えると、手を振りながら駆けてくるダイバーが見えた。

身長はそんなに高くない。現実で言うところの150センチ程度くらいだろうか。頭にはゴテゴテとした大きなゴーグルを付け、タンクトップと、長袖を腰で縛ったツナギ姿は機械の整備中に抜けてきた様な格好だった。

そんな服装だけなら少年の様にも見えただろうが、元気に揺れるくすんだ金髪の三つ編みお下げと、身長割りに立派に主張する胸元の隆起が、女性である事を雄弁に示している。

「デニアちゃん！ ご無沙汰〜！」

キナが笑顔で応じて、駆け寄ってきたデニアと呼んだ女性ダイバーと両手でハイタッチをする。

「いえーいキナちゃん！ 元気してたっすか？」

「元気も元気！ 調子も上々で全体的に良いことの方が多いよ！ デニアちゃんの方は？」

「ん〜まあぼちぼちつてとこっすかね。ここのとこ忙しくて久々にログインしたところでした。……で、こちらが話しに出てたコーヤさんっすか？」

デニアがコーヤの方を向く。アバターの身長が170センチあるコーヤが、自然と見下ろす姿勢で初めて会ったデニアを見る。

可愛いアバター、と思った。特に特徴的だったのが、金色の瞳だ。金属質よりも暖かみのある蜂蜜色の瞳がコーヤを見つめている。

「初めまして。私はデニアです。よろしくです」

「こちらこそはじめまして、デニアさん。コーヤです。今日はよろしくお願いします」

「お話はキナちゃんから色々聞いてるつすよ。なんか凄いバイクに乗ってるんすよね？ あとで見せて欲しいんすけど、いいつすかね？」

「ありがとうございます。そんな、大したものじゃないですけど……デニアさんのガンブラはその、凄く個性的、ですね」

「個性的。言葉に窮した時に出る常套句で作品への感想を述べると、デニアはきよとんとした顔をした。

「選びを間違えたか？ 内心冷や汗を掻いていると、デニアはコーヤとイカを交互に見やり、やがて……爆笑した。」

「……ちが、違う違う！ 私のじゃないつすよ！ こんなゲテモノ作ろうなんて、ひひひ無理！ 無理つすよ！ ああお腹痛い」

「……キナさん、どういふことかな？」

温度のない目が、キナを見る。

「今日会う相手が二人いるって……話してなかった……よね？」

キナはばつの悪そうな顔で謝罪をして、目を逸らす。

そして耳まで赤くしたコーヤが、笑いつばなしのデニアに頭を下げる。

「いいっていいってお構い無く。いや〜でもこの手のゲテモノ作るのも、たまに面白いかもしれないっすね」

ニタニタとデニアが笑って見せると、また別の声が三人の輪に割って入る。

男の声だ。

「だったら作ってみるか？ そのゲテモノを」

呼び掛けてきた男の声に、三人は同時に振り返る。

そこに居たのは、長身長髪の若い男だった。

細く縦に長い体と肩まで伸びる真っ直ぐな黒髪。左目には大きな眼帯を付けており、露出した右目は異様に鋭い。細い顔付きもあってカマキリを思わせた。さらに砂漠のエリアには似つかわしくない、黒字にグレーのストライプの入ったスーツと無地のネクタイという装いが、反社会的勢力じみた攻撃的な雰囲気を出して上げている。

怖い人、とコーヤは思った。例えばバターと分かっているもお近づきにはなりたくないタイプ。

だが、デニアは嬉しそうにまっしぐらに駆け寄っていった。

「ニトラ久しぶりっす！ いい加減普通な方に宗旨変えしてると思ってたから、相も変わらずゲテモノノしてて安心したっすよ！ ナイス、ゲテモノ！」

「ははは、テメエもだなニア、ゲテモノゲテモノ連呼するな。これでもカツコいいって思ってたんだから、ただでさえ脆い俺の心が本格的に瓦解するからやめて差し上げろだコラ」

言い方こそ剣呑だが、ニトラと呼ばれた男は上機嫌に口角を上げて笑って見せる。口元に異様なほどギザギザした歯がちらりと見えた。

「ニトラさん今日はどうもね。わざわざ時間作ってもらっちゃって」

キナも気安い感じでニトラに挨拶をすると、ニトラも応じる。

「いやむしろ礼を言いたいのはこのっちだ。気になる話だったからな。で、そちらの方が例の？」

「そうです。コーヤ、この人がもう一人のニトラさん」

キナが掌を傾けてコーヤを指し示すと、コーヤは背筋を伸ばしてニトラに一礼した。

「ど、どうもコーヤです。今日はご足労頂き、ありがとうございます……」

「こちらこそ、情報を提供して頂けて感謝しています。さっそくで悪いのですが、場所を移して現状の確認をさせて下さい」

「あ、はい……」

デニアの相手の時とは打って代わっての物腰の柔らかさに、コーヤはちよつと意外に思いながら一同は移動を開始する。



ペリシアエリア内の茶店へと移動した四人。大きなパラソルを日陰に、木製の丸テーブルを囲んで、コーヤは前回の探索クエストで出会った少女についてニトラに説明をした。

「褐色の肌と翠色の髪。ボロボロのマントを着けた12歳くらいの女の子……容姿を聞く限り、俺が見た子とほぼ一致しますね」

「ニトラさんはあの子と面識があるんですか？」

「いいえ。面識なんて程ではないです。作品展示してる最中、似た感じの子が俺のガンブラを見てて。珍しいな、って思ってたら目が合って、そのまま怯えた様子で逃げてくださいました」

「それ、単にニトラの顔が怖かっただけじゃないんすか？」

「俺もその時はそう思ったし、それがショックで覚えていた様なものだ。コーヤさんの

話をキナから聞いた時は結構驚いたんだぞ」

「デニアの茶々にニトラは目を細めながら言う。残念ながら、それはコーヤの望んだものには遠い答えだった。」

「あの子って本当にELダイバーなんでしょうか?」

「分かりません。けど、ミツシヨンの話を聞くと、そうではないと断言はできませんね。もし未確認のELダイバーだったら、尚更放つてはおけなくなる」

「ごめん質問なんだけど、ELダイバーってそんな放置したらヤバいつて認識なの? ちよつとよく分からないんだけど」

控えめに手を上げるキナの方に三人の視線が向く。

「変な事言ったかな? とキナが苦笑を浮かべると、コーヤがシステムウインドウを開いてみせた。」

「利用規約、書いてあるよ」

「そうなの? てか、こういうの同意を押しただけなんじゃないの?」

「キナちゃんってGBN歴一年つてところつすよね。あの大騒ぎを知らないなら、仕方ないんじゃないっすか?」

「大騒ぎってアレだっけ? 第二次有志連合とかいう」

「そうだ。その中心になってたのが、電子生命体ELダイバー。彼女の存在がGBNに

深刻な問題を与えていた事が発覚して、処遇についての盛大な一悶着があったわけだ」
あの一戦を知らないダイバーはおそらくいないだろう。

チャンプの率いるフォースアヴァロンを筆頭に団結した大軍勢に、小さなフォースが戦いを挑み勝利を納めた伝説的な戦いだ。コーヤがGBNを始めたのはその直後の時期だったが、あの戦いを語るダイバーは何人も目にした事はある。

「そこまでは知ってる。でも最終的にELダイバーを消さずにパッチが実行できて、大団円じゃなかった？」

「大団円なのは間違いないが、その後もELダイバーが増えてきてる。その辺はお前さんも聞いたことあるだろう？」

「そりゃあね。今は80人くらいいるんだっけ？」

「うん、大体そのくらい。その一人一人がGBNの方で保護されてて、それで新しくELダイバーを見つけたら、ELバースセンターで登録をすることになってるらしいの」

ほらここ、とコーヤが利用規約を指で示す。キナも今気付いたと、うんうんと納得し領いて見せる。

「今じゃ珍しくもないっすけど、ELダイバーがイレギュラー寄りなところは変わってないっすからね。システムエラーを防ぐ上でも必要っす事っすよ」

「そういうわけで、だ。もし彼女がはぐれのELダイバーなら早め目に保護しててやら

ないと面倒になる。そのためにも確認先決。E.L.ダイバーかどうかはまだ分からないが、既に登録されていないか運営に問い合わせせてみる」

ニトラが今後の方針を語る。それを聞いてコーヤは内心少しだけほっとした。

運営に連絡は考えていたが、どう連絡するか悩みどころであつたため、この助け船がありがたかつた。

「すみません、何からなにまで。ありがとうございます」

「俺としても遊び場が荒れるのは避けたいところですから。運営からの回答次第ですけど、コーヤさんにも例の女の子の搜索協力をお願いしたいと思つてます。もちろん、デニアとキナにも」

「私はOKつすよ。当面はちよくちよくログインできると思うつすから」

「私も意義無し。聞いている限り、放つてもおけないみたいだし、いつでも言つて」

デニアとキナもそれぞれ頷いたり、サムズアップを見せて同意を示す。

「助かる。それじゃあ、運営からの回答が来たら連絡する」

これで今回の集まりは解散となつた。進展らしい進展は少なく、肝要な部分がまだふわふわしたままだが、協力者が増えた事は一步前進だとコーヤは思つた。



「ね？ 言った通り基本的にいい人だったでしょ？」

「……そうだったね」

茶店を離れ、広場のガンブラ達を眺めながらの帰り道。キナの言葉にコーヤは頷く。いつの間にか話の中心に立ち、方針をまとめてくれたニトラに対し、コーヤも最初に覚えた不安は無くなっている。

「けど、何であんなに積極的だったのかな？」

「GBNを荒らされたくないからって、言っただけだったっけ？」

「うん。まあそうなんだけど」

納得はできるが、それでもこんな不確定な話に乗り、さらに率先して舵を取る事に違和感がある。

何か裏があるのではないか。感謝とともにそんな疑問が浮かんできてしまう。

その数日後。GBN運営から連絡がニトラの元に届けられた。

第6話 求めたものは

GBN運営からの回答を要約すると以下の通りだ。

現在報告のあつた情報と一致するE.L.ダイバーは登録されていない。また、裏付けとなる情報も不十分であるため、運営側は検索を行う予定はない。

GBNのロビーに集合したコーヤ、キナ、デニアの三人は二トラから運営の回答を聞かされた。

結論から言つて、さつそく座礁した。

「とまあ、こういう訳になりました。すみませんコーヤさん」

二トラの話を終えると、コーヤは落胆の表情をした。

それでもコーヤは運営が冷たいとは思わなかった。こういう曖昧なタレ込みやそれ以外の通報や報告は増えているので対処に追われているのは想像に難くない。

「やっぱり運営は動いてくれないんですね」

「本来いないNPDが乱入してしまったバグやエラーというのがお上の見解だ。他にも似たような報告が相次いで、次のアップデートで調整をすらしらしい」

「なんか振り出しに戻っちゃったみたいだけど、割りと想定内な感じだね」

「たった二人だけの証言っすからねえ。まあでも、ニトラは探すつもりでいるんすよね？」

「まあな」

「デニアの問いに頷き、ニトラはメッセーজウィンドウを閉じる。

運営の対応にも特に気落ちしている風もなく、推定ELダイバーの少女の捜索にも変わらず前向きの様子だ。

だがそんなニトラの積極性にコーヤは感謝とともに違和感を強く感じてしまう。

「そういうわけで、キナとコーヤさんには申し訳ない。運営がこう回答を出した以上、探す云々は俺の趣味で続けます。もしあの子に出会えたら連絡しますよ」

「いえ、ありがとうございます。持ちかけたのはこっちですし。でも、無理しないで下さいね」

「無理してるつもりはありませんよ。あくまでGBNを続ける中で、ついでもみたいな感覚ですから」

「……そう、ですか」

「ついで、とニトラは言うが、コーヤは彼の言葉には別の意思があるように思えた。

この人はどうしてこんなにも拘るのだろう。何の得があるのだろう。」

運営からも袖にされたと言うのに、探すつもりでいる。この地球どころか宇宙さえも内包するGBNの中、たった一人の女の子をだ。それを100パーセント善意だけでやるとはさすがに思えなかった。

失礼とは思っても警戒し、相手の裏側を考えてしまう。それはコーヤの経験から否応なしに気になってしまふ事なのだろう。ニトラに対し後ろめたさを感じながらも訝し気な視線を送っていると、デニアがパンつと手を叩いた。

コーヤ達が一斉に目を向けると、デニアが満面の笑みを浮かべている。拍子を打ったタイミングを考えるに、どうやらコーヤ達の話が終わるのを見計らっていたみたいだった。

「まあ運営からはフラれちゃったけど、これも何かの縁ってことで。これから皆でミッシヨンやらないっすか？ コーヤちゃんのバイク、見たくて見たくてウズウズしてたんすよね〜」

へらへらと笑い、モジモジ体をよじりながらデニアは言う。脈絡を感じさせない提案だったが、デニアが今日の集まりに参加したのはこれが目的だったのだろう。

その提案へとぴつと手を挙げ、一番に参加の名乗りを挙げたのはキナだ。

「私はもちろんOKだよ。久々に二人と組んでやるの楽しみだったし」

流れできつとミッシヨンに行くと、リアルで話していた時もそう言っていた。

楽しそうにしていたユキナを知っているのもあって、コーヤも提案に賛成すべく小さく手を挙げて見せる。

「私も大丈夫です。でも、そんなに期待しないで下さいね?」

ガンブラの出来も、腕前も。コーヤが一応念押しに付け加えると、最後にニトラが手を挙げる。

「俺も問題ない。ミッションの方は何に行くか決めてるのか?」

「もちろんっす! 丁度四人がかりならクリア出来そうなのあつたんすよ。じゃあ早速申請して来るっすね!」

了承を得るなり、デニアは待つてましたとばかりにテキパキとミッションを申請し始める。

本来の目的の成果は全然だったが、今はミッションを楽しもうと意識を切り替えた。

／／

ミッションが始まる。

デイメンションの青空に四つのゲートが開き、それぞれの門から四体のガンブラが出現した。

コーヤの駆るGNアーチャーが上空から一面の荒野に着地する。今回もリアに追加武装を装備しており、10連装ミサイルポッドを二基と火力面の強化を図っていた。

機体の安定を確認しコーヤは空を見上げると、雲ひとつ無い青空に大きな太陽が輝いていた。砂埃の舞う大地を焦がす様にギラついた陽射しが注いでいる。

不陸の多いステージだが、バイクの走行に大きな支障は無さそうだ。

前回の探索ミッションからバランスをいじった甲斐があった。そう思っていると、GNアーチャーの白い装甲に影が落とされる。コーヤに次いで現れたキナのシャイニングガンダムのはつた影だ。シャイニングガンダムは空中で姿勢を調整しながらコーヤのバイクの後ろへ着座する。バイクが大きいお陰でタンDEMが可能と分かってから、こうして移動する事が多くなっていた。

「飛んだまま座るの上手くなったね。あんまり揺れなかった」

「コーヤが速度を調整してくれるし、何度も練習させてもらったから。あ、スピードは加減して。私が乗っても多分二人より速いと思うから」

「了解」

コーヤは応じながら、後方へと振り向く。コーヤの仕草と連動する様にGNアーチャーも後ろを見ると、デニアとニトラの機体、レギンレイズとガンダムレギルスが追いかけてくるのが確認できた。

デニアのオレンジ色に塗装されたレギンレイズは、鉄血シリーズの機体のパーツをミキシングしたカスタム機だった。

見て取れる追加パーツとしてはまずバックパック。ユーゴーのランドセルにレギンレイズ本来のブースターとガンダムバエルのウイングを組み合わせた複合装備だ。そして得物にはユーゴーの円月刀に長柄を組み合わせ、鍛え直した大型の斧だ。ファンタジー作品の様な大振りな刃物を片手で取り回す姿はパワフルで、原典の世界観に沿うとても「らしい」作りをしている。

しかし最たる特徴は足回りにある。彼女の機体はローラーブレードを履いてるのだ。車輪が縦一列に並ぶインラインタイプのローラーだが、荒野をもともせずに舗装道路を走るような軽やかさで見事な滑走を見せている。

ローラーで軽快になった機動力を、バックパックを構成する複数のブースターでさらに上げるといふ、コンセプトの明確な機体。それがコーヤの持ったデニアのレギンレイズへの印象だった。

「話は聞いてたけどすつごいすね！ てか長！ これ縦のHG二体くらいあるすすよね！」

興奮気味な通信とモニターに目をきらきらさせたデニアの顔が映り、追い付いてきたレギンレイズがバイクの隣にピタリと追い付いた。彼女の心情を表す様にレギンレイ

ズもどこかコミカルな動きでバイクを眺めている。

「デニアさんもいい機体ですね。今日はよろしくお願いします」

「はい！ お願いされたっす！」

器用にくるりと回ったレギンレイズが振り返り様にピースをする。騒々しきは相変わらずだが、デニアの操作技術はかなり高そうだ。

「ニトラー！ 早くしないと置いてっちゃうっすよ〜！」

「わーってる。これでもレギルスさんには精一杯なんだよ」

デニアのレギンレイズが後ろに向かって腕を振る。コーヤも一体だけ遅れる形となったニトラ方を確認する。

30mほど離れた位置で一定の距離を保ちながらニトラのガンダムレギルスは三体に着いてきている。

おどろおどろしい赤いイカのグリーンを見た事もあってコーヤどんなキワモノかと思っていたが、彼の白いレギルスは想像よりかなりまともだった。

原典の暗めのトリコロールでも火星を思わせる赤でもなく、ニトラのレギルスは青白磁を思わせる青みがかった白で染められていた。ヴェイガン特有のフィン状のスラスタアの鮮やかや浅葱色と相まって、毒々しさよりもどこか神秘的に見える。

その一方で奇抜な変更も多い。メインカメラを覆うバイザー状の装甲や、除去したV

字アンテナの代わりに頭頂部に設けたブレードアンテナ。そして肩の上から生える一對の腕、蛇腹構造の尻尾パーツなど人の形からはみ出た彼らしい作りも多くある。尾に配置されるはずのレギルスキャノンは二門に増設されてウイング部分のジョイントに装備されている。ビームライフルとシールドも装備しているため、単純な火力面なら原型機以上だろう。

さしずめ四本の腕を持った異世界の魔人。相応にファンタジックなGBNには中々似合いの機体でなからうか。

今はバイクとスケート着きの機体に離されて少し格好はつかないが。

「ほーら頑張つて！ 本当に置いてっちやうよー！」

キナもニトラに向けて声をかける。

乗ってるだけなのに、とコーヤは苦笑をした。

「だったら、その席代わってお前も自力で走れよ」

「うわあ、女の子に背中から抱き付きたいなんて、ニトラ相変わらずやらしいっすね……マジ引くわ〜」

「やるか。ていうか日頃からやってるみたいに言うんじゃねえよ」

「常習犯でもそうじゃなくても、どっちにしるダメー！ ここは私の指定席だからー！」

「ちよつ、それ私も初耳だよー！」

うろたえるコーヤに三人から笑い声上がる。

過酷な荒野のステージに流れる和やかな空気を感じていると、バイクを観察していたニトラがコーヤへと言う。

「まあそれはそれとして、実際良いなガンプラの乗れるバイク。俺も今度試しに挑戦してみるかな」

「いいっすね！ じゃあみんなでバイク乗って、レッツ世紀末やりませんか!」

「いや、世紀末はやめておけて……」

軽口を叩きながら、一行は走り抜けていく。

そんな中、コーヤは心の中で「GBNでガンプラツーリング」と少し嬉しそうに反芻していた。



今回のミッション「熱砂の攻防戦」の舞台、キンバライト基地を模した似て非なる戦場へ、四機のガンプラは到着した。

宇宙へと打ち上げられようとするガンダム試作2号機を積んだHLVの破壊を目的とした、0083第四話をベースとしたミッションだったが、これは単なる追体験では

ない。

原作にはないアレンジが追加された、高難易度ミッションの一つとして再構成されている。

原典ではH L Vは一基のみだったが、このステージは二基存在し、両方の破壊が勝利条件となっている。

そしてH L Vを守るため、ジオン残党のMSが大量に出てくる。決死戦の覚悟の古兵と設定されたN P Dはどれも強力で、さらには制限時間付きというシビアな条件下で展開されるミッションである。

以前デニアとニトラが二人で組んで挑んだが、コテンパンにやられたそうだ。

聞いているだけでも難しそうなミッションだったが、コーヤにとつては初めての高難易度ミッションという事もあって、交戦エリアを目前にして静かに息を飲んだ。

「まだ敵影は見られないっすけど、そこら中からうじゃうじゃ出てくるんでご注意下さいっす」

「了解！ デニアちゃん、コーヤ、作戦通りにお願いね！」

「かしこまりっす！ ニトラもキナちゃんの援護ちゃんとやるんすよ！」

「安心しろ。突っ込みたがりのフォローは得意分野だ……では行こうか」

「は、はい！」

四機のガンプラは二人一組となって別れ始める。コーヤとデニア、キナとニトラという班分けだ。

作戦は二手に別れてそれぞれH L Vを叩くというもの。四人がかりで一基ずつ叩く事も考えたが、おそらく正直に進んでいたらタイムリミットの方が早いと考えた結果の選択だった。

コーヤとデニア、キナとニトラの振り分けとなったのはそれぞれの長所を鑑みてだ。ともに機動力に優れるコーヤとデニアは相性がいい。対し、飛び道具がほとんどないキナのパートナーに中距離火器を多く持つニトラが相棒となった。

周囲の状態を注意深く確認しながら、GNアーチャーはレギンレイズと並び標的のH L Vを目指す。二種類の轍を残しながら進む二体の囿はまだ開けていて視界はいいが、標的に近づくほど周囲の景色は起伏の激しい鉾山地帯へと変わっていくのはリーダーから読み取れていた。

(大丈夫かな……)

プレッシャーと初めて組む相手とのコンビプレイへの緊張でコーヤが固くなっていくと、GNアーチャーの肩をレギンレイズが、ポンと軽く叩いた。

「大丈夫つすよコーヤちゃん。リラックスリラックス」

「あ、いえ……お気遣いどもです。デニアさんって普段からこんな難しいミッションを

よくやってるんですか？」

「そうっすねえ……まあそれなりに出来る範囲でつてところかな。今回は欲しいモノがあったから、その小遣い稼ぎつてのも理由なんすけどね。お付き合い頂けて、感謝感激っすよ」

モニターにグッとサムズアップをするデニアが映る。

なるほど確かに健全な楽しみ方だ。素材集め、資金集めで野良でパーティーを組むのはこうしたネットゲームでは常にある。人見知りのコーヤでさえ経験があるくらいだ。きつと彼女はこうして多くの臨時パーティーを組んできたのだろう。

「勝算はあるんですか？ 私もうすでに自信ないんですけど……」

「前にニトラと二人でやった時はコテンパンにされちゃったんすけど、今回は四人もいるし、なんとかなるんじゃないんすかね？」

「根拠に乏しい事はよく分かりました……」

「元よりダメもとみたいなものだし、本当に気負わなくていいっすよ。それに丁度話してきたと思っってたんで」

「……何かありましたっけ？」

意味深な言葉に、コーヤは今までのやり取りを思い返してみるが、思い当たる節がない。

小首をかしげるコーヤだったが、

「ニトラが例の子に拘る理由、気になってるんでしょ？」

デニアの指摘は凶星を突いていた。

それはコーヤが抱いていた疑問に他ならないが、極力平静を保ちながらコーヤはデニアに問い返す。

「どうしてそう思うんですか？」

「コイツなに考えてんだろ、つて……ずっと顔に書いてあつたつすよ」

さすがGBN、そんな機微さえ反映させようとは。感情を読み取られていた事にコーヤはうなだれ僅かに顔を赤くする。

「でもそう思つて当たり前つすよ。私だつて、同じ事思つたんすから」

「そんなんですか？」

「そうなんすよ。で、問い質してみたらまあ……なんと言えない回答が返つてきましてね」

「なんとも言えないつて……デニアさん、右！」

「ガッテン！」

コーヤが敵のザクを目視した時にデニアのレギンレイズは既に動いていた。姿勢を低く、バーニアを目一杯に吹かしながら荒れ地を滑走し、ザクへと一気に距離を詰める。

ザクは近付く相手に対応しようと、武器をマシンガンから持ち替えようとするが、遅い。

「星ひとつ」

レギンレイズが上段から大斧をふるった。一目で重量級と分かる分厚い刃が、ザクの頭頂を砕き、そのまま胸半分までめり込む。ザクはマシンガンを手にしたまま背から地面へと倒れ込んだ。

接近から一撃で敵を倒すまでの鮮やかな動きにコーヤは、すご、とだけ短く感嘆した。同時にデニアが確かな実力者という事も分かり、ミッシヨンも成功できるのでは、と思えてきた。

「サンキュー、コーヤちゃん。星ももらっちゃって悪いっすね」

「いえ、デニアさんの方が動くの早かったですし。というか、凄いですね」

「そっかな？ 結構速攻には自信あったから、そう言ってもらえると嬉しいっすね」

「……それで、さっきの話ですけど」

「うん。そうっすね。こっから追々進みながら話をしてくっすよ」



コーヤとデニアが雑談をしていた一方で、キナとニトラは既に会敵していた。

鉱山への入り口を守るように立ちはだかるザク、グフ、ドムといった往年のMSを相手に、シャイニングガンダムはビームソードを振り抜き、果敢に突貫する。

正面、ザクが振り下ろしたヒートホークをシャイニングはビームソードで受け止め、反撃の押し蹴りで弾き飛ばす。勢いに押されたザクは、後方にいたグフを巻き込んで転倒。その瞬間を見逃さずにレギルスがライフルからビームを撃ち込み二体をまとめて撃墜する。

「……それ、マジなんですか？」

「マジもマジ。これ以上なく大真面目だよ」

奇しくも、キナもニトラに何故件の少女に拘るのかを質問していた。そしてキナはその答えに目を丸くしたのである。

「いや噂には聞いた事はあるけど……いや分かりますよ。けど、後の方も本気で言ってるんですか？」

「……ああ」

ニトラは頷きながら、背中への二門のレギルスカノンで、ドムを撃ち抜く。

これで正面の入り口はクリア。自分も前に出るべきと判断し、ニトラはレギルスの掌からビームサーベルを発振させ、もう一度キナへと答えを告げる。

「ELダイバーが本当にガンプラの心を感じられるなら、俺は……俺のガンプラの本音を確かめたい」

第7話 心の井戸のキャパシティ

キンバライト鉱山内、岩肌に囲まれた敵基地の真つ只中。背にしたHLVを守る様に、三本の光剣が踊り敵機の進行を阻んでいる。

光剣は敵陣のNPDたちのモノではない。モノアイMSの前に立ちほだかるのはだつた一機、四本腕のガンダムレギルスだ。そして三本の輝きは、ライフルを持つ右手以外から伸ばすレギルスのビームサーベルだつた。

射出前のHLVに到達した時、キナHLVの破壊に当たり、ニトラは破壊作業に集中させるため殿として敵機の足止めを買って出ておおよそ二分。

何機目かのザクを切り捨てた時、背後から大きな爆発が聞こえた。次いで、コックピットのメッセージに報告が入る。

キナのシャイニングガンダムが、目標を破壊。

丁度キナからも通信が入る。

「やりました！ 次急ぎましょう！」

「了解だ。先にいってくれ。正面に目眩ましのバスターを撃つ。そうしたら俺も飛んでく」

「わかりました！」

キナが返答した直後、レギルスの胸が輝き、ビームの奔流がジオン残党の群れへと迸る。ビームは乾燥した大地を焦がし、粉塵を盛大に巻き上げ一面を黒く覆い隠す。

レギルスはすぐさま反転し、キナがいたブロックへと侵入すると、目の前には破壊されたH L Vの残骸があった。

キナはシャイニングフィンガーソードを使ったのだろう。真一文字に切り裂かれたH L Vはステージ内のオブジェクトとして残地されており爆発や消滅する気配はない。ならば、とレギルスが破壊されたH L Vを足場にして大きくジャンプする。背や足のフィン状スラスターを噴かして鉦山に設けられた射出用の縦穴から、砂漠の日差しの注ぐ外界へと舞い上がった。

鉦山から脱出した直後、シールドを構えながら周囲を警戒するが、狙撃などの攻撃はない。

まずは第一段階クリア。ニトラは嘆息し、リーダーに映るキナを追いながらデニア達の救援に向かおうと進路をとった時、キナから通信が入った。

「……ねえニトラさん。さっきの話、思い直したりしないんですか？」

「ああ？　だから言った通りだろ」

眉一つ動かさず、ニトラは気だるげな声で応じた。

ニトラには自覚も無いだろうし、キナも面と向かって言うつもりもないが、彼のアバターが抑揚のない声で喋ると結構怖い。

「E.L.ダイバーからガン普拉の心を聞きたいというのは分かったよ。けど、ガン普拉を作るのをやめる必要はないでしょ」

通信ウインドウに映っている、青い耳をピンと立てたキナの真剣な表情に、ニトラは目を伏せる。

正にその通りだ、とまるで他人事の様に見えるが。

「確かに……言っちゃなんですけど、ヘンテコなのばかりですけど、いいじゃないですか。ガン普拉は自由です！ それに、今度は何しでかすんだろうって、嘘偽りなくちよつと楽しみにしてるんですから！」

「……ああ。俺も楽しいよ。だから今も飽きもせず作ってられる」

ニトラの言葉に嘘はなかった。気の滅入るサフチェックも、うざったい表面処理も、予期せぬ損傷の修理さえも。完成した形を指先から感じられるから、ずっと続けていられた。

続けている内に、外の世界を意識し始めるのもまた、自然な事だった。

自分が丹精込めて作った作品を、より多くの人に見てもらいたい。

そしてSNSへと初めて投稿した時。

「けどな、どうしようなく気になっちまうんだよ。星の数がよ……」

井の中の蛙だったニトラが見た世界という大海は、恐ろしく静寂で、自分などには無関心だった。

まっさらな状態から評価されるのは、特別なほんの一握り。そしてニトラは特別ではなかった。痛烈だが、それだけの事だった。

それでももつと上手く、もつと凄く作ればきつと変わる。好きという感情だけを燃料に、喝采はおろか罵声さえもない沈黙の中で、ニトラはひたすら心に浮かぶ形を作り続けた。

作り続けて、多少は変わったかもしれない。ゼロが正の数にはなった。だが心の井戸に貯まったのは、感謝や満足感だけではなかった。

「俺はゲテモノ屋つてのは承知してる。技術だけでも、俺より凄いやつなんてゴロゴロいる。センスやそれ以外の発想だつてそうだ。そんな世界に身の程知らずに混じろうと、混じりたいなんてまだ思ってる」

頑迷で浅ましく意地汚い、身の程知らずの承認欲求。

いつまでも捨てられない心をずるずると引き摺っていた時に、キナから持ち掛けられた話を聞いてニトラは思ったのだ。

これを機にけじめを付けよう、と。

「上なんて見たら切りないよ、ありきたりだけど。人の目なんて気にしないで、今まで通り好きな様に作ればいいじゃん」

さつきからキナがニトラにかける言葉は、確かに正しい。他人が気になるなら、表に出さなければいい。そして認められないなら手段を変えればいい。

それをしない自分を愚かに思いながらも、ニトラは言う。

「俺だけなら、それでも良かったんだ」

「だけなら?」

「ああ、キナから話を聞いた時思い出したんだよ。俺が例の子を見た時……」

あの日、仕上がったばかりのレギルスを展開した時にいた、不思議な女の子の事を。

彼女がELダイバーかもしれないと聞いたとき、思ってしまったのだ。

「もしかしたら。レギルスさんの声を、あの子は聞いたかもしれないんだ」

「じゃあ、コーヤのELダイバー探しにのったのって……」

「そうだ。俺が散々切り刻んで、継ぎ接ぎをして作ったコイツらが欠片でも喜んでるのか、それとも見るに堪えない無様なゲテモノにされて泣いているのか、今はそいつが気になって仕方ない」

操縦幹を握るニトラの手に力が籠められる。それはこのミッションのために入った力ではない。

もつと先の、理性ではどうしようもないモノを欲するように、ニトラは言葉を紡いだ。「あの時、あの子は俺のレギルスを見たんだ。まるで呼び止められるみたいに振り返ってレギルスを見たんだ。その時コイツがあの子になんて言ったのか、ただそれを知りたい。知って、そしてケリを付けたい」

もしそれが悲鳴や泣き声だったなら。

ニトラはなんの憂いもなく、けじめを付けることができる。

きつと好きという気持ちにも決別できる。そう思ってしまったのだ。

／／

コーヤとデニアも次々と敵機と遭遇した。

H L Vへと続く浅い溪谷の合間のどこに潜んでいたのか、わらわらと沸いて出てくるジオン軍のMS達が幾度となく砲火で行く手を阻もうとする。

マシンガンやバズーカは勿論、クラッカーや果てには巨石を投げつけてくる敵NPDだったが、単身先行するコーヤは積極的に交戦しない。

コーヤは全神経を集中して敵を避ける。バイクに股がる姿勢を低くして弾丸を避け、間近で爆発の炎にもたじろがず、先へ、先へ、先へ。

1機、2機と立ち塞がる敵NPDには目もくれず、GNアーチャーは飛び込むように一つ目MSの群れの中を巧みに掻い潜る。

通過したGNアーチャーを追撃しようとするジオンのMS達は反転し、背後から狙撃しようとする構えを構える。

それが命取りになる。

「いっただきますっ!」

レギンレイズの大斧が、無防備に向けられたザクの背へと襲い掛かり、鈍い音を立てて斧の刃がザクの背中に埋まる。そしてレギンレイズは大斧にザクを噛ませたまま力任せに振り回し、機体ごと手近にいた別のザクへと叩きつけて二機まとめて鉱山の岩肌へと叩きつける。

圧倒的な暴力にぐちゃぐちゃになった二機のザクが完全に沈黙すると、レギンレイズはすぐさま斧を構え直し、先を行くGNアーチャーを追った。途中邪魔をする敵機はいたが、大斧で蹴散らし、時には足払いで転倒させながら、GNアーチャーへと並走する。「ありがとっすコーヤさん。やっぱしこいつらおつむの方は高難易度じゃないっすね。ちよつと硬いし一発は重いけど、これならどうにかなりそうっす……コーヤさん?」

「あ、大丈夫です。聞こえています」

デニアの声に、コーヤは慌てた様子で答えると、通信ウィンドウからデニアの蜂蜜色

の瞳が、少し心配そうに見つめているのが見えた。

この道すがら。敵機を倒す片手間に、デニアからニトラがELダイバー探しに積極的な理由を聞いていた。

コーヤが思っていた以上に、ニトラが思い感情を傾けていた事を知って、どう受け止めたらいいか正直戸惑っていた。

「ニトラさん、本気なんですよね」

コーヤの言葉にデニアも頷いて軽く苦笑をしてみせる。

「うん。タチの悪い思い込みみたいな話っすけど」

「……はい。でもどうして、運営側認知しているELダイバーには掛け合わないんですか?」

他にもGBNに登録されているELダイバーはいる。彼らの内の誰かに頼み、ガンプラの心を確かめさえすれば答えは得られるだろう。

「そりややつぱり、恥ずかしいからじゃないんすかね? ていうか、こんな下らない確認のために運営呼びついたりなんてできないでしょ?」

確かに、とコーヤも納得してしまう。それに想像の域を出ないが、ニトラがGBNを荒らされたたくないという言葉が嘘と感じられないものもある。

「それに分からなくもないのよ。模型にしろ絵にしろ漫画にしろ、世の中の厳しさを頭

で分かっても、心が追い付いてこないのって結構キツイから……」

きらきらしている目を伏せて、デニアは言った。

出会ってからずっと、明るい表情だったデニアの顔に初めて影が射したようだった。

語尾の「つす」も抜けている。

「それに、なんだかんだでニトラには世話になつてるつすからね。どんなバカな真似でも、付き合つてやるのも悪くないって私は思つてる」

「その後、確かめてからニトラさんどうするつもりなんですか?」

「もう作るの自体を辞めるつて言つてたつし、最悪GBNも辞めちゃうんじゃないつすかね?」

GBNをやめる。あつげらかんとしたデニアの言葉に、コーヤは一瞬我が耳を疑つた。

「デニアさん!! それ……いいんですか!! ていうかやめちゃうつて言つたんですかニトラさん?」

「いや言つてないけど、そうなんじゃないかなつて。それにアイツが悩んだ果てに決めた事なら、それに口出しなんてできないつすよ」

淡白な答えにコーヤは言葉を返そうとしたその時。轟音が二人の前で炸裂した。

かろうじて直撃を避けたが、正体がトーチカからの砲撃だと判明する。前方に待ち構

えていた砲台が火を放ち、こちらを狙い打ちしたと分かった瞬間、GNアーチャーとレギンレイズは二手に分かれ走り出した。

「ニトラは良い遊び仲間だし、会えなくなるのは本心から寂しいっすけど。好きと嫌いで心がぐちゃぐちゃになるなら、一度距離を置いた方が良いつて事もままあるから、ね！」

砲撃の第二波がレギンレイズのすぐそばで弾ける。デニアは巧みな操作で直撃とその余波を避けると、腰にマウントしていたライフルを抜き、トーチカへ向け射撃。弾丸はトーチカの装甲に命中し、甲高い音を上げて火を上げるがまだ砲塔が動く。黒煙を噴き出しながら最後の力で三発目を撃とうとしたが、真横から来たビームに撃ち抜かれ、トーチカは爆散した。

障害のクリア。確認すると、GNアーチャーはライフルを戻し、再度レギンレイズと合流してHLVへ向けて走り出す。

コーヤの中で、今まで感じていた疑問とデニアからの言葉がぐるぐると混ざっていき。

ニトラが拘る理由。ELダイバー。自分の作品達の声。それらがコーヤの頭の中で繋がっていく途中、ふと服を着せられている飼犬を思った。飼主は可愛い愛犬を、より可愛く見せるために、服を与えさせているのだろうと散歩の様子を何度も見かけた

事もある。

そんな飼い主の内には、犬だって喜んでいけると言う人もいるだろう。けれども、もし服を着せられた犬が、人が理解できる言葉で拒否を訴えたなら。飼い主が本当に犬を愛し且つ良識があるならば、答えは明白だ。

ニトラの動機については確かに驚きを禁じ得ない。

そして、その作品達に自分への沙汰を求めようなんて……。

「真面目過ぎますよ、ニトラさん」

「真面目……？ そうだね。真面目なのかもね。自分の好き嫌いより、相手の事を気にし過ぎるなんて、真面目と言えなくもない、のかな？」

よく分かんないや、とデニアは言った時、HLVがレーダーに捉えた。

二人が進む渓谷の真つ直ぐ先に標的はある。護衛に三機のMS。そして崖上に備えられた二基のトーチカ。HLVに続く一本道を塞ぐ様にこちらに狙いを付けている。

「まあそういう私怨バリバリな訳だから、コーヤさんも私達への付き合いは適当でいいですよ。勿論、例の子を見つけらちやんと連絡はするんで、安心して下さいな」

「……ここまで聞いちゃったら、途中下車はなんか嫌です。それに、ちよつとニトラさんにも言いたい事できちゃいましたし」

「おつとお……？ そいつは」

なんですかい？ とデニアはニヤリとしながら問うなり、コーヤはバイクを加速させた。

デニアもコーヤに合わせて速度を上げる。

ようやくHLVにコーヤの焦点が合う。トーチカの砲撃も無視して一直線に突き進む。

「ちよつとムカツと来ました」

「……その心は？」

「まだ好きなのに、続けたいのに、他所から無理に理由もらって辞めようとしてるところです」

デニアは本人の問題と言った。けど、それを聞いてしまったら、聞いてしまった側にも感想や感情は生まれてしまう。

「申し訳ないですけど、ガンプラの気持ちとかいちいち気にしてたら私なんてどうするんですか。このバイクだってヘンテコな部類ですし、これ作るだけで3機は潰してるんですよ」

「確かに。そんな事言ったらミキシングなんて出来なくなるっすよね」

「そうです。それにデニアさんもデニアさんですよ！」

「ええっ!? 何故に私に矛先が!？」

「さつき本人に任せるって物分かり良さげな事言ってみましたけど、辞めたら寂しいってところはニトラさんに言っただけですか？」

「いや私が口を挟んでいい事じゃ……」

「言っていないですね？」

「……言ってます」

「いいんじゃないですか、口でも何でも挟んじやって。その程度で揺れる様ならたかが知れてます」

「全くもってよく言う。自分だってユキナとフレンド交換するまでブレブレにブレていた事を思い出し耳が熱くなる。」

「だがもうヤケだ。半ば八つ当たりの様にコーヤは言葉を続けた。」

「これ、お婆ちゃんのお受け売りですけど、何が得か考えてもうちよつと欲張っていいと思います。それとあくまで仮の話ですけど、もしキナがもうGBNやらないって言ったら、どんな理由でも思い切りヘコみます。だから、その……つまりそういう事です」

「ああ、カツコ悪い。結局全然まとまっていけない。ただの好き嫌いを頭の悪い文面にしておぼつかただけだ。」

「合法的逃走としてこのままHLVに全速力で体当たりしてしまおうかとさえ思い始めた時、クスクスと抑えた笑い声が聞こえてきた。」

「コーヤちゃん、君結構ズバズバ言っちゃうキャラなんすね」

「……恐縮です」

「いやいや、ずつといい感じっすよ、思ってた以上に。そうっすよね。確かに周りがどう思つか気にするなら、ちゃんとこっちの事も伝えてあげなきゃダメっすよね」

ははっ、と短くどこか吹っ切れた様にデニアが笑うと、今度は後方から砲撃があつた。

H L V に接近するにつれて、後方から敵機が増殖して接近しているのだ。追撃してくる敵機の多くはコーヤ達に速度に追い付いていないが、H L V を破壊している最中にたかられたら厄介だ。

コーヤはどうするか相談しようとするが、デニアは何も言わずにレギンレイズがくりと反転させる。そのまま追撃してくるMSの群れへと突貫していった。

「ここまで来れば大丈夫っす。追ってくる連中は任せて！ コーヤちゃん、決めちゃって下さい！」

そしてレギンレイズはMSの波の中を矢の様に突き抜けていく。大斧で胴体をへし折り、拳でメインカメラを叩き割り、乱れ狂う竜巻さながらに力任せに暴れ回る。操縦ユニットの中では、憂さ晴らしと照れ隠しを混同して頬を赤くしたデニアがいるのだが、通信を切っていたのでコーヤには見えていない。

ともあれ、デニアの奮起を受けて、コーヤは完全に意識をH L V へと向けている。も

う間も無くミサイルの射程に目標を捉える事が出来る。

既にキナ達の側のHLVが破壊された事は確認済み。勝てる。そう確信を持った。
アラートは鳴り響いた。

第8話 熱砂の果て、熱意の行方

アラートに一瞬、コーヤが身をすくませた直後。衝撃は上空から来た。

弾丸が時雨の様にバイクとGNアーチャーの装甲を叩く。衝撃にバイクのバランスが崩れ、GNアーチャーは標的を目前にして、乾燥した荒野へ転倒した。

「なに……?」

コーヤは混乱しながらもGNアーチャーの機体を起こし、横倒しになったバイクと共に立ち上がろうとする。が、GNアーチャーのバイザーに、ヒートホークの赤熱した刃とそれを持つ機体がの姿が映り込む。

敵はザク。角付きの指揮官用の緑色のザクⅡ。確か、この基地の司令でステージ最強の敵NPD。

「ノイエーン・ビッターザク!」

咄嗟にバイクから手を離して機体を振り、寸でのところでGNアーチャーは斧をかわす。だが敵の刃は、横倒しになったバイクの前輪を溶断した。

「……………」

為す術なくバイクを破壊され、あまつさえ邪魔そうに愛車を蹴り飛ばすザクを苦々し

く睨みながら、コーヤはどうか体勢を建て直す、状況はかなり不味い。

これはコーヤにとつて詰みだ。コーヤの機体は機動力も火力も完全にバイクありきで作られている。バイクを失ったGNアーチャーは処理と塗装をした素組よりマシンな出来映えでしかない。

否。固定武装どころか、本来装備されている大型GNコンデンサは最初から取り外している。GNアーチャー本体だけでは羽をもがれた虫も同然だった。

そしてノイエン・ビッター機の元に残る二体の敵、サンドカラーのドム・トローパーが集結する。

後方の敵を足止めしているデニアの助けをまだ期待できない。

「任されたつてのに……情けない」

GNアーチャーが地を蹴る。二本の脚で原始的に走りHLVを目指すが、二体のドム・トローパーはホバーを吹かして容易に追い付いてくる。鈍重な見た目に合わない猟犬の様な俊敏さで、二体のドムはそれぞれがヒートサーベルでGNアーチャーに切りかかる。

頭を狙う一本は避けた。だがもう一本の赤刃はGNアーチャーの脚を切り裂き、GNアーチャーは前のめりに倒れ込む。

コーヤは完全に自由を失った。

終わった。うつ伏せになったGNアーチャーの頭にドムがラケーテンバズを向ける。

(キナ、デニアさん、ニトラさん、ゴメン！)

悔しさに目を瞑った、その時。

「私のこの手が光って唸る！ アンタを倒せと輝き、さけえぶー！」

キナの叫びと共に翠の光が上空から降下し、シャイニングガンダムがバズーカを構えるドムを組伏せた。

機体の質量を輝く右手に傾けて、ドムの頭を握り絞める。それでもガンダムの腕を外そうとドムが抵抗しようと動いたならば、左腰の短柄のビームソードを抜き、ドムの腹へと深く突き刺す。

残る一機は味方もろともガンダムを撃とうと、ラケーテンバズを構えたが、背中から二本のビームサーベルが突き立てられた。そして砂色の胴体が横一文字に両断され、背からニトラのレギルスが現れる。

「コーヤ生きてる!?!」

血相を変えたキナの顔が通信ウインドウ越しに叫びをあげる。

少しだけ安心した。

「……紙一重だけどね。もう立てないから、置いてって」

「そうもできん。どっちにしろこいつは放っておけねえよ！」

ノイエン・ビッターザクを相手しながら放つニトラの声に余裕は無い。

こうして話す今も、ザクはレギルスの行動を正確に読み、ビームライフルの射撃を回避する。ザクは踊るようにステップを踏みながらレギルスへの間合いを詰め、ビームライフルを蹴り飛ばす。衝撃に手放したライフルが地面に転がる。そしてレギルス目掛け、ヒートホークが振り下ろされる。

「ちいっ！」

肉薄するノイエン・ビッターザクのヒートホークをレギルスがシールドで凌ぐ。しかし盾が刃を止めたのはほんの一瞬。小さな手斧は尋常ではない切れ味を發揮し、ザクは力任せに刃を押し込み、盾を容易く切り裂いた。

ザクという外見に惑わされてしまうが、ステージボスと設定されたこの機体はやられ役の性能を逸脱している。この機体に背を向けた途端、ザクマシンガンで蜂の巣にされかねない。

「キナ、奴の相手をできるか？」

「ちよつとキツイ。さっきのシャイニングフィンガーでエネルギー使い過ぎた」

「……仕方ない。ターゲットの撃破、キツイだろうがまた頼まれてくれ！」

「わかった、やってみる！」

HLVへ向けシャイニングガンダムが反転すると同時、レギルスは半壊したシールド

をザクへと投げつける。

ザクはそれを容易くはね除けるが、その一瞬を突いてキナはH L Vへと向かい、ニトラはレギルスの四本の腕を構える。

「もらっておけー！」

四本の腕に備わるビームガンが一斉に光を吐き出した。矢継ぎ早に連射されるビームは悉くザクへと命中するが、データに嵩増しされた装甲を抜くには至っていない。動きの牽制は出来ているが、この攻撃が止んだと同時にレギルスを無視してガス欠間近のシャイニングガンダムを撃破し時間一杯までレギルスの相手をするだろう。

このままではじり貧だ。コーヤは片足のGNアーチャーを這うように動かし、撃破されたドムのバズーカへ腕を伸ばさせる。

動きに勘付いて、ニトラのために隙を作れば良し、無視するならそのままバズーカを見舞うつもりだった。

だが、相手の対応の速さはコーヤの予想を上回る。

背中。何かが押し掛かった様に急に重くなった。GNアーチャーが地面に縫い付けられた様に動けなくなる。

なんとなく何が起きているか分かった。冷や汗が流れた。

マシンガンの口が今、這いつくばる自分に向いている。

「ニトラさん今です！」

ニトラは答えない。レギルスの胸が輝く。このままもろともに撃てば、勝てる。

「コーヤちゃんから離れるザク野郎！」

突風の様に現れたレギンレイズが、その大斧を振り回してザクを弾いた。

巖の様に重かったザクが、ゴム毬の様に地面を転がり、地に倒れ、そしてすぐ様立ち上がる。

大したものだ。と会心の一撃と思っていたデニアは内心唸った。さっきの一撃は防がれていたのだ。

楽しげに笑うデニアの目に、無惨にひしやげたシールドを右肩からパージするザクが映る。本体へのダメージは見られない。右腕にも鈍りは見えない。

レギルスが腕を伸ばし、追撃を加えようとするが、レギンレイズが斧の柄で小突いてそれを制止する。

「ここは任せて欲しいです。こっちも割りど万全だし、前のようにはいかないですよ！」
「……前回ボコられた仕返ししたいのも分かるが、舐めてるみたいで心配なんだが」

そうニトラがばやくと、レギンレイズはまた石突きでレギルスを小突く。

「つまらない事言つてないで、ほらHLVをぶっ壊す！ いつもみたいにケチケチ戦つてたなら、エネルギーまだまだ余ってるっすよね？」

「……ハマすんなよ」

「とーぜん！ それと、コーヤさんが言ってたよ」

「なんだと？」

画面に映るニトラが、とぼけた顔でデニアを見返す。

ふふん、と鼻を鳴らして痛快に笑いながら、デニアは言う。

「他所からもらった理由でブレる意思なんて、たかが知れてるってさー！」

「……あいよ」

レギルスがコーヤ達に背を向け、HLV撃破に向かう。

ザクはレギルスをマシンガンで狙おうとするが、デニアは即座に対応し、追撃を許さない。

レギンレイズのライフルで牽制しながら、軽やかに滑走してザクの前へと立ち塞がる。

「早速無視なんて、つれないっすねえ。さあ、また一緒に遊びましょうよ！」

ライフルを投げ捨てレギンレイズが大斧を両手で握り締める。

応じる様にノイエン・ビッターザクもマシンガンを捨て、ヒートホークを構える。

そして二機は踏み込み、動けないコーヤの目の前で両者は激突。文字通り火花を散らす攻撃の応酬を展開した。

大小それぞれの斧が交錯。その一合を皮切りに、先にラッシュをかけたのはノイエ
ン・ビッターザクだった。

ステージ最大の障害としてシステムに底上げされた性能で、レギンレイズに襲いかか
る。

バトルに関してはほぼ素人のコーヤにも分かる。ザクの攻撃は当たってはならない
事を前提とした攻撃だ。武器だけでなく、体当たりや繊細なマニピュレータの手刀さ
え、どれもが必殺の切れ味を秘めている。この場合一度距離を取り、相手をよく見て動
き方を決めるのがセオリーのはず。

だが信じられない事に、デニアは敵の間合いに噛みついたままその悉くに反応してい
る。ヒートホークを紙一重で躲し、折り混ぜられる拳撃や蹴りを的確に見切って捌き、
そして

「そおいつー！」

振り回した大斧の石突きで踏み込んだザクの胸を打つ。

完璧なタイミングで入ったカウンターに、ザクがよろけ、後退る。

「同じ相手に負けるのは！」

間合いは大斧の最適距離。大上段に斧を構え、

「私の趣味じゃないっすよ！」

レギンレイズは一気に大斧を振り下ろした。

頭を割り、胸を裂き、そのまま一気に股座へ。触れる一切を力で振じ伏せながら、斧は遂にザクを両断。その凄まじき勢いはザクを抜け大地を穿つ。

その時の発生した爆発の様な大音声をコーヤは呆然として聞いていた。

／／／

残るH L Vの破壊にキナは苦戦していた。

頼みの綱だったビームソードのエネルギーが尽き、内臓火器を使って破壊を試みるが、大質量の目標相手にバルカン程度では豆鉄砲でしかない。

タイムリミットはもう一分を切り、秒読み段階だ。キナの気持ちは焦るが、GBNに焦って威力が上がる仕様は存在し得ない。

「ああもう時間が……！」

思わず弱音がこぼれたところに、後方から接近する機体がある。ニトラのレギルスだ。

「ニトラさん！」

「あとは任せろ」

告げるなり、レギルスが左右二対の腕を正面に突き出す。だが、ビームは発射しない。エネルギー切れ？ と、キナは不安を覚えたが、違うことを思い出す。

これは以前一度見た。

ニトラのガンダムレギルスの必殺技の構えだ。

「イグニツション、チャージアップ！」

レギルスの四つの掌から光の粒子が溢れだす。レギルスが展開する胞子型のビットに似た光の粒は、四つの手を支点にしながら巨大な光の輪を形成。レギルスはその輪を握り締めると、胸部のクリスタルが強く輝く。

輝きは胸部クリスタルを中心に赤い光を放ち、光が球を形成する。それは深紅の星さながらに輝き、そして光輪からさらなる光を得て、力をさらに収束、凝縮させる。

的はデカイ。時間は無い。この一撃でも削り切れるか、撃つてみなければ分からない。

いや、違う。そんな不安を頭から除外する。

醜く作った自分を恨んでくれて構わない。それでも、馬鹿な自分に愛想を尽かさないでくれている友人の為に、今だけでも応えてくれると、

「信じてるぜ、レギルスさん。ブレストマーズバスター、シュート！」

制御限界まで漲らせた赤い星が、宿した全ての力を光に換えて解き放たれた。

深紅の光は破壊の瀑布となってH L V目掛けて迸る。

直撃したH L Vの装甲が爆音を上げてみるみる剥がれ、光はさらに奥へと突き進み、抉り、爆裂と共に食い破る。

突き抜けた深紅の光が、天上の雲を引き裂いた。

／／

ステージは夕暮れ色に姿を変えていた。

レギルスとシャイニングガンダムの前には、機体の半分を失ったH L V。

そしてレギンレイズと倒れたGNアーチャーの前で真つ二つになった指揮官用ザクが光となって消えていく。

ミツシヨンクリア。しかもボスユニット撃墜という金星も付属した大勝利である。

……結果だけを見れば、だが。

「……今回全然いいところ無かったね」

コックピットからフィールドに降りたコーヤは、脚を失くし倒れたままのGNアーチャーの頭を労る様に撫でる。

今回コーヤが出来た事と言えば、デニアの敵陣突破に多少手を貸しただけだ。

あまりバトルは得意でないと自覚しているが、他の三人の成果と比べるとさすがに引け目を覚えてしまう。

小さなため息をついていると、デニアが駆けてきた。

「お疲れつす〜コーヤちゃん。今回は本当にあざっした！ リベンジも出来て、もう万々歳つすよ」

「お役に立てて、何よりです」

ぴつと敬礼するデニアに、コーヤは笑みを返す。さつきもだが、呼び方がちゃん付けに変わっている。

反省はあとでしようとして、コーヤは思った。今は喜んでいる人がいるだけで、結構な満足感を覚えているのも確かなのだ。そう思っていると、彼方からバーニアを吹かす音が聞こえてきた。

「おーい！ 二人ともやったね！ ボス撃破おめでどうデニアちゃん！」

大声を響かせながら大きく手を振るシャイニングガンダムとレギルスが並んで、夕陽の向こうからやってくる。コーヤとデニアも大きく手を振り返し、今回の立役者たつとを出迎える。

「お帰りなさい。二人ともお疲れ様です」

「ありがと！ 一時はもうダメだ〜って思ったけど、ニトラさんが間に合ってくれて本

当に助かったよ」

「間に合ったのもデニアがボスザクを止めてくれたお陰だ」

「いえいえ、言い出しっぺっすからこのくらいは。リベンジしたかっただけですしおすし」

「気恥ずかしそうに笑うデニアだったが、表情をすぐに神妙なものに変えてニトラを見る。」

「ねえ、ニトラ」

「おう」

呼び掛けられ、ニトラはデニアへと向き直るが、まっすぐに相手を見ようとはしていない。

夕陽を背にしているニトラの表情はわかりにくいだが、伏し目がちに何を言われるかを構えている様子だった。

叱り付ける訳じゃないんだけどな。デニアはため息をひとつして言葉を紡ぎ始める。「ガンプラの声次第で、作るのをやめるってあれ。アンタの意思を尊重するって言ったけどゴメン。前言撤回させてもらおうわ」

「……そうか」

「うん。アンタの問題ではあるけどさ。私としてはもっとアンタの作品見たいし、もっ

とGBNの色んなところ一緒に行きたいと思ってる。それにさ」

「デニアは一度言葉を区切る。そして、呼吸を一つ置いてニトラに告げる。

「もし私が描いた漫画のキャラが、私に不満をぶつけて来たり、とんでもなく怒まれたとしても。きつと私は漫画を描くことをやめたりはしない」

どうしようもなく、描くの好きだからね。

デニアはそう言つて寂しそうに、だが決して暗くない笑顔を見せる。

傍で聞いていたコーヤは、思わずキナの方を見るが、キナも同じ表情で見返している。それなりに付き合いのあるキナも初耳だったようだ。

「ああ、その……語るほど無い、不出来な漫画ばかりなんで言わなかったただけなんです。SNSに上げてても全然な感じっすから」

「恥ずかしそうにデニアは補足の説明をするが、さすがに唐突だったので驚きを禁じ得ない。

HLVまでの道中の会話でもコーヤもそれらしい話はしていたが、そういう意味とは思わなかった。

まあそれはそれとして、と気を取り直したデニアは再度ニトラに向き直り、

「それに、モノは考えようつすよ？ コミュニケーション取れるなら二人三脚でアップデートができるって訳じゃないっすか？ そっちの方がニトラ的にもいいんじゃない

いつすかね？」

デニアの言葉を静かに聞いていたニトラは、分かった、とだけ短く答える。

「さつきキナにも言われた。俺が作るものをそれなりに楽しみにしてるって」

他人に言われて揺らぐ意思なんて、たかが知れてる。全くその通りだ。

キナに言われたとき、間違いなく嬉しかった。

コーヤのバイクを見た時に口を突いた、作りたいという言葉もそうだ。

ニトラの作りたいという気持ちは、まだ死んでいない。死にようがない。

好きだから作って、作って投稿して、てんでダメで落ち込んで。それでもまた作り始めて繰り返す。きつと懲りずに繰り返す。

創作の病気。生み出された側の言葉さえあれば、この患いも治るかと思つたが、ニトラというダイバーはもう、最初の意味を保てそうもない。

本当に安くて軽い男だ。心で自嘲をしながらも、どこか晴れた声でニトラは言う。

「ELダイバーは探す。そして、俺の知りたかつた事にもケリを付ける。けどそこからどう進むのか、その時の心で決める……そんなのでもいいのかね」

「バカ。だから他所からの答えを求めらなつての。煮え切らないのはこれで最後にしなさいね」

呆れた顔で肩を竦めるデニア。

そうでした、とニトラも笑い、大きく息を吐き出した。

「諦めるにしろ続けるにしろ、もう少し頑張ってみるよ。ああ、カッコわりい……」

もう一度大きな溜め息をつくニトラ。満足できた答えを得て、にししと笑うデニア。

そんな二人をコーヤとキナが安心した顔で眺めていると、ニトラの正面にメッセージウインドウが開く。

「運営からだぞこれ」

運営、というニトラの声に一同が注目した。そしてメッセージを読み終えたニトラが、

「はあ!？」

眉間に皺を寄せて急に吠え、三人がびくりと竦み上がる。

ニトラのアドバイザーは人相が悪いので急に大声が上げるとさすがに怖いのだが、どうやらそれどころではないらしい。

「ちよつと待て、今すぐ転送する!」

告げるなり、ニトラからの転送メッセージが届く。その文面を読むと三人は一樣に目を見開いた。

メッセージにはニトラ宛の定型句の後にこうある。

『あなたから報告のあった容姿と一致するELダイバーが保護されました。後日、EL

バスセンターまでお越しください』

第9話 あるダイバーの拾いモノ

雪が舞う。白い白い雪に混じりながら、街を燃やす赤い火が、曇天へ向けて舞い上がる。

ここはGBNに作られた仮想世界の街。ただし土地の名前は、実在の地名から取られていた。

土地の名はベルリン。有名なドイツの地を模した無人の街を踏み潰しながら、ひとつの巨影が闊歩する。

ヤドカリの様な巨大な武装ユニットを背負う、40mにも届こうという闇色の巨大な人形だ。

巨人は歩行するだけで破壊を撒き散らす。しかしそれだけでも飽き足らぬのか、口から、胸から、左右の十指から、破壊の光を放つては街を爆炎で吹き飛ばす。

巨人の名は、デストロイ。

GFASXII デストロイガンダム。

そしてここは、ガンダムSEED DESTINY本編でステラ・ルーシユが初めてこの機体を駆った戦闘を模した、レイドバトルミッションの空間だった。

破壊の名を持つガンダム足元には、何体もの破壊されたガンプラが残骸となって転がっている。どれも既に倒れたダイバー達のもので、間も無くそれらは光となってフィールドから消失する。

その様子を、かろうじて原型を留める建物の影から窺う機体があった。

HGのZZガンダムをベースとした濃紺色のカスタム機だ。

メインカメラを覆うバイザー状の追加装甲と、両肩にはダブルライフルの砲身を利用した左右一対のビームキャノン。両腕には固定装備のビームガトリングガンを持ち、キャノン兼用のビームサーベルの柄はふくらはぎの装甲側面に移されて正面への射角を確保している。加えてAGE3等のパーツを使い機体全体の厚みを増した、いかにも重装甲重火力という外見をしていた。

ZZ版へビーガンダムをコンセプトにビルドしたので、ヘヴィーゼータ。

そう名付けた本人。連邦軍の制服を着た大柄なライオンの姿をした獣人ダイバー、ガドは愛機の中で巨大な敵が過ぎ去るのを期待しながら、息を殺して潜んでいた。

「参ったな、甘くみていた。アップデートでここまで凄くなつてたかGBN……」

コックピットで一人呟くガドだが、およそ三年ぶりにダイブした彼が驚くのは無理からぬ事だった。

最新バージョンで嗅覚や味覚といった五感まで再現されたGBNは、彼が最も熱中し

ていた時とは別物と呼んでも過言ではない。

全く大したものだ。感心し、首を撫でると固くごわついた蠶の手触りが返ってくる。この感触もガドは今までに経験したことはない。まるで本物の生き物の体毛だ。おそらく、コックピットの外は舞い散る雪の冷たさと、街が焼け焦げる臭いに満ちている事だろう。

しかし、何より驚異的だったのはデストロイガンダムと対峙した時の強烈なプレッシャーだ。

動く小山の様な圧倒的大質量を目の当たりにした瞬間、ガドは自分が恐怖していると分かった。頭でゲームと理解していても、あの巨大が放つ威圧感と臨場感はほとんど本物だ。

知り合いがGBNがさらに良くなったと言っていたのも頷ける。だが、二年以上のブランク明けの、ちよつと勘を取り戻してきた程度の今のガドが挑むには、様々な意味で大きすぎる。

大人しくリタイアすべきか、そう思った時だ。

上空。あの圧倒的なデストロイガンダムへ向けて臆することなく接近する機体が見えた。

青と白の鮮やかな、ガンダムエクシアの改造機。GN粒子の帯をたなびかせながら、

背に装備した剣のような翼で曇天を切り裂く様に。エクシアは異形のガンダム目掛けて一直線に飛んでいく。

「無謀だろ……どこの怖いもの知らずだ」

確かにデストロイは懐が弱い。飛び込めれば勝機もあるだろうが、それでも強力な弾幕を無傷でかい潜ることが前提だ。

こうしている今もデストロイは動く。本体から切り離された右腕が遠隔攻撃兵器ドラグーンとして飛翔する。五指の指にあるビーム砲と強力な防御リフレクターを持つ、MS大の腕はエクシアの進路を阻むように現れ、迎撃のビームをエクシアへ向け撃ち放つ。

だが、エクシアは怯まない。

迫り来る五条のビームに、エクシアは真正面から立ち向かう。速度を落とさず、ビームの隙間を縫う様に見事な回避機動を披露する。

操縦技術もだが、相当な胆力の成せる技だ。エクシアのダイバーは臆せず前のめりに突っ込んでいく思いきりのいい動きだ。大きさに気圧されたガドは感嘆せずにいられなかった。

「すげえ……何者だありゃ」

上空で繰り広げられる壮絶なマニユーバにガドは固唾を飲んで見守っていた。あれ

だけ動けるなら、確かに弾幕を抜けて本体へと切りかかれる事もできるだろう。

だが違った。エクシアの標的はデストロイ本体への特攻ではなかった。

ドラグーンの腕がようやく巧みに飛ぶエクシアの背を取った瞬間、エクシアは飛行姿勢をロールさせる。

頭を地に、足を天に。空中で逆立ち姿勢になったエクシアは若干減速をしながら、潜る様に降下。そして降下した瞬間に元の姿勢へ戻ったエクシアは、下方からドラグーンの腕へと急接近する。

「スプリットSだどー！」

縦方向に下向きにUターンをする、インメルマンターンの対となる空戦機動を滑らかにきめて、エクシアは急上昇しデストロイの右腕を自身の間合いに捉えた。加速を付け、自身と同じくらい大きな腕とが交錯する瞬間、エクシアがビームサーベルを抜き、一閃。

五本の内、小指から中指までの三本の砲を切り落とし、エクシアはさらに上昇。ターン。急降下しながら右腕を二撃目を狙う。

しかし今度はドラグーンの腕が備える盾、陽電子リフレクターを張る方が早い。腕を守るように張られた光の傘を目にしたエクシアは、得物をビームサーベルから日本刀型のGNソードへと持ち換える。エクシアは更なる加速をつけて突っ込み、陽GNソード

と電子リフレクターがぶつかり合った。

衝突の瞬間、目の眩むような電光と激突音が空気を割る。その衝撃は凄まじく、離れたガドの元までビリビリと伝わってくる程だ。

剣と盾の力比べは、大ききの分盾の方が優勢だ。大出力の光の盾に圧され、突き立つた切っ先が徐々に押し返され……ない。

トランザム！ そう叫ぶ声が聞こえた気がした。

空と雲の様な鮮やかな機体色が一転、灼熱色に染まるエクシアが一気に力を解放。盾を突き破ろうと、全開で斥力場を形成し、剣の切っ先一点へ力を込め続ける。

しかしここで、デストロイがもう一方のドラグーンを起動させた。高速で飛ぶ左腕が、邪魔になるエクシアを背後から狙おうと迫る。

潜み隠れ、事態を静観していたガドだったが、たまらず飛び出した。

「こうなりやヤケだ！」

獅子の姿のガドは歯を剥きながらヘヴィーゼータを走らせる。目標は左腕のドラグーン。目的は全火力を持ってドラグーンを妨害し、エクシアを援護。異を決したダイバーの意思を受け、ヘヴィーゼータは肩のキャノンと両腕のビームガトリングを飛翔するデストロイの左腕へ向け一斉に放つ。

ペレット状のビーム弾と一直線に伸びる二本の光条は、標的違わず左腕ドラグーンへ

と到達するが、それも展開されたリフレクターで防がれる。だがそれでいいい。

ヘヴィーゼータの攻撃を防いでいる限り、エクシアへの追い撃ちは出来ない。奮戦するエクシアへの横槍を防げればそれで十分。あとはどこぞの熱血小隊長よろしく、銃身が焼け付くまで撃ち続ける。

このタイミングで今度はデストロイの本体が動き出した。

異形の巨体の胸部。スーパースキュラの砲口が輝くと同時。放たれた青白い極太ビームがヘヴィーゼータへ迫る。ヘヴィーゼータはつんのめりながら倒れ込む事だろうか。うじて回避するが、張っていた弾幕が消えてしまう。

しまった、と焦るガドだったが、ガドの役割を引き継ぐように至るところから砲撃が始まり、火線は十字砲火となつて左腕のドラグーンを空中で釘付けにした。

攻撃を始めたのは、生き残りのダイバー達だ。全員が一丸となり、単機敢闘するエクシアを援護するため火力を集中しているのだ。

雪上を高速で移動するバクウやAGE3フォートレスが弧を描きながらビームを放ち、サーペントとズサが連携し合つて高密度の弾幕を放つ。そして遠方からゴツゾーとガンタンの長距離砲が吠え、ダイバー達の一齐砲撃がリフレクターを食い破らん勢いで、ベルリンの空を猛火の花で染め上げる。

さらに、いつの間にかドラグーンの真下にまで来ていたゲルググキャノンが左腕を飛

ばす推進機の主機目掛け、直下からのビームを何発も撃ち込む。

推進機を損傷した左腕は、徐々に高度を下げ始め、ダメ押しに四方からミサイルの雨が叩きつける様に降り注ぐ。けたたましい炸裂音と爆風に殴り付けられた異形の腕は、飛ぶ力を奪われて燃えるベルリンへと轟沈する。

そしてほぼ同時、エクシアの剣も遂にリフレクターを破る。エクシアは自機と同じ大きさはある腕に組付くと、トランザムを継続した灼熱色のビームサーベルで幾重にも切りつけまくる。

光の剣が翻る度、巨大な腕はこま切れになり、爆散。噴き上げる炎の中から飛び出したエクシアは振り返らず、トランザムを解除して本丸、デストロイへと狙いを定め飛び込む。

そして先陣を切るエクシアに続いて、生き残ったダイバー達は攻勢へ転じ、闇色のガンダムへ雪崩れ込んだ。

両腕と盾を失ったデストロイは背の大砲と胸部のビーム砲で迎撃するが、どれほど威力があろうと、射角の限られた直線的な攻撃だ。先行するダイバー達は砲撃を容易に見切り、目標への間合いを詰める。

一番槍はやはりエクシアだ。挨拶代わりとばかりに顔面まで急接近し、ビームサーベルで口のビーム砲を切り付けて封じる。

次いで砲撃手らの火力支援を受けながら、黒の部隊カラーのF91が抜け出し、MEPEを発生。質量のある残像がデストロイを取り囲むように現れては消え、攪乱する。残像を追った弾幕が方々へ分散し、敵の迎撃能力が薄まった瞬間、完全に好機は到来した。SDサイズのZガンダムが小型ならではの敏捷さで背後を取り、鉄壁の威容を誇るトトウガが体当たりしてデストロイの姿勢を崩す。その後もダイバーたちは次々と前線へと合流。ガドのヘヴィーゼータも戦列に加わって砲撃し、総攻撃を受けるデストロイのゲージはみるみる内に削られていく。

そして上空からウイングガンダムの改造機が放った一撃。バスターライフルの光がデストロイを貫いた瞬間、勝負は決した。

デストロイは音を立てて倒れ込み、ベルリンの街に巨大な爆炎を咲かせ消滅した。

《BATTLE ENDED》

システムが終幕を告げた直後、電脳世界のベルリンに勝鬨が上がった。

健闘を讃え合うダイバー達の声が聞こえる。互いの手を重ね合わせガンプラが見える。

そう、これだ。これなのだ。これがGBNだ。

シリーズも何もかもを越えたMS達の共演と、原作ではありえない組み合わせ達のものちき騒ぎ。それをダイバー達の化学反応が作り上げ、どこまでも熱を押し上げる。

「戻ってきたんだな本当に……戻ってこれたんだ」

緊張のほぐれから来る心地良い解放感と感傷に浸りながら、ガドは満足げにため息をついた、その時。

視界の端に奇妙なモノが見えた。

それは愛機の足元にあつた。端的に言つてしまえば、雪の中に埋もれる、ゴミのようなボロボロの布切れだ。

それだけなら、先の戦闘で吹き飛んだ家屋のテクスチャか何かと思えたが、違う。ボロボロの周囲の雪は不自然に盛り上がっている。まるで、何かが雪に覆われて落ちていくかのようだ。

その大きさは、ちょうど子供の背丈ほどのものだった。

「まさか、な」

ガドはヘヴィーゼータのコックピットから消えると、ベルリンの街に降り立った。予想通り、熱気と街の焼ける匂いを感じたが、思っていたより不快感はない。その辺りはさすがにゲームという事か。

ガドは積もった雪にブーツを埋めながら、違和感の元へと向かい、盛り上がった積雪を恐る恐る撫でる様に雪をどかしてみる、と。

柔らかく、そして仄かに温い感触が伝わった。

「……冗談だろう！」

ガドは血相を変えて雪をかき始める。両腕をワイパー代わりにして、積もった雪を払い除けるとやがてボロ布の本体、布を巻き付け横たわる少女の姿が現れた。

翠色の髪は乱れ、褐色の肌にくつも煤を落とした少女の姿は戦闘から逃げてきた体そのものだ。しかも低い気温と雪にくるまっていたせいで、体温がかなり低い。

「病院……つてあるのか!? まずどうなつてんだこの状況は？ ダメージアウトしたにしてもこうはならねえだろ！」

ゲームをしていたら遭難者を発見した。あまりに突拍子もない事態にガドは取り乱そうとする心を、悪態を叫びながらもどうにか落ち着ける。これも最新アップデートによるものとも考えたが、とてもそうは見えない。

「とにかく！ 運営に相談だ！」

警察も病院も119番も無い以上、頼れるのはゲームの運営しかない。

初めて使う問い合わせメニューと格闘する事数分。ガドはどうか文面を整えメッセージを送付する。

だが、これで一件落着ではない。凍えている少女を暖めるためにガドは行動を再開した。

幸い火種はそこら中にあり、再度搭乗した愛機を使つて、周囲の木造建材を集めると、

即席の焚き火櫓を作る。さらに火を覆うようにヘヴィーゼータに四つん這いの姿勢を取らせ、雪から少女を守るための屋根を設ける。そしてガドが着ている連邦軍の制服を少女に被せてひとまずは息をついた。

「あとは、早いところ運営が来てくれりゃいいけどな」

焚いた火が消えないように番をしながらガドは眩き、ぶるりと半裸の体軀を震わせた。

「獣人タイプは毛皮着てる扱いにはなんなのか……ついでにこれも要望で挙げてみるか」

鬘を首に寄せながら、ガドは火の前で踞って待つ。

やがて、運営のガードフレームがガド達の元へと訪れる。

そしてガドが助けた少女の素性と、その確認のためニトラの元へと運営からメッセーヂが届けられたのは、この後数時間後の事だった。

第10話 ルメ

午前八時十分。予鈴前の教室。ミヒロはぼんやりとした様子で、スマホを眺めている。特にアプリを起動するでもなく、本当に眺めているだけだ。

そして机の上に置かれた左中指には絆創膏が巻かれていた。

「ミヒロ。おはよう」

「あ、おはよう、スギミさん」

いつもの様に顔を会わせたユキナに挨拶を送る……のだが、ユキナは何やら不満そうに口を尖らせる。

「もう、ユキナでいいってば。一緒に死線を潜り抜けた中ですよ」

ゲームなのに大袈裟な。ミヒロは心中で思いながら苦笑で返す。

「ご、ゴメン。何か未だに抵抗があつて……はははは」

「笑って誤魔化すなし。まあ、らしいと言えばらしいけどさ」

いつまでも他人行儀が抜けない戦友に溜め息をつく。と、ユキナがミヒロの指に巻かれた絆創膏に気づく。

「指どうしたの？ 包丁で切っちゃった？」

「違う。デザインナイフ。パーツ加工してたらこう、スパツと」

「それ大丈夫だったの!? 血止まらなくない?」

「薄皮切っただけだから。そんな大袈裟じゃないよ」

軽く指を曲げてみると、刺すような痛みが残っている。言った通りあまり血は出なかつたが、切り口が鋭い分、治るまでまだかかりそうだ。

「またバイクの方の改良? 今度はどんな風にいじつたの?」

ユキナの問いにミヒロは首を振り、

「今回はバイクじゃないの。アーチャーの方」

「珍し。どういう心境の変化?」

「この前のデニアさんたちとやったミッション。結局ほとんど何も出来なかつたから。それがなんか悔しくて」

昨夜もミヒロは先日のミッションの事を思い出していた。結果的には大勝利だったが、ミヒロはその勝利になんら貢献していなかった。

ミヒロ自身、バトルをメインでやっていなければ、強さを求めている訳でもない。だがそれはそれとして、自分は弱いものだから負けて仕方ないと、簡単に済ませられなかつた。

「ミヒロって意外と負けず嫌いだよな」

「そうかな？ そんな事ないと思うけど」

「あるって絶対。初めて一緒にバトルした時も、相手の事ガンガン煽ってたし」

「それは別に関係ないでしょ。それにあれはあの連中が悪いだけだし……」

「これを機に、本格的にバトル仕様にしてみたいじゃない？」

「そればダメ。ちよつといじりはするけど、あくまでポリシーは変えないからね」

きつぱりと断るミヒロに、ぶーぶーと口を尖らせるユキナ。そこへまた一人、別の生徒が近付いてくる。

ボブカットの髪型をした、150センチほどの背のやや低い女子生徒だ。闊達そうな雰囲気はどことなくミヒロに似ているが、気の強そうな目は背丈に似合わない威圧感を醸している。

が、それはほんの一瞬。見た目だけ。すぐにニカつとやんちゃ坊主の様な顔になって、談笑する二人へ笑いかける。

「おはよタケウチさん。朝からミヒロに絡まれて大変だね」

ミヒロのクラスメイトであり、ユキナの中学からの友人、オオハラ・シノブ。

ユキナ伝いでミヒロとも仲良くなり、今では昼時のお弁当仲間でもある。

「またガンプラの話？」

「うん。この子、作ってる最中に指切っちゃったらしいのよ、ほれ」

ユキナが手で示し、ミヒロは色白の左手を軽く上げて見せて、多分もう平気だけど、とミヒロは付け加える。

シノブ自身はガンプラにはほぼ興味はないが、その事にとよかく言う事もない。そういつた意味でもミヒロにはありがたい相手だった。

「なるほどね。刃物使うから仕方ないけど、気を付けなよ」

「うん。痛み入ります」

「ああでもタケウチさん、ガンプラとかやってるのに指綺麗だよね？」

「そうかな……塗料とか接着剤でも使わなければ、作業してもそこまで汚れない気がするけど」

「そうなの？ ユキナとか前に爪灰色にしてたけど？」

「……え？」

ミヒロはちらりとユキナを見ると、ユキナはすつと目を逸らす。

「まさか手袋しないでサフを吹いたの？」

「サフってなに？」

「サーフェイサー。塗装の前に吹くプラモ用の化粧下地みたいなもの。灰色のスプレーなんだけど」

「ああそういうこと……納得」

「あの時はたまたまだし。手袋するのちよつと忘れちゃっただけだし」

「でも爪が汚いのはちよつと……女子的にダメだと思ふよ」

「ミ、ミヒロに女子を語られた……!」

「いやガツクリ来ることないでしょ。明らかにタケウチさんの方が女子力高いし。お弁当美味しいし」

ミヒロが作る手作り弁当を一度摘まんでからというもの、シノブはすっかりミヒロの料理を鼻屑にしている。今日もおかずを提供する事でミヒロから一品せびるつもり満々である。

「お粗末様です。ちなみに今日は定番唐揚げです」

「おおうイエス! 唐揚げイエス!」

「わ、私だつて料理くらい……くらい……ごめんなさい無理です負けです白旗です、今日も分けてくださいミヒロ様!」

潔く敗けと本音を認めるユキナにミヒロとシノブは揃って笑う。

何気ない会話をしている、ミヒロの意識は明日の予定に向いていた。

明日の土曜。件のELダイバーに会いに行くのだ。



土曜日の昼間。G B Nが最も込み合う時間帯のひとつ。ロビーはいつも通り数多のダイバーが訪れている。

挑むべきミツションを選ぶ者。友人らと待ち合わせし、思い思いのデイメンションに出向く者。そういったダイバーたちが忙しなく行き交う中。コーヤは一人ベンチに腰掛け手元の端末でG T U B Eの動画を眺めていた。

コーヤの格好だが、いつもの深紅のライダースーツではなかった。

先日の高難易度ミツションの報酬で新調したマゼンタのライダーズジャケットに、黒のタイトなレザーパーツ。足回りはヒールの高いブーツという装いだ。コーヤ自身の細身な体型と踵を上げた170センチ超えの身長、そしてスポーティーなショートカットの黒髪が見るものに大人びた印象を与えるだろう。

とはいえども。ぼやんとタピオカドリンクを飲んでる姿には、バイクを乗り回している時の鋭さはとんと感じられない。

キナやデニア、ニトラらとの約束よりも40分も早く来てしまつてあまりにも手持ち無沙汰なだけなのだが。

張り切りすぎた。E L パースセンターという運営側からの招待だからだろうか。逸る気持ちを抑えられなかった。

簡単なミッションをこなしたり、一人でバイクを転がしに行っても良かったが、そういう気分でも無かったため、上がっているG—TUBEの動画を眺めていたという訳だ。

GBNチャンプ、クジヨウ・キヨウヤが繰り広げてきた激戦の記録や、アルスイベントで一躍名を馳せたキャプテンカザミらの動画を筆頭に、多種多様な動画が日々投稿されている。現在コーヤが視聴しているのは先日デニアから教わったレースイベントの記録だった。

『コーヤちゃんこいうの好きそうっすよね?』

と、教えてもらい、バイク乗りの性というわけでもないだろうがすぐに気に入ってしまった。

バトルにそこまで興味はないが、競争を見るのは嫌いではない。特にスピード勝負なら尚更だ。

動画の中ではエルフ・ブルックのカスタム機を先頭に、様々な機体が超高速の世界で鎬を削っている。急な角度のヘアピンカーブを一步誤れば吹き飛びそうな速度でコーナリングするツールギスがいれば、コースに仕掛けられた障害やギミックを軽やかに躲したベルガ・ダラスがトップとの差を堅実に詰めていく。

滅多に見ることのない、速度向上の改造が施されたガンプラはコーヤの目にも新鮮

で、叶うなら一体一体じっくり見ていたいくらいだ。

こういうのもアリなんだ。ガンプラは自由。バトル仕様一遍当ばかりではいと分かっていても、こうして実物が活躍しているのを見ると安心できるものがあった。

そしてレース動画の最終盤。先頭を抜けた一機がチェッカーフラッグを抜けたとき、丁度聞き覚えのある声が聞こえた。

「コーヤちゃんお待たせ」

振り向くと小柄な金髪の少女と、眼帯をした柄の悪そうなスーツ姿ののっぼな男が並んで歩いてくるのが見えた。デニアとニトラの二人組だ。

「それ新しいコーデだね？ こっちもカツコよくていい感じだよー」

「ありがとうございます。ちょっとカジュアル寄りになりました」

少し照れ臭そうに、コーヤはにかみながら感謝を伝える。

以前のライダースーツも勿論気に入っているが、パイロットスーツに近いデザインという事もあって普段着にはどうかと常々考えていたのだ。

「デニアさんも、今日は前とは違いますね」

「えへへ、数あるコレクションでもお気に入りの一つですよー」

得意気に胸を張るデニアの服装も前回会った時と趣はだいぶ異なっていた。

頭を飾る大きなゴーグルはそのままだが、現在はタンクトップではなく大きなシャボ

の付いたフリルブラウスに、編み上げのレザー素材のコルセット。そしてパニエで大きく膨らませたスカートにパンプスを履いたというクラシカルな英国風の装いである。小柄な金髪の少女という容姿との親和性も良い。

「お前、この前も同じ事を言っただけじゃなかったか？」

「あれは中東風の中でっつて事つすよ。可愛かったでしょ、踊り子衣装」

「……否定はせんが、そうやって手当たり次第買ってるからすぐ金欠になるんだろうが」
「着た切り雀のニトラには一生分かんないつすよ。それに漫画の参考資料としても重宝してるんすから」

自慢するデニアの隣で呆れ気味に肩を竦めるニトラだったが、その表情は前よりも少しだけ柔らかく見える。件のELダイバーと会う、となつて緊張しているかと思つていたが、前回のミッシヨンの時に腹は決まったのだろう。

「キナとは一緒じゃないのか？」

「午前中は部活だつて言つてましたけど、今日は必ず来るとも言つてました」

「……噂をすればつて奴つすね」

デニアの視線の先をコーヤとニトラが追つて見た視線の先。青い髪と狼耳、ドモン・カッシユをリスペクトした赤色マントを翻して走るキナが、大きく手を振る姿が見えた。



かくして、四人はELバーセンターへと到着する。

四人もセンターについては知らない事の方が多い。というより、ほとんどのダイバーがそうであろう。

何百万というダイバーの内、百人に満たないELダイバーを管理する施設である以上、限られた者以外には縁の無い場所。確率で言えば、単純に一万分の一以下。無知だとしても仕方ない。

だがその分未知へ踏み込む楽しみもある。旅を好む性分のコーヤの場合、今は楽しみの方が心を占める割合が多い。

どんな場所だろう。どんな凄いものが見れるのだろう。

そんな具合に期待で胸を膨らませていた、が……。

「なんか、病院みたい……」

到着した時のコーヤの第一声はそれだった。

視界に映るものは、清潔そうな白い壁。リノリウムの様な白い床。簡素な待合室の長椅子に、申し訳程度に観葉植物が配置されている。

コーヤ以外の三人も口には出さないが同じ感想を抱いていただろう。デニアに至っては、「もつとサイバーなのを期待してたのに……」とがつくり肩を落としている。

ともあれ、ここに呼ばれたのは揺るがない事実な訳なので、大人しく待とう。

五人はそれぞれ長椅子に腰掛ける。そして待つ。まるで病気でもないのに患者なった気分だったが、およそ五分後。

「お待ちせしました、皆さん」

やって来たのは、白衣を着た赤い髪の青年のダイバーだった。

身長は大体180センチ程度か。モデルのようにスラックとした体型と整った顔立ちは現実であれば芸能人さながらで、デニアが、イケメン、と小さく唸ったほどだ。

「お初にお目にかかります。僕の名はボックス。例の子の担当をさせて頂いております」

白衣のダイバー、ボックスは一礼するとコーヤらも揃ってお辞儀を返す。

「ボックスさん。箱さん？」

「ちよ、キナさん初対面の方に何言ってるの」

「いえいえお構い無く。むしろそういう反応は嬉しいですから。ああでも由来は秘密ですよ？　これが本当のブラックボックスってね」

柔和な笑顔を浮かべた美男子が、ギャグにもなっていないギャグを言うが、聞かされ

た側は呆気にとられて目をぱちくりとさせるばかりだ。

「おや……反応芳しくないですね？ 掴みはこれでバッチリなはずですが……」

「先生、またやったんですかい」

部屋の奥からもう一人。今度はのっしのっしと、歩いてきたのは巨漢のダイバーだった。

長身のボックスはおろか五人の中で一番背丈の高いニトラよりも大きく、何より分厚い。ニトラが青竹ならば、さしずめガドは歩く岩だ。そんなプロレスラーさながらな屈強そうな体躯を宇宙世紀の連邦軍の制服で包むダイバー。その顔は鬘を湛えたライオンの顔をしていた。

「初対面でそれをやられると、誰でも反応困るって言ったでしょうに」

「うーん、どうやら本当にそうと認めるしかないようですね。これで通算16回目の敗退ですよ。残念」

「そんなにやってたんですかアンタ……」

ライオンとイケメンの奇妙なやり取りをコーヤらはポカンとした様子で見っていたが、話を進めるためにニトラが一步踏み出してライオン姿のダイバーへと問いかける。

「あーそちらのライオンさんはどちら様で？」

「ああすまない。俺はガド。例のELダイバーを保護した者だ」

途端、呆氣に取られていた一同の顔付きが驚きに変わる。

特に、コーヤとニトラの変化は顕著で、両者同時にガドへ踏み寄り、

「あの子を保護した時、どういう状況だったんですか？ またどこかで危ない目にあつてたんですか!？」

「あんたのガンブラを見た時何か言つてなかつたか!？ 何でもいい、何かを言つていなかった教えてくれ、いや下さい!」

興奮気味に詰め寄る二人に気圧されて、巨漢のガドは目を丸くしながら、子猫の様に耳を伏せる。

「これじゃどつちが肉食獣やら。顔に笑みを浮かべながら、ボックスは今にも噛みつきそうな二人を制す。

「まあ落ち着いて落ち着いて。その辺も含めて追い追いお話ししますんで」
「どうどうとデニアに背を叩かれながらニトラも一歩下がる。

「ただ、まずひとつ。今の俺たちから話せる事がほとんど無いことはご承知置いて下さい。なにぶん、ガドさんが見つけたから一言も口を聞いてくれないんですよ」

「どうやら、助け船が欲しかったのはお互い様だったらしい。

コーヤの心の中で揺れていた期待と不安の天秤が、不安の側に傾いた。E.L.ダイバーとの対話は一筋縄ではいかない様子だった。



部屋に来る途中で話によると、ボックスは運営の人間ではないらしい。あくまでこのELバースセンターの手伝いをしているアルバイトの様な立場という事になっているとの事だ。

ボックスはぼやく様に言っていたが、なんでもELダイバーの専任技術者は天才的な技術を持つが、性格には相当な難があるらしい。そのためボックスの様な協力者がセンタ―に何名か所属しているとの事だった。

そしてボックスとガドに連れられたコーヤ達はELバースセンター内の一室へと案内される。

やはり病院の診察室の様なレイアウトだ。白い壁と簡素なデスク。いくつかの椅子が並べられていて、空中に投影されるウインドウ型の端末が見える。ここがボックスの仕事部屋らしい。

本格的に来院した患者の心地を覚えつつ、コーヤ達は椅子に腰掛けるとボックスは端末を操作して各員の端末へとデータを転送した。

「……………こちらが彼女の現在の状況です」

ボックスは端末を操作し、映像を表示させる。

白い部屋と設置されたベッド。似た内装からこのセンターの一室なのだろう。安置されたベッドの上に少女が静かに座っている。

褐色の肌と、ボサボサの翡翠色の髪。そしてひどくくたびれた砂色のマント。あの子だ、とコーヤは小さくこぼした。

「どうつすかニトラ？ 例のあの子で間違いない？」

「多分、合ってると思う。けど、本当に元氣無さそうだな……」

ニトラはガドとボックスの方を見て問う。その声は戸惑いを含んでいる。

映像への感じ方は、コーヤも同様だった。

少女は何をするでもなく、しよげた顔をしたまま壁や床を見ている。まるで精巧に出来た人形を閉じ込めている様だった。

「御覧の通り。誰が話しかけてもこの調子です。こつちからの対話は完全にシャットアウトしちやってます」

「大人しくはしてくれてるが、またどこか行ってしまう恐れは捨て切れんのだな。俺達としても本意だが、こうして隔離している、という事だ」

すみません、とボックスは訪れてくれた四人へと詫びる。

端末の映像を一度切ると、今度はガドがコーヤ達へと語り始める。

「俺が彼女を保護したのは。デストロイのレイドミッションステージだった。標的撃破後に彼女が意識を失った状態で倒れていたのを発見したんだ」

そう言ってガドは発見時の状況を説明する。

レイドバトル終了後に遭難同然の彼女を発見し、運営に保護された際にELダイバーである可能性が高いと判断された。という経緯らしい。

「気を失うって事、GBNであるんですか？」

「以前ELダイバーが眠る事が報告されている。ガドさんもそこに違和感を感じて運営に報告してくれてね。おかげで彼女を保護することができたんだ」

感謝してるよ、とボックスは言う。遭遇時に盛大に取り乱していた当人は顔には出さずに小さく頷いた。

「ただ保護したはいいのだけど、正直手をこまねいていてね。何か切っ掛けが無いかと色々と探していた時に、ニトラさんからのメッセージを見つけた、という訳なんだ」

なるほど、とコーヤも合点がいった。少し違っていたのは、渡りに船でなかったが。

「正に藁にもすがる思い、でね。せめて名前だけでも分かればビルドデカールへの登録も出来るんだけど」

「……すみません。俺達もきちんとした面識がある訳じゃないんです」

申し訳なさそうにニトラは言う、ボックスが落胆した様子で頷く。と、残念ムード

になりかけた時、おずおず、といった様子で手を上げたのはコーヤだった。

「あの……私にあの子と話をさせてもらえないですか？」

「……構わないが、君は彼女とは」

「前に一度、私のガンプラにあの子を乗せた事があるんです」

コーヤの言葉に、俯き気味だったガドが顔を上げる。

正直その程度の事が何に繋がるかはコーヤ自身大した考えもない。それでも、

「どんな些細な事でも、何でもいいから、切っ掛けを作る事ができればって、そう思います。それにあの子にあんな顔、ずっとさせたくないですし」

コーヤの申し出に、ガドが悩ましげに腕組をするが、彼の大きな肩をボックスが叩く。

「試してみようか、ガドさん。ダメで元々だよ。それに新たな要素を加えていくのは何事にも言えるセオリーさ」

「あんたがそう言うなら……だが」

「分かっている。必要以上の刺激は与えない。あくまで最低限の接触。それでもいいかな

コーヤさん？」

「はい。よろしく願います」

「ご協力、感謝します。ありがとうございます」

差し出されたボックスの手をコーヤは手に取り握り返す。

ボックスの外見が外見なのもあって、少しばかり気恥ずかしかった。



大きな声を上げない。急に距離を詰めない。何より触りたがらない。要するに初対面の子犬と接する時の要領です。

と、ボックスは言ったが、あいにくコーヤに犬を飼った経験はないため、とにかく最初の三ヶ条遵守を頭に入れ、E.L.ダイバーの居る部屋の前に立つ。

目の前にあるのは宇宙船の居住ブロックを模した扉。備え付けられたランプは赤く光り、ロックされていることを示している。

「コーヤさん。これから入り口を開けます。よろしいですか?」

「はい。大丈夫です」

「分かりました。では、ロックを解除します」

深呼吸を一つ。ロック状態を表すランプが赤から緑色に変化する。

腹に力を入れて、コーヤは部屋の中へと一步を踏む。

「こんにちは」

GBNの技術に祈りを込めながら、最大級にいい笑顔をイメージして挨拶を告げる。

入ってきたコーヤに、E.L.ダイバーの少女は一度顔を向ける。が、元気の無さそうな表情を変化させる事なく、コーヤを一瞥したきり顔を伏せて殺風景な部屋の観察を再開してしまう。

やっぱり覚えてくれてないか、と肩を落としそうになるが、ここまでは想定内。

「お久しぶりです。あの後、大丈夫でした?」

挨拶のあとに思わせ振りのセリフで興味を引くべし。

デニアからもらったアドバイスは正直半信半疑だったが、どうやらそれは功を奏した様だ。

そっぽを向いていた少女の顔が、僅かだがコーヤの方向へと角度を付ける。

もうひと押しで思い出してくれるかな? 淡い期待を抱いた時に、コーヤはある事を思い付く。

「そうだ。あの時と服装違うから分かりにくかったかな。ちよつと待つてね」

コーヤが手元にメニューウインドウを展開。指先を手早く動かして操作をするとコーヤの服装が変化する。マゼンダのライダーズジャケットから、より赤色の濃く鮮やかな深紅のライダーズスーツの姿となる。

「これでどうか?」

コーヤには見慣れた深紅の服装に変わった瞬間。少女は、はっとした表情になる。

やった、とコーヤは心の中で小さく叫ぶ。

「思い出してもらえたかな？ 改めて挨拶するね？ 私は」

「コーヤ」

「……え？」

蚊の鳴くような細かい声だった。思わず呟いてしまった、という感じだ。

だがELダイバーの少女は伝えてもいない名前を、はつきりと発音した。

初めて聴いた彼女の声は、幼い外見よりも余程大人びていて、そしてガラスの様な冷たさを帯びていた。

「どうして、私の名前を？」

「コーヤのガンプラが教えてくれた。コーヤと自分を信じろって」

「私のガンプラが……？」

こくり。不安げな表情をしながら少女はぎこちなく頷く。

ELダイバーは、ガンプラの心が分かる。

以前デニアが語った噂を思い出す。

「あなたは本当にELダイバーなの？」

「分からない。でもそういうものらしい」

「じゃあ、名前は？ 名前はあるの？」

少女は一度口ごもり、そしてやがて囁くような小さな声で発音する。

「……ルメ」

ともすれば、聞き取ることも難しい声量だった。しかし、この静かな小部屋のおかげもあってか声は確かにコーヤに届いた。

「ルメ？」

「うん。ルメ。私の名前」

第11話 頑張りたい

保護されたELダイバーはルメと名乗った。

残念ながら判明した事はそれだけだった。

「結局分かったのは名前だけか……」

はあ、とコーヤはため息をつく。

コーヤとキナ達4人はELバースセンターを後にして、別のディメンションのカフェに移動していた。

卓に座るコーヤと二トラの表情は晴れているとも曇っているとも言えない微妙な表情だった。

「さすがに前進とは、言えないよな」

眩く二トラは特に落胆の色が濃かった。

ルメと名乗ったELダイバーがまともに口を聞いたのはコーヤだけで、会話の内容もごく限られたものだけ。

レイドバトルのエリアで倒れていた理由。何故採取ステージに迷い込んでいたのかも、ルメ自身分からないらしい。

その他にもボックスの依頼でやりたいことや望みの類いをコーヤは質問してみたが、ルメはその全てに黙りを通し、何も話してくれなかった。

「今日のこと嫌われたりしてなければいいけど」

遂にルメが何も喋らなくなると、ガドから切り上げを促され、コーヤ達はそれに従った。

皆の元に戻ると、微妙な空気が漂っていたが、唯一ボックスだけははつきりと喜んでいたのは覚えていいる。

『ありがとうコーヤさん。名前だけでも分かればビルドデカールが作れる。大丈夫、第一段階はこれでクリアできるよ』

両手があっしり掴まれてぶんぶんと子供みたいな握手をされた。彼に喜んでもらえたというのが、多分今日が一番良かった事だろう。

「収穫多くはなかったけど、二トラもコーヤちゃんもいい方向に考えた方が良くと思うっすよ。ひとまず、GBNへの悪影響は回避できそうなんすから」

「私もデニアちゃんに賛成。それにGBN中を探し回らなくていいだけでも大前進じゃないかな？」

デニアとキナは朗らかな声音で二人を元気づけるように言う。

モノは考えよう。そういう事なのだろう。一步は一步に違いない。そう考えを切り

替えようとコーヤも意識を移しながら、胸の前で小さく手を合わせる。

「よし。じゃあみんなミツシヨン行かない？ 今日はどこでも付き合うよ」

努めて明るい声でコーヤは提案する。自分でどこと言わず、付き合うというのが彼女らしいところではあるが。

それは皆も承知の事なので特に言及せず、それぞれ思い思いの案を挙げようと、思案し始めた時だ。

「いたー やつと見つけたー」

コーヤ達の前に少年姿のダイバーが駆け寄ってきた。

燃えるような赤い髪に黒いバンドナを巻き、ダメージの入ったデニムジャケットを羽織る姿はホビー系少年漫画の主人公を思わせる出で立ちだ。

少年の姿にコーヤは見覚えがあった。服装に違いはあるが見間違えはしない。

「ひと……じゃなくてジンガ。あんたどうしたのよ？」

突然現れた弟に、キナは狼耳をピンと立て、呆気にとられた顔で問う。と、ジンガはうんざりした顔で項垂れ、

「E.L.ダイバー見に行くなら俺も行くって言ったじゃん！ なのにすっぱかすとか有り得ないだろ！」

「ああーそうだったけ？ いやそれより見に行くって、あんた動物園行くんじゃないんだ

からもう少し言葉選びなさいよ」

「話逸らすなつて。ずるいよ姉ちゃんだけ!」

突拍子もなく始まった姉弟の言い合いに呆気に取られながらも、ニトラは咳ばらいを一つしてキナに問う。

「キナ。前に話していた弟つて……」

「はい! 申し遅れてすみません。ジンガです。姉がいつもお世話になってます」

姿勢を正し、はきはきとした声でジンガはニトラとデニアへ向き直ると一礼する。

その仕草が妙に畏まっていたせいか、ニトラとデニアも思わず礼を返してしまう。

「それで姉ちゃん! もうELダイバーと会ったの? なんなすごい感じだった!」

「期待してるとこ悪いけど、私は直接会ってないのよ。コーヤは話をしたけどね」

キナに言葉にジンガの視線がコーヤに向く。

そんな期待されても、と困り顔をするコーヤだったが、一方で丁度いいとも思った。

「ELダイバーの話もいいけどさ。ジンガくん、これから皆とミッション行かない?

今もその話をしてたところなの。みんなもいいよね?」

コーヤの呼びかけにはキナは勿論、ニトラも静かに頷いて見せる。デニアに至つてはもう既に楽し気な表情をしている。

「私、密かに楽しみにしてたんすよ! ファイター使いのステゴロ姉弟揃い踏み!」

うきうきという形容がびったりな様子でデニアはテーブルに身を乗り出すと、ウインドウを開きミツシヨン名がずらつと並ぶブックマークから手頃なものを探し始める。

「ジンガくんって、ガンダムだと何が好きですか？ やっぱGガン系？」

「あ、はい。Gガンも好きですけどSEEDも好きです。ああでも、せつかくなら集団戦のミツシヨンやりたいですね」

「なら一つ、やりたいミツシヨンがある。今回は俺の希望でも構わないか？」

今度は二トラがウインドウを開き、コーヤ達にメッセージにミツシヨン内容を添えて転送する。そして立ち上がりジンガの傍まで歩み寄ると自分のウインドウでミツシヨンを見せる。

「AGE系のミツシヨンで、そろそろ湧いてくるヴェイガンを相手に都市を制限時間いっぱい守るって内容だ」

「いいですねそれ！ こういうの成功したこと無いんでやりたいです！」

「じゃあそれで決まりつす！ キナちゃんもコーヤちゃんもいいつすよね？」

「異議なし！」

キナはビシッとサムズアップで返し、

「やります」

コーヤも控えめにサムズアップを見せて応じて見せる。

「お、なんかコーヤちゃんも乗り気つすね！ そいじゃあいつちよ行つてみまっしょう！」

おー！ つとキナとジンガが拳を振り上げ、二トラはミツシオンを申請する。
果たして五人のミツシオンは始まる事となった。

／／

地球に侵攻してきたヴェイガンから、制限時間まで高層ビルの立ち並ぶ都市を守る防衛ミツシオン。

撃破した敵機の数と都市の被害状況からスコアが算出され、より多くの敵を倒しつつ都市への損害を減らす事が目的となるオーソドックスな防衛ステージだ。

制限時間は10分。都市の規模は五人で守るにはやや広い程度の範囲。だが、このミツシオンの敵ヴェイガンはとにかく数が多い。

一体、二体と出てくる機体は徐々に増え、現在開始から3分経過。この時点で四方から複数の敵が同時に攻めてくるようになる。

敵勢力はガフランを中心にバクト、ドラド等の代表的なヴェイガン系量産機。AGE劇中でも蝙蝠戦役等度と喩えられた様に、大きな翼を広げて次々と飛来する異形のMS

の姿は、正に蝙蝠の怪物の大群だ。油断をしていると奴らは都市に群がり、作物を食い荒らすように防衛のゲージを削っていく。

まるで畑の害虫駆除みたいなミッションだ。

そんな感想を抱きながら、コーヤのGNアーチャーは上空のガフランの群れを撃ち落とすとしていく。

直撃コースにも関わらず、ガフランはろくな回避行動も取らずにビームを正面から受けて爆裂、四散する。以前戦ったザクに比べると拍子抜けする弱さだが、こうでもなければ次々と現れる敵機を捌き切れはしないだろう。

それに改造後の試運転も兼ねているので、丁度いい難易度だ。

そう考えた時、上空から一体。撃ち漏らした敵がコーヤの近くへと降り立った。

敵はガフラン。ドラゴンの様なシルエットを持つ異形のMSが、四つん這いの姿勢で降着する。

ガフランはGNアーチャーを見ると、直立姿勢へと変形。どうやら、コーヤを標的と認識したらしい。

「試して、みるか」

深呼吸を一つ。コーヤはGNアーチャーをバイクから降車させ、自らの意思で地へと立たせた。

数あるガンプラの中でもGNアーチャー本体は特に華奢な部類だ。コーヤの場合武装ユニットも兼ねる背部の大型GNコンデンサも外しているため、特に細さが際立っていた。

固定武装も無く、それ故に前回の熱砂の戦線では一方的な敗北を喫してしまふ。

その苦い経験からコーヤが愛機に施した改造は、四肢と背面に集中。白と赤の原典と変わらぬカラーリングで分かりにくいのが、形状は全体的に太くなり、鍛えて帰ってきたとも言わんばかりの容貌に変化している。

女性的な細い脚部には脛から膝を覆う装甲の追加。さらに脚部側面にはアリオスガンダムの大腿部にあつたGN粒子噴射ユニットを装備し、機動力の底上げが窺えた。

腕部もまたアリオスの腕に交換されており、力強さを増した腕が背中へと伸ばされる。

背中にはフィン状ノズルの大型ブースターポッドを挟むように左右一対の可動バインダーが配置され、GNアーチャーの右手がバインダーからせり出す柄を掴み、引き抜く。

ビームサーベルが伸びる。光り輝くビームの剣というガンダムで最も有名な武装を、コーヤは今初めて使用した。

相手は大したことは無い。そう自分に言い聞かせる手は、緊張で震えていた。

正面から接近戦をした事は一度もない。というより、バイクから降りてまともに戦えた試しがない。

だがそれでも、コーヤはGNアーチャーに剣を構えさせる。半身を引き、剣を水平に、突きを仕掛ける姿勢を取る。

「恐れず、迷わず、思い切りよく……」

ミッション開始前にキナからもらったアドバイスを唱えながら。コーヤは目の前の敵を見る。あとは、勢いに任せる！

「が、GNアーチャー！ 目標を！ 駆逐する！」

アクセル全開。GNアーチャーが突進する。

初めてのセミスクラッチで作ったフィン状ブースターは作り手の思いに応える様に大出力を発揮し、小柄なGNアーチャーを弾丸の様に加速させる。

一気に詰まる間合いに、近くなる敵がぐんと大きく見えるが臆するほどではない。バイクのトップスピード時に比べればこんなもの序の口だ。

いける。相手は棒立ち、捉えられる。確信と強烈な加速をビームサーベルに乗せて繰り出された高速の突き。

それは見事、ガフランにひらりと躲された。

「あ、あれえええ!？」

素つ頓狂な声を上げながらも、加速の勢いにつんのめりそうな機体をコーヤは一杯にレバーを引いてなんとか保たせる。そして制御が回復するなり、再度アタックを掛けようと振り返れば。

ガフランが自分の尻尾——ビームキャノンを担いでこちらを狙っているのが見えた。

「ウソでしょ!?!」

強引に脚を出して地を蹴り踏ん張らせて、GNアーチャーは方向転換。直後、ガフランのビームがGNアーチャーの頭部を紙一重のところまで通り過ぎる。

ジュ、という装甲を焼く音に冷や汗をかくコーヤだったが、すぐさま来るビームの連射にそれぞれどころでは無くなった。

異形のMSが放つ破壊の光の応酬に、GNアーチャーはブースターと両足の粒子噴射ユニットを駆使して巧みに逃げ回った。

滑るように地を低く飛び、脱兎の様に跳躍するGNアーチャーにガフランのビームは一度も当たりはしない。改造による足回りの具合は上々。バイクとは違う小回りの効き方が小気味良いが、逃げる程に流れ弾のビームが建築物に命中してゲージが削られていく。そして当たりこそしないが、狙いは妙に正確だった。

コーヤは考えを改める。こいつは撃ち漏らしたのではない。攻撃から生き延びたのだ。

「たまに強いのが混じってるってデニアさんが言ってたけど、これか」
「大丈夫、そのために私もいるんだから！」

回避行動を続けるGNアーチャーの横をすり抜け、交代に現れたキナのシャイニングガンダムがガフランへと飛び込んでいく。

ガフランは狙いをシャイニングガンダムに切り替えてビームキャノンで弾幕を張るが、キナはビームを何度浴びようと構わず果敢に前進する。

無茶な攻め方だが、相手の狙いが正確な分流れ弾は減らすことができる。そして何より、最短で間合いを詰めてこそそのMF。

間近まで接近し、そしてステップに砲撃の切れ間が重なった瞬間。シャイニングガンダムがブースターを全開にした。

ヴェイガン機は腕自体が武器だから携行火器の持ち替えが無い。その分接近戦への切り替えが早い。

ニトラが話した通り、ガフランは既に掌からビームサーベルを発振させ接近戦を準備している。

確か迅速な切替だ。一対一ならばこの特性は強みになるだろう。
完全な一対一ならば。

「コーヤ今だよー！」

「わかったー！」

シャイニングガンダムの背後からGNアーチャーが飛び出した。突き出された両腕の装甲がスライドし、内から短い砲身が現れる。

アリオスガンダムの腕の固定装備、GNサブマシンガンだ。

「いけえー！」

左右計四門の砲口が大量のビームを噴き出す様に発射し、ガフランへ光の雨が殺到する。防御も間に合わず無防備にビームの豪雨を浴びて、全身を射抜かれたガフランはそれでも踏みとどまったが、最接近したシャイニングガンダムの正拳が、とどめの一撃となった。

爆散するのを見届け、コーヤは安堵の息をこぼす。

どうにか退けた。そして悪くない動きもできた。改めて追加武装の手応えを噛み締めていると、駆け寄ってきたシャイニングガンダムがサムズアップを送ってみせた。

「ナイス。いい仕上がりみたいじゃん、新しいGNアーチャー」

「ありがとう。でもごめんね、盾になってもらっちゃって。シャイニングは大丈夫？」

「このくらい平気。何だかんだで攻撃軽かったし、睡でもつけておけば治るわよ」

「え……？ ガンプラに睡って、ちよつと汚くない？ 舐めるの？」

「いや冗談だよ！ しないよそんなこと！」

声を張り上げるキナに、コーヤは意地の悪い苦笑を返すと二人のもとにニトラから通信が届いた。

『そつちはどうだお二人さん?』

「さつきちよつと強いのは倒したところ。コーヤのGNアーチャー結構いい感じだよ」

『そいつは重畳。じゃあ好調ついでに頼まれてくれるか?』

レーダーを見てくれ、とニトラの言葉に促されコーヤ達はレーダーを見る。と、コーヤ達の現在地と真反対の北西側から小型の反応に混じって、目立つ大きな反応が向かってくる。一番近くで戦っているのはジンガ一人だけだ。

『デカイ反応は多分ダナジン。それかギラーガだ。ジンガ君の腕は分らんが、一人では恐らく荷が重い』

ダナジンはヴェイガン系最後の怪獣のような重MS。見た目通りの火力とパワーを誇るため、注意が必要とコーヤもレクチャーを受けていた。ギラーガは高性能指揮官機でこのミッションではボーンラスユニットの役割を持つ。ミッションのレア演出の部類であるため、前回のザクと同じく非常識な高性能である可能性も捨てきれない。いかに大半が有象無象といえ、強力な相手が混じり込んでジンガには厳しいだろう。

「分かりました。急行します」

『助かる。他は俺とデニアでどうにか抑えるからよろしく頼む』

「了解です。キナ、行こう！」

「はいはい！」

GNアーチャーは留置していたバイクに乗り、キナのシャイニングガンダムもリアへと陣取る。GNアーチャーにバックパックが付いた分、シャイニングガンダムは少し乗りにくそうだったが、器用に安定させる。

「飛ばすよ」

コーヤは短く告げると二体のガンプラを乗せたバイクが発進する。

都市ステージの舗装道路はバイクの走らせるには抜群の相性だ。操縦桿越しに感じる滑らかな路面の感触を確かめながら、コーヤは目標地点を目指す。反応はまだ都市部には至っていない。これならば、十分に間に合う。居並ぶ建造物の間ではあるが、道幅も広いため、ストレスを感じることも無くコーナーリングができるのも嬉しい。ミツシヨン中でなければ、窓ガラスに映り込む自機の姿を眺めながら、軽く流してみたいだ、とコーヤは思った。そんな時に、キナからの通信がきた。

「なんか、意外だね」

「どうしたの急に？」

「大した事じゃないよ。バトル用にはしないって言ってたコーヤが、すっかり戦えそうな改造してるから、なんかね」

通信ウインドウに映るキナが珍しく神妙な顔でぼつぼつと語る。

確かに、路線の切替はコーヤ自身も意外なほどだ。

「……なんか嘘ついちゃったみたいで、ゴメン」

「いやいや、逆に嬉しくて。こうやって皆で戦うの私は好きだから、コーヤも入って来て本当に嬉しいんだ」

いつもの朗らかさに戻るキナに、コーヤも僅かに表情を綻ばせた。キナと出会う以前なら絶対に考えられないと断言できる。キナがそう思うのも無理はないが、コーヤの中には理由がはっきりと存在していた。

「……この前のミッション。初めて悔しいって思ったんだ」

「悔しい？」

「悔しかったよ。結果的には勝てたけど、私なんにもしてなかったし」

本格的なバトルミッションは苦手だった。向いていないと納得していたし、こんなもので済ませていた。戦闘向きではないのだ、当たり前だと完結し、ため息一つで忘れていた。

だが前回のミッションの記憶は後悔となつて固まって、今もコーヤの中にある。

こんな事は初めてだった。一つのバトルの結果が小さな棘の様に残るなんて思わなかった。

「こういうゲームでパーティーを組むとき、頑張つて役に立たないとメンバーから邪険にされるって思ってたから、最低限の集団ミッション以外誰かと組むの避けてた。弱いのが分かってても、頭の中ハッピーセットなんて言われたくないし」

「あはは……さすがにハッピーセットは勘弁だよな」

「うん……フォースって、どこもそういうモノと思つてたから怖かつたし。でもこの前キナやデニアさんが助けしてくれた時に思つたんだ。頑張りたいつて」

頑張らなくては、でなく頑張りしたい。強制じみたチームへの貢献ではなく、受けた分を返したい。返せるだけのモノを仕上げたい。

そんな想いでコーヤは今のGNアーチャーを作り上げた。

そしてもしかしたら、今はその想いがルメという少女にも向いているのかもしれない。

いつまでも頑なになっていないで、外と向き合ってみたら意外と面白くやっつけていける。それを彼女にも伝えたい。

本当にこんなことを考えるなんて、とコーヤは無意識に微笑んでいた。

「でも腕前はご覧の通り。頑張るのが遅すぎた感はあるけど……つて何その顔？」

仏頂面になって問うコーヤの視線が見ているのは、ウインドウの向こうでニマニマした気味の悪い笑顔のキナが、ピコピコと狼耳を動かしている。

「べっつにく。あの話掛けんなオーラをプンプンさせてたコーヤがねえ。いやあ人つて変われば変わるもんだね。」

いひひ、と笑うキナに連動してか、後ろに座るシャイニングガンダムも熟知り顔を氣取る様にうんうんと、頷いている。

もしかして、恥ずかしい事を言ったのでは？

そう思ったが最後、コーヤの顔はみるみる赤くなつていった。おまけに操縦桿を握る手まで変にぶるぶるし始める。

ヤバイ。よく分からないけどダメなやつだ……。

つまらない事で乱れたというのに、焦りは情けないほど簡単に全身へ伝播していく。それでもどうにか持ち直そうとするが、冷静さを欠いたコーヤは、闇雲に強引な急ハンドルを切るのだった。

「ちよ、ちよつと、コーヤ！ 危ないよ！ 安全運転！」

「ゴメン手が滑つたまた滑るかもしれないから氣を付けて」

一息でまくしたてるコーヤの声には全く余裕が無い。どうやら、本当に暴走しかけているらしい。

「じよ、冗談じゃないわよ！ つて近、近いよビルビルビル近いから近いってビルああ角掠った！ ツノ私の角オー！ コーヤああああ！」

「あ、アテンションプリーズ！」

半ベそで上ずった声を上げるコーヤと顔面蒼白になったキナの悲鳴を引摺りながら、バイクは都市を駆け抜けていく。

途中、エンジンであるGNドライブが籠もったような奇妙な音を上げていたが、それは不調というよりと乗ってる二人へのため息だったのかもしれない。

／
／
／

こんなにも早く目処が立った。この誤算に喜びを覚えながら、端末を手元に依頼主の回答を待ち続けている。

……いや。それは正しくない。

今自分は回答が来ないことを心のどこかで願っている。誤算に対して無理に喜ぼうとしている。

伝えるしかなかった情報を、吉報と思い込もうとしている。

そしてそんな心情など知る由もなく、端末が震えた。

送付したメッセージに既読の文字が浮かび、返信の文章が表示される。

『確保したELダイバーの転送はいつ行う？』

第12話 それぞれは夜に思う

『確保したELダイバーの転送はいつ行う?』

無味乾燥とした一文。それを読んだ彼も淡々と返答する。

『素体は既に準備してある。手続きが済み次第速やかに実施する』

『承知した。転送のやり方はそちらに任せる。転送と現物の確認次第振り込みをする』

『承知した』

『念を入れて緊急事態のプランも送付するため、目を通しておけ。急場をしのぐためのモノも届けておく』

『承知した』

数行のやりとりを経て、ログを消去。連絡を終える。

随分な念の入りようだが、振り込まれる額を考えればそれも領ける。

その特異性、希少性は十分に理解できている。だが、本当にそれほどの価値があるのか?'

依頼を申し出された時、そう問わずにはいられなかった。相手は間髪置かず首肯し

たのが忘れられない。

E L ダイバーとは……。そう考えた時、部屋のドアからノックが聞こえた。

「兄さん、まだGBN? 母さんがご飯できたつてよ」

扉越しに妹の音がする。

端末の時刻を見れば、既に19時を過ぎている。確かに夕飯にはいい時間だった、

「すぐ行くよ」

端末を手に机の前から立ち上がり、のびをする。

家庭用のGBN筐体のおかげで大型店舗に行かなくてもいいが、同じ姿勢を続けているので体が痛む。

軽く首をひねりながら、自室のドアを開ける。

扉の前には車椅子に乗る妹がいた。肩口で切り揃えた髪に、薄くそばかすが残る見慣れた顔が、不満げに口を尖らせていた。帰宅してからだいぶ経っているはずだが、通っている中学の制服のまままだ。長いスカートの裾には包帯が巻かれた足首が覗いている。

「いくら暇だからって、遊び呆けていいのかな大学生?」

「いいんだよ中学生。話したろ、GBNでバイトしてるって」

話ながら車椅子の手押しハンドルを取り、居間に向けて歩き始める。

「それ前も言ってたけどさ、本当に仕事してるの? ていうかどんな仕事?」

「一応、エンジンア系？ あと接客」

「エンジンアは分かるけど、接客とか大丈夫？ ちゃんとスマイルできてる？」

「安心しろ。塩対応なのはお前に対してのみの限定サービスだ」

「うっわ、要らないよそんなサービス。もっと質の向上を要求する！」

「現在妥協点を模索中。しばらくこのままでお待ち下さい」

「妥協すんなし！」

頬を膨らませている妹を見てると、ふと先日話したことを思い出す。

「そっぴや、前から作ってたアツシマー完成したのか？」

「うん。ちょうど今日ね。だからまたGBN入らせてよ。変形ってどうするのか興味

あったんだ」

「はいよ。けど、最初っからアツシマーで本当にいいのか？ SD系とかベアツガイと

か、もっと可愛い系のガンプラもあっただろうに」

「いいの。人形があんなマカロンやどら焼きみたいな形になるの面白いじゃん。てか普

通に可愛いよアツシマー」

「……お前やつば変わってるわ。アツシマーをマカロンって言った人間初めて見たぞ」

確かにあのUFOの様な形態は、見ようによつてはそう見えなくもないがマカロンを持つてくる妹のセンスはやはり独特だ。せいぜい最中か月餅だろう。

「私にはそう見えただからそれでいいの！ ピンクにしたら絶対マカロンっぽい！」

「ああうん。そうだね……まあとにかく。飯食って体洗ったら筐体お前の部家を持つてってやるよ」

気のない返事に妹は頬を膨らませたが、無視して居間へと足を向けた。

数カ月前に起きた世界規模での通信障害の折りに、妹は交通事故に遭遇し足の自由が効かなくなつた。

上半身はほぼ無傷で無事だったのが救いだつた。最近になりようやく学校へも復帰し、今は時折GBNにログインして、自分の足で立つ感触を思い出している。それが妹の心のケアにもなっているが、現実と差が埋まっているわけではない。

根本的な解決が必要なんだ。そして高額になるが海外で高度な手術を受ければ、また歩ける見込みはあると医者は言っている。

だから今は、金が必要なのだ。

どんな事をしてでも。



ルメとの出会い。ジンガを交えての共同ミッション。新しい愛機の仕上がりの確認と……暴走。

目まぐるしかった一日を思い出しながら、タケウチ・ミヒロは自宅の湯船に浸かっていた。ほっそりした体を張った湯の中に肩まで沈め、普段三つ編みにしている髪はヘアクリップでまとめている。

最後のバイクの暴走はユキナにも申し訳ない事をしたと反省をしつつ、今日あった出来事を何度も反芻していた。

「ジンガくん、上手くなってたなあ」

そうぼつりとおぼやく程に、始めて間もないジンガの成長には、目覚ましいものがあった。

先のミッションでジンガの援軍として向かったコーヤとキナが目にしたのは、怪獣の様な姿のダナジン数機をたった一人で制圧したマックスターの姿だった。

厄介な高火力ビームをステップで軽やかに躲し、シールドボードで市街地を疾駆してはダナジンを翻弄。二丁拳銃で牽制しながら死角や背後に潜り込み、マックスター得意のハードパンチで胴体を抉り飛ばす。

ダナジンはその姿もあって、威圧感が他の機体とは異なる印象があり、コーヤも一度接近戦を仕掛けたが正直恐怖しかなかった。だからこそ余計に、果敢に挑みチームを勝

利へ導いた年下のダイバーの腕前は素直に称賛したいと思った。

GBNのハイランカーでMFを使うダイバーは意外と少ない。格闘系で一番に名が上るタイガーウルフも、MSベースの機体を使用している。ZAA-VZのシャイニングブレイクは有名だが、あれをMFと定義するのは些か無理もある。

飛び道具の少なさが不人気の原因とも考えられるが、そんな環境でもMFを選択した姉弟の好きという想いが気持ちいい。

ルメがああ二人のガンプラと話したら、どれだけ自分が愛されてるかを語ってくれるだろう。

そしてまた同じ結論が頭の中に浮かび上がる。

「……やっぱ、この手が一番可能性あるよね」

天井に昇る湯気を眺めながら、ミヒロは脱力した声で呟く。

ミッション中も、帰ってきてから夕飯を食べ、風呂に入り浸かっていた間も。ルメともっと話す方法が何かないかと、ずっと頭の隅にあった。

コミュニケーションを絶っていたルメが、自分と話した理由は一つしか考えられない。即ち、ガンプラと話したか否か。

と、ここまで考えてミヒロは大きくため息を吐き出す。

有効とは思っても、とても口に出せないむず痒さがある。いくらなんでもガンプラと

お話しに行こうなどと、

「相談していいものだろうか……」

ルメとはもつと話したい。そのためなら、何でも試したいという心は対面する前と何も変わっていない。

みんなのガンプラと引き合わせて色々と言っ合ってもらおう。特にニトラの話が正しいなら、彼のレギルスはルメと話した可能性が高い。例え相手がガンプラでも心を開ける相手が居れば、差はきつと歴然だ。ミヒロ自身それを痛感している。

どうにか連れ出せないだろうか。あとはみんなが集まれる日を調整して。そうして思考を巡らせていると、浴室の外から声がした。

「ミヒロく？ 寝ちゃってないかい？」

祖母の声が浴室の向こうから聞こえてきた。そういえば結構な長湯をしていたのだった。

「起きてるー。今でるよー」

風呂場にミヒロの声が反響する。温くなっていた湯船から上がり、体を拭きながら脱衣徐へ。頭のクリップを外し、水を吸って重くなっていた長い黒髪をまとめながらドライヤーをかけていると、鏡台前に置いていたスマホのランプが点滅している事に気付いて手に取る。

ユキナからメッセージが届いていた。

『今度ルメちゃんに会う時、私らのガンプラも一緒に会わせてあげられないかな？ 本
当にガンプラと話せるみたいだし……笑われるかもしれない提案だけど』

ドライヤーを一旦止めて、ミヒロは返信を打つ。

『笑わないよ。同じこと考えてた』

そう返信するミヒロの表情は、とても嬉しそうな笑顔をしていた。

／／

夜空に散らばる星の輝きを、澄んだ湖の水面は静謐に映し出している。

ここはGBNのエリアだったが、この場にはしのぎを削るダイバー達の姿はない。

今はただ穏やかな風が吹き抜ける、ただの湖のほとりだ。ほんの数分前から、そう
なったところではあるが。

この静かな湖畔に、ひっそり佇む巨影がある。深い濃紺と白色で塗装された、ZZガ
ンダムベースの機体。ガドのヘヴィーゼータだ。全身の装甲には至るところに損傷が
あり、片腕も失った痛々しい姿は先程まで激しい戦闘をしていた事を物語っている。

GBNの黎明期を共に駆け抜けた相棒をここまでボロボロにするのも、そして肩に乗

るのも久しぶりのこと。ガドは鬣を撫でる穏やかな風を感じながら、どこか懐かしそうに目を細めていると、ほどよい冷たさの風が心地よく鬣を撫で、テイメンションの彼方へと去っていく。

「腕を上げたな、コサギ」

「そういうお前は腕が落ちたな。二年のブランクがもろに出てるぞ」

ガドは傍らに腰かけるダイバー、コサギへと親しげに呼び掛ける。対して傍らに立つコサギと呼ばれたフクロウの姿のダイバーは、大きな目を半開きにして、どこか面白く無さそうに答えた。

コサギもガドと同じく、動物タイプのダイバーのスタイルをしている。ベースは茶色の羽毛のミミズク。140センチほどの小柄な体に服装は濃紺色の和装で、十六角形の頭巾に結袷袋、一本歯の下駄と修験者の様な格好をしている。

「二年……いやもつとか。たったそんだけなのに、GBNは大部変わってたんだな。久々にステージに入った時は驚きで声が出なかったぜ」

「二年ははたつたじゃねえよ。それに驚いたのはこっちの方だ全く」

目を細め、感慨深く感想を告げるガドと对象的に、コサギは無然としたまま言葉を返す。デフォルメされたフクロウの顔が見せる、拗ねた様な表情にはある種の愛らしさがあったが、それを本人に言えば本当にへそを曲げてしまうだろう。

「年単位で音沙汰無かった奴が、急に連絡寄越しやがって。しかもよりによつてこの場所によ。何があつた？」

「……ちよつとした心境の変化。今はそういう事にしといてくれねえかな？」

コサギの質問に曖昧に答えを返すと、ガドは蠶をいじりながら言葉を続ける。

「何ていうか、そう。けじめみたいなものだ。本格的にGBNを再開する気になれたから、憂いを少しでも無くしたくなった、というか……あれだ」

「要するに、お前がすつきりしたかつたんだろ？」

「……すまん。つまらん事に時間を割かせてしまつて」

ガドが耳を倒して心底申し訳無さそうな声で謝る。と、コサギは今度こそ呆れた顔のため息をつき、

「気にすんなよ。俺も久々にお前と戦えて嬉しかったんだ」

よく戻つてきた。そう言つて、コサギは右手側の翼を丸めて器用に拳を作ると、ガドへと突き出す。

ガドも応じて拳を握り、コサギの拳と突き合わせた。

「ありがとうコサギ。そして、すまなかつた」

「だからいいつて言つただらう」

「違う。さっきのバトルの事じゃない」

拳を下げたガドは、また静かな湖を見る。その目は注ぐ月光よりも哀しげな色に変わっていた。

「こうして、俺達のフォースをダメにしちまった事。ずつと謝りたかったんだ」

ガド達の立つこの湖畔には、かつて二人の所属していたフォースの拠点があった。

湖の中央には浮き家として作られたネストがあり、岸から伸びる栈橋を渡ってメンバーたちはネストを訪れた。扉を開ければ、中には気心の知れた仲間たちがいて、最新のミツシヨンや面白かったバトルの動画、最近作ったガンプらの話など、様々な話を和気藹々と飽くこと無くいつまでも語り合えた。

もうその時の光景は、二人の記憶の中にしか無い。

木造のフローティングハウスの本拠地も、そこに続く長い栈橋も、そしてメンバーの姿も。痕跡と呼べるものはこのディメンションから綺麗に消え、美しく何も無い湖だけが、最後の面影として残っている。

そして、解散となった経緯の一部始終にガドは関わっていた事を、コサギはよく知っていた。

知っていたからこそ、べちん、と翼の手でガドの頭を叩いたのだった。

「だから！ お前だけのせいじゃないってんだろうが！」

「いやだが、俺がもっと上手く立ち回れば……」

「のぼせんな。あそこまで拗れちまった人間関係をテメエ一人で取り持てるはずねえだろ。それに結局はこうしてほとんど引退しちまったんだ。お前がGBNを出ていく理由なんて、端から無かつたんだよ」

コサギはガドの言葉を遮る様に厳しい表情で強く言い放つ。一瞬、ガドはまだ何か言いたげな顔をしたが、観念したように言葉を飲み込んだ。コサギがその場に胡坐をかいて座り込んだのを見たからだ。

頑として言葉を曲げたくない時に見せるコサギの癖。これは一緒にフォースを組んでいたころから変わらない。

「ともかく、今はこの話は止めよう。これじゃいつまでも平行線だ。今はお前が復帰したことを喜ばせてくれや」

「……分かった」

力づくな笑顔を見せるコサギに、ガドも頷くよりなかった。裏表なく妙に頑固で、答えのない議論になると自分から話を終わらせる。その気性には昔から良し悪し共にあるが、今はそれが懐かしく、心地が良い。

ここはコサギの言う通りにしよう。それに自分の一方的な懺悔を聞かせるためだけに彼を呼んだのではないのだ。

「湿っぽい話はこれで仕舞にしてよ。聞かせてくれよ、E.L.ダイバーを拾った話」

「ああ、いいぜ。俺も話を聞いてもらいたかった」

ガドもその場に座り、コサギにELダイバーと出会った時の顛末、そしてELバースセンターでの出来事を語り始めた。

久しぶりのレイド戦。圧倒的なデストロイの巨体と、最前線で突き抜けたエクシアの勇姿。そしてダイバーたちの連携の勝利と、最後に出会ったELダイバーの少女。

そしてELバースセンターという見知らぬ施設が出来ていたことや、そこにいた目つきと口の悪いハロ。担当となった赤い髪の真面目な優男。何も話さないELダイバーの心を開こうと呼び寄せたメンバーのおかげで、ルメと言う名前だけが判明したところまで話すと、コサギは一つため息をする。

「相手側がだんまりとはな。難航してると言ってたが、本当に面倒な状況だ」

「それも仕方ない。だが、なんとかなるような気がしているつてのが本音だ。彼らもルメが自由に行動できるようにするまで、いろいろと手伝ってくれるとも言ってくれた。本当にいい子らだよ」

「いい子らってお前……。なに年寄り臭くなってるんだよ」

「突っ込むなって。なんとなく言いたかっただけなんだ。それより、さっき言ったダイバー達から聞いたんだが、あの噂お前も知ってるか？」

「噂？」

「ELダイバーはGBNのダイバーたちの好きな気持ちから生まれたって、そんな噂だ。誰が言い始めたんだろうな」

ガドは何でも無く言ってみたが、口元にはまだこそばゆさが残っている。教えてくれた二トラもどこかにはかむ様に言っていたが、その気持ちがかかった。

コサギの方は別段驚きもせず得心言った風に、ああそれか、と頷き返した。

「知っている。確か、流れ始めたのは第二次有志連合戦があつた頃だったか」

「ほう……もしかして、ELダイバーはもうそういう認識で結論になつてるのか？」

「さあな。だが真偽はどうあれ、そういう考えは俺も嫌いじゃない。それにその有志連合戦もELダイバーを守ろうとした側が勝つて、ELダイバーも数を増やしているんだ。あながち核心ついたりするんじゃないか？」

確かに、とガドも首肯する。その手のロマンはガドも好むところであり、何よりそう願いたい。

元より、ここが夢のような場所なのだ。ならばロマンの一つくらい許容してくれてもいいだろう。

「明日もELダイバーのところ行くのか？」

「そのつもりだ。もう少し落ち着いたらコサギもあの子に会いに来てくれ」

「分かった。こつちもまだ少し忙しいから、そいつが済んだらいつてみる。頑張れよ、ラ

イオンさん」

「ああ。やるだけやってみるさ」

そして二人はしばらくの間、互いの近況を語り、思い出話に花を咲かせた。

どれほど間が開いても、変わらぬ友であることを確かめ合う、ただそれだけの会話。それでも、本当にもう一度やり直すための一歩を踏めた。ガドにはそんな気がしていた。

第13話 フェイス・トゥ・フェイス

明くる日の日曜、ガドは早朝からGBNへとダイブした。

ガドは家庭用の端末を保有している。加えて今日は日曜日という事もあり、気兼ね無く朝から入り浸れるという訳でもある。

休日とはいえ、朝方のロビーの人だかりは土曜の夜と比べるとまばらだ。いてもソロで動いているダイバーたちのようだ。

ガドも今日はソロで軽く流すつもりだが、その前にE1バーズセンター立ち寄ろうと向かっているところだった。

コサギとは遅くまで語り合っていたにも関わらず、今朝は早く目が覚めてしまった。ずっと残っていた憂いが少し晴れたのもあるが、酒を入れなかつたからというのもあるだろう。

コサギとリアルで出会い、一緒に酒を飲む機会があればきつといい酒が飲める。そんな事を考えながら、ガドは上機嫌な足取りでセンターのエントランスをくぐる。

日曜の早朝ということでは入室しているか分からないが、ボックスがいたら挨拶をして、そしてルメの様子も見るともりだった。

それに昨日のコーヤとの会話から考えるに、ガンプラの声を介せば会話の目も出てくれそうだ。ハンガーにでも同行してもらえれば、話す切っ掛けを得られるかもしれない。

些か楽観的ではある皮算用をしながらガドは、ボックスの担当する部屋と向かい、途中の廊下を歩いていった時だ。

通路の先に白衣を羽織った赤髪の青年の姿が見えた。

ボックスだ。幸先がいい。そう思うガドは表情をほころばせる。

「早いな、もういたのか。せんせ——」

だが、掛けようとした言葉をガドは途中で飲み込んだ。

白衣の青年がボックスだったのは間違いない。だがそこに居るのは彼一人ではなかった。

傍らには小柄な少女がいて、ボックスは彼女の手を引いている。

ぼさぼさの翡翠色の髪、全身を覆うようなボロボロの茶色のマントをした少女、ルメ。二人の姿を認めた途端、ガドは表情をしかめた。E.L.バースセンターの職員が、E.L.ダイバーの少女を連れて歩いている。それだけならなら不自然ではない。

だがルメは怯えと恐怖の表情でボックスに縋るような視線を向けている。まるで捨てられそうになっている子供の顔だ。

こうなつては話が別だ。さらに無理に歩かされているのは明らかであり、今にもたたらを踏んで倒れそうな小さな体を、ボックスは力任せに引き上げているのがガドには見えている。

そしてボックスの顔は、ガドの知る穏和な好青年のそれではない。温度のない無表情でルメを見ようともしていない。まるで、荷物の運搬作業だ。

「先生！ コイツはどういう見だ！」

極力抑した怒声で、ガドはボックスへ呼び掛ける。と、ボックスはようやく気付いた様にガドの方を向く。振り向いた時にはガドも知る柔らかな表情になっているが、最早取り繕った様にしか見えず、ガドはより一層警戒を強めた。

「ガドさん、おはようございます。お早いですね。けどすみません。今は急ぎの用事があるんで、後にしてもらつてもいいですか？」

「出来ない相談だ。怖がつてる子を無理に連れ回すのが急用なら尚更な」

「ああこれですか……ええ。些か強引になつてしまったのは僕としても本意ではないんですよ」

「本意でないなら理由くらい説明しろよ」

「はあ、仕方ない。と、ボックスは億劫そうにガドと話そうと体を向ける。

「……端的に言つてしましますと、彼女の保護者になりたいと申し出てくれる人が現れ

たんです」

「……なんだと？」

淡々と切り出されたのは聞いたこともない話だった。脈絡の無さにガドは苛立ちを頭に眉根を寄せ、ライオンの表情が一層険しくなる。

その威圧感にルメは顔を背けたが、ボックスは眉ひとつ動かさず、自分の話を続ける。「その人……僕の知り合いなんですけど、身寄りの無いお年寄りで、頭や体はしっかりしてるんですけど、何分一人暮らしのせいかな長いこと寂しい思いをしてるそうなんですよ」

「その子を、可哀想なご老人の話し相手にでもしようってのか」

「はい、そんなところです。そのためにもすぐビルドデカールの登録をして、リアルへの転送を行います。勿論、彼女がこの調子という事も伝えてあります」

「聞くと見るとじゃ話が違う」

「分かっています。だからそのケアも含めて、リアルでも彼女たちの面倒を見ていくつもりです」

もつともらしい言い分ではあった。頷けなくもないが、ボックスの言葉は粗だらけだ。

まずルメの手を無理に引いてまで登録を急ぐ理由の説明が全くされていない。

事前説明があつたとしても、話し相手としてコミュニケーションを自ら断つてゐるルメが適任とは思えない。

雑だ。ガドにはボックスの言葉はどう捉えても、とつて付けた様な言い訳以下にしか聞こえない。

「まずは彼女の不安を取り除こう。段階をちゃんと踏んで、それからリアルと繋がれるようにしていこう」

「ええ……そう言つたのは僕です」

ボックスの表情が変化した。心から無念そうに、端正な顔を俯かせる。が、それも僅かな一瞬だった。すぐ様元の無表情になり、抑揚のない声になり。

「一足飛びになつてしまったのは、貴方にも彼女にもすまないと思つています。ですから……」

「さすがにもう苦しいぜ。やめようや」

これ以上は時間の無駄。そう判断したガドは断ち切るように言葉を放つ。

「あなたの言い分は、やらかしたヘマを必死に取り繕う新入社員の言い訳そっくりなんだよ。第一、見も知らぬ相手の所にたらい回しするのが本当に彼女のためになるのか、本気で考えたのか？」

「彼女のため、ですか。？」

ボックスの表情が、歪んだ。他者を嘲る冷笑を浮かべボックスは言う。

「だからさ、食い下がらないで下さいよ。そんな熱くなる必要ないでしょう？　いくら電子生命体なんて言ったて所詮はゲームの中のデータ。そんな本気になる必要ないじゃないですか？」

これまで聴いたこともない口調でボックスがまくし立てる。豹変とも言うべき変化に、ガドは面食らうよりも苛立ちが勝った。

共にルメを一人の人間と扱い、彼女がGBNで過ごせるように尽力しようと話した相手の本性がこんなものだとは信じたはらない。だが。

「そいつは、本音と受け取っていいんだな？」

「ご自由にどうぞ。けどすみません。時間がありませんよ、本当に」

ボックスが冷笑を消し、メニューウインドウを開く。

手早い操作でボックスは筒状のアイテムを手に取ると、それをガドの前へと放り投げた。

ガドはその動きに対応できず、立ち尽くした。ボックスが投げた筒が何か分からなかったからだ。

そして、すぐむガドの目の前で筒は大量の煙を吹き出し廊下一面を灰色の煙で覆い尽くした。

筒の正体は、発煙筒。もしくは煙幕と呼ぶ道具。通常非戦闘エリアでは使用する事出来ない、違法アイテムだった。

／／

ガドとボックスが対峙する少し前だった。

コーヤとキナも早朝からELバスセンターへと向かっていた。

コーヤは懇意にしている模型店に早朝から赴いて筐体を使わせてもらっている。

キナは部活の休みを利用し、彼女の父が持っている筐体を借りることでいつもより早い時間帯から行動ができたのだった。

「楽しみ過ぎて夕べは何度も起きちゃったよー」

「遠足前じゃないんだか。でも、そんなに楽しみにしてたのは意外かな」

青い髪と狼耳のキナはニコにした顔で、尻尾を楽しげに揺らして体いっぱい喜びを表しながら歩いている。今日はいつもの赤いマントはオフにしており、中に着ているキヤミソールとスキニーパンツにサンダル履きという軽装だ。

隣を歩く長身のコーヤは先日披露したマゼンタのライダースジャケット姿だ。キナのはしやぎ様に微笑をしているが、短い黒髪の合間から覗く彼女の目も十分に楽しげ

だった。

「うん！ 私自身そう思う。勿論試してみたかったのは本当に本音だけど、コーヤも同じ事考えてくれてたのが嬉しいんだよきつと」

「あの状況見てたら結構思い付くと思うけどね」

「それでも嬉しいの。シンクロニシティってやつよ」

こんな感じでキナは朝から上機嫌だ。

些細な事ではあるが、彼女には一大事なのかと思うと少し微笑ましい。

加えて、社交的なキナが乗り気なのはコーヤにも嬉しい。たまに強引な時もあるが、彼女のそんなところが進展をもたらしてくれる事を期待しつつ、センターへと向かっている、だ。

二人は周囲の異変に気付く。病院然とした施設内を駆け回るダイバー達が見えた。傍目にも伝わってくる慌ただしい空気に二人はどちらともなく足を止めた。

「何だろう？ こんな騒ぎになる様な場所じゃないのに」

「つていうか、なんかうつすら煙くない？ 気のせいかな」

言われて、コーヤも周囲を見るがキナの言う通り辺りに煙が漂っている。

何が起きているのか。異変を窺いながら足を止めた二人のもとにセンターの方から走ってくるダイバーの姿が見えた。

エルフの様な長い耳をしたメガネの青年ダイバーはひどく焦った様子で、センターに入れないことを説明すると、踵を返してまだ煙が立ち上るセンターへと駆け戻っていく。

「ねえコーヤ。これって、かなりまずかったりするんじゃない?」

「うん。ルメちゃん、大丈夫かな」

電脳世界で起きた小火騒ぎ、という意味不明な事態に困惑するキナと、不安げに表情を曇らせるコーヤの二人が顔を見合わせていると、背中の方から声をかけられた。

「あの、何かあったんですか?」

コーヤ達が振り替えると、初めて見る少女のダイバーがいた。

ブレザーにチェック柄のスカートという学生服の様な姿で、きれいなオレンジ色の髪に被る大きなベレー帽の下、大きな瞳が困惑気味に二人を見ている。

「私たちが今来たばかりで分からないんですよ」

「そうですか。あのじゃあ、ボックスって人見かけませんでしたか?」

ボックスの名に、コーヤとキナが反応する。

「ボックスさんのお知り合いですか?」

「兄です。ここでバイトしているって聞いたんですけど」

「ボックスさんの、妹さん?」

奇妙な縁に、キナが目を丸くしていると、巡り合わせの妙が連続して起きた。

コーヤとキナへ同時に連絡が来る。送り主は、昨日この場所で会ったライオン姿のダイバー、ガドからだ。

先日交換したフレンドコードへと早速来た連絡は、短い文章にディメンションの場所が添えられているだけの簡易なものだった。

たった一文、こう書かれている。

『ボックスがルメを連れ出した。可能ならすぐここに来てほしい』

／／

GBN内の宇宙。電腦の中に作られた無重力の世界へとガドは愛機、ヘヴィゼータと共に転移した。

目視できる範囲にスペースコロニーの巨大な姿が視界いっぱい存在し、コロニー近辺の宙域だと分かる。近隣に隕石は無いが、廃棄された宇宙船。撃沈され、艦体の割れたボロボロのサラミス級などが集まり、デブリ帯を形成して漂っている。

そのデブリ帯を背にして、一機のガンプラが待ち構えるように佇んでいるのが見え、ガドは移動する。

そして間もなく対峙した相手を確認する。筒状になった肩を持つ黄色い機体色のガンプラ。

VGMMS02。Gのレコンギスタで活躍したジャステイマだ。

機体への大掛かりな増設は見えないが、デカールや丁寧な仕上げと作り込みが見える。

ガンプラに限らず、本気で模型を作り上げる時に生ずる苦勞については、ガドもよく知っている。それを知る人間が、GBNに反旗する様なバカな真似をしたとは今も信じたくはない。

信じたくはなかった。

ジャステイマの傍らに浮かぶ物体があり、それが人の入ったカプセルと知った瞬間、ガドはジャステイマを明確な敵意をもって睨み付ける。

カプセルはZガンダムの劇中で主人公カミーユの母親を閉じ込めていたものと同型のもの。その中に閉じ込められているのは、ルメだ。

「先生よ、いくら何でも悪趣味が過ぎやしないか」

ボックスは答えない。

返答代わりにボックスから連絡が来る。フリーバトルの申し込みだ。

「何のつもりだ？」

「GBNらしくバトルで決めましょうか、ガドさん」

「バトルだと？ ふざけるのも大概に」

「ガドさんが勝てば、ルメちゃんをお返しします。けど僕が勝ったなら……」

ボックスは意を決した様に、言葉を発する。

「ルメちゃんを渡した金で、妹の足を治します」

その真剣な声音は、確かに普段の穏やかなボックスのものだった。

「お前さん、それがこの悪ふざけの動機か？」

「そういう事なんです。ELダイバーって存在は希少なんで、大枚はたいても欲しいって人は意外といるんですよ」

「だが明らかに違法だろ。よくは知らんが、この手の売買は黒だ、間違いなく」

「承知の上です。けどGBNとリアルを天秤に掛けたらどっちが重いかなんて明白でしょう？ 妹の未来のためにも、出来れば戦わずに、何も見なかった事にしては頂けないですか？」

誘う様に、ジャステイマがその右手を差し出す。共犯者になろう、と。

ボックスの言葉は、ELバースセンターで言い合った時よりも余程筋は通っている。

ゲームと現実どちらが大切か、当然後者だ。ここでガドが目を瞑れば、ボックスの妹から大きな不自由を取り除く事は出来るかもしれない。

それを理解し、踏まえた上で、ガドは言う。

「悪いな先生。やっぱ乗れない相談だ」

返答と同時にバトル申請の了承をする。

ガドのヘヴィゼータが臨戦態勢になった事を確かめると、ボックスはため息と共に差しのべた腕を引く。

「やっぱり泣き落としは無理ですよね」

自嘲気味に笑うと、ジャステイマの腕でルメのカプセルを弾く。

回転するカプセルの中。慌てふためくルメの瞳が、ガンプラのぶつかり合う姿を見た。

第14話 決闘

ただの考え過ぎ。きつとそうに違いないはずだった。

今日は日曜だと言うのに兄は起こされること無く起きていた。さらに明け方から出掛けたというのもただの偶然。

いつも土曜の夜は遅くまでGBNにダイブしているのが習慣だと言うのに、昨夜は筐体を貸してくれたのは兄の気まぐれな優しき。

そして家に筐体があるのに。わざわざ自分のガンプラを持って外出したのも、きつと大した理由はない。

ただの考えすぎ。そうに違いないと思いつつ、部屋に残されていた筐体で私はGBNにダイブした。

向かう先は兄が話していた施設。ELバスセンター。もしかしたら、急なバイトか何かかもしれない。そこで忙しくしている兄を見れば安心できる。こんなつまらない不安は消せる。

そう期待しながら訪れたELバスセンターは黒い煙が立ち込め、まるで火事現場だった。

騒然とした現場に居合わせてしまった。離れたいと思う一方でせめて兄の所在を確かめられないか、見た目自分と歳の近そうな二人のダイバーに話かけた。

青い髪に耳とふさふさ尻尾をつけた少女と、背の高い綺麗な感じの女性ダイバー。

二人が兄を、ボックスを知っていたのは本当に驚いた。

けれどそれ以上に二人が受け取ったメッセージ。その真意を二人から教わった時、私は打ちのめされた。

兄が不正に関与しているかもしれない。

アバターの体なのに、心臓が嫌な脈を打った気がした。



ガドとボックスが決闘を開始した時、同じデイメンションに三体のガンプラが転移してきた。

コーヤのバイクを駆るGNアーチャーと、キナのシャイニングガンダム。そしてボックスの妹、コルムの作ったアッシマーだ。

ゲートを抜けたGNアーチャーとシャイニングガンダムは飛び出した先が宇宙空間と分かると、すぐ様制動をかけて機体を制御するが、アッシマーは出て来た勢いのまま

真空空間をじたばたともがきながら流れていってしまふ。

「わっ、この何これ!？」

「コルムさん、掴まって」

差し伸べられたシャイニングガンダムの手を必死に手繰り、ようやくアツシマーが止まる。

安定を取り戻した事を確認すると、コーヤはバイクの姿勢制御用のスラスタを操り、組み合った二機の傍へと機体を寄せる。

動きからコルムはほぼ初心者と分かった。加えて機体が機体だ。コーヤもガンダムに詳しい方ではないが、GBNをプレイしているうちにある程度の知識は得ている。

黄色の丸っこい装甲とドムのようなモノアイフェイスをしたこの機体の特性は、幸い覚えがあった。

「アツシマーって、確か宇宙得意じゃないはずだから、気を付けて下さい」

「は、はい!」

コルムの返事とともにアツシマーがバイクの後方にしがみ着くのを確認すると、視界の隅で光が走るのが見えた。

遠い。そして何度も光の線が瞬いている。戦闘の光だ。

レーダーとマップで確認すると、光の方角にはデブリ帯が広がっている様だ。コーヤ

の機体の索敵能力ではそこに誰がいるかまでは判明しないが、おそらく……。

「ガドさんとボックスさん、戦ってる?」

キナが呟くと、コーヤもモニター越しに首肯で返す。

「かもしれない。とにかく急ごう。キナも掴まって」

「分かった……って、そのバイク宇宙でも走れるの?」

バイクの装甲にしがみつくとキナから、ある意味もつともな質問が来る。その時ふと、コーヤはこれが二人での初めての無重力エリアだと気付く。

「大丈夫。伊達に太陽炉を積んでる訳じゃないわ」

コーヤ機のバイクの下部、GNドライブから緑色の輝きが溢れ出す。

GN粒子を緑の風の様に棚引かせ、三体のガンプラを乗せた巨大な二輪車は無重力の空を走り出した。



火線が闇の中で閃く。爆炎が真空で咲き、瞬く間に消える。

近接戦を得意とするジャステイマと、距離を開けての撃ち合いを主とするヘヴィーゼータは一進一退で攻防を……否。互いに決め手を欠いたまま、何度も牽制を繰り返し

機動戦闘を繰り広げていた。

以前ガドはボックスへと自機のコンセプトを語っていた。ZZ版へビーガンダムという装甲と火力に比重を於いた機体であると。

両肩に長砲身のビームキャノン。両腕に固定されたビームガトリング。ダブルキャノンは背中から脚部ふくらはぎへ移され、正面への射角を確保している。さらに脛や胸部をAGE3等から流用した装甲で厚くした機体は、確かに重量級。

不用心に真正面からは撃ち合いたくない相手だ。かといってジャステイマの肩のビームシールドを張り、強引に接近戦を試みても、ヘヴィゼータは用心深く距離を取り、あるいはデブリ帯に逃げ込んで得意な間合いに近付かせてくれない。その一方で距離が開けば肩のビームキャノンが火を吹き、甘い動きを見せれば容赦なく撃ち抜かれる。その癖、逆に隙を見せたと思えば、それは誘いで両腕にあるビームガトリングガンでカウンターを狙ってくる。

これだけ手慣れた戦い方をして、二年以上ダイブしていなかったというのだ。向かって来るビームと相手の狙いを適切に見分け、回避しながらボックスはつくづく思う。

「ガドさん、上手いじゃないですか」

未だ被弾のないジャステイマの中、ボックスは笑う。一緒に組めたら、きつと楽しかっただろうな。心からの感想を抱きつつ、ジャステイマの右肩先端ハッチを開き、多

連装のファンネルミサイルをセット。爆発でデブリ帯に逃げたヘヴィゼータをあぶり出そうとミサイルを射出した。

「ELダイバーとか関係なく、ただのガンプラ仲間だったら良かったのに」

撃ち出された多数のミサイルはそれぞれの軌道で器用にデブリを避けながら、規定点に到達と同時に起爆。

広がる爆発が漂うゴミを吹き飛ばすのを見ながらボックスは思う。ただの一人のダイバーでしかなかった自分等が、ELバースセンターの手伝いを始めてから、環境は目まぐるしく変わっていった。

最初はただの興味本位だった。GBN全部を巻き込んで起きた第二次有志連合戦。その結果、ELダイバーとの共存路線に至った時にその中心に居た電子生命体という存在がどういう者か知りたいたいと思った。

そして都合のいい事に大学で学んでいた事が、ELバースセンターの協力者への募集要項と合致したので、ボックスはELバースセンターの追加職員として彼らとの接点を得た。

彼らを間近で知ることが出来たからこそ、言えることがある。

彼らは人間と変わらない。

仕草や反応、感情といった事だけではない。接している感覚、何気ない対話でさえあ

まりにも自然で、時にはGBNではなく、リアルに居るのではないかと錯覚さえする。彼らをデータの集合体と思わなくなるのに、時間はかからなかった。

彼らは尊ぶべき生命であり、個人だ。遊び場だったGBNだったが、今は彼らに寄り添える事を、仕事にしてもいいかもしれない。

そう思い、GBNの正規職員を指摘していた頃だ。

全世界規模で電波障害が発生した。

「いい加減にしろ先生ー」

ミサイルの爆発から逃れ、デブリの中から姿を現したガンダムがボックスへと急速に接近する。

爆発の中から抜けてきたヘヴィーゼータだが、損傷は極めて軽微だ。さすがは重装甲と言うべきか。さらに右手には白いビームサーベルの柄が握られている。

接近を避けていたが、ガド機のベースであるZは接近戦の打点が欠けている訳ではない。Zの標準装備、ハイパービームサーベルは原典通りであれば隕石すら両断する。そして今、長大な刀身が煌々と形成される。

だが、高出力のビームサーベルなら、ボックスのジャスティマも劣りはしない。

「今さら引けないですよー」

ビームライフルを左手に持ち替え、腰から抜いたフォトンバッテリー直結の高出力

サーベルが、敵機に劣らぬ輝きを発し、二機はこの戦いで初めて互いの剣を打ち合わせた。

「ガドさん強いじゃないですか。何年もダイブしてないとは思えませんね！」

「あんたもな先生！ 勝負でケリを着けようってだけはある！」

「ええ！ けど少しは手を抜いて下さいよ、後生ですから！」

「お前がバカを止めるなら考えてやるよ！」

「ごめんなさいねえ！」

高出力のサーベル同士が打ち合うたび、電光と衝撃が鋭く宇宙に迸る。互いの剣の力はほぼ互角。そして機体コンセプトの差で、技にはジャステイマに分があつた。

幾重にも打ち重ねた剣だったが、遂にジャステイマのサーベルがヘヴィゼータの肩を捉える。メガ粒子の刀身が砲身を一瞬で切り落とし、返す刃が胴を狙うが、ガンダムのサーベルが斬撃を阻む。さらにジャステイマの右肩の拡散ビーム砲目掛け、空いた左腕に固定されたガトリング砲を押し当て、発射。固定火器を潰されたジャステイマは僅かに怯み一度距離を取るが、ヘヴィゼータは追い続けるようにサーベルを振り回す。

分かつてる、バカな真似だつて分かつてるよ。

俺だつてこんな事を。

あの電波障害が起きなければ。

スマホをカーナビにしていた運転手が、焦ってハンドルを切り間違えなければ。

あの時、あの歩道を、妹が歩いていなければ！

ボックスは戦いに集中している。かすただけでも危うい斬撃をいなし、距離を取ろうと目論むなら追撃をかけ、終始勝つために立ち回っている。

集中している。なのに集中している今も頭の隅にちらつくのが収まらない。

まるでガンブラに興味の無かった妹が、作り方を教えて欲しいと言った時。

また歩いてみたいと言った、あの顔がどうしてこうも……！

「くそっ！」

ジャステイマの額が開き、ヘッドキャノンの砲門が開く。至近距離に肉薄していたガドは反射的に止まり避けようとするが、ヘッドキャノンはビームを撃ち出さなかった。

フェイント、とガドが気付いたときには遅い。圧力の消えた敵のサーベルをボックスは自分のサーベルで弾く。虚空にビームサーベルの白い柄が流れ、残光の輪を描きながら暗黒の中に消えていった。

瞬間、ボックスは左手のビームライフルを放り投げ、突きの構えでスラストターの出力を全開。背部のフォトンバランサーを激しく輝かせながら突進し必殺を狙う。

「まだだ！」

迫りくるビームの切っ先に覆いかぶせる様に、ヘヴィーゼータが左手を突き出す。機

体を焼き貫く衝撃がガドに伝わるが、装甲の厚さが剣の軌道を逸しヘヴィーゼータは辛うじて致命打から逃れる。

それでもジャステイマの勢いは止まらない。突きが決まらなないと判断するや機体全体をガドのガンダムへとぶち当て、そして組み合ったままガンダムをデブリ帯へと押し戻す。

漂うデブリの群れへ、ヘヴィーゼータを盾代わりにジャステイマは突入。大小様々な宇宙のゴミがぶつかる度、雨垂れが金属を叩く様な音が盾にした機体越しにジャステイマにも伝わってくる。そして前方、沈んだ艦の残骸を確認すると、勢いそのままにボックスは敵ガンダムを頑丈過ぎる粗大ゴミへと叩きつけた。

「がっ……いー」

衝撃がボックスの全身を揺らす。電子データなのに胃が揺れ、空気を絞り出させるような不快感がある。だが、ガドもこれと同等かそれ以上の苦痛を覚えているはずだ。

手は止めない。畳み掛ける。

左掌底をヘヴィーゼータの頭にぶつけ力任せに抑え付ける。相手も抵抗するが、正面に向く事さえ阻止できれば相手の切り札、ハイメガキャノンを封じ切れる。

ボックスは確信した。このままジャステイマのサーベルがヘヴィーゼータを切り裂けば、勝ちだ。E.L.ダイバーを渡して、金が手に入り、妹の脚が治り、そして――。

ビームサーベルの光が、急激に弱くなった。

「なんだ、どうしたジャステイマ!？」

不自然な出力低下に慌てるボックスだが、コンソールの表示に破損部位が示されていた。破損箇所は腰部。後ろのスカートアーマーにあるフォトンバランスが破壊されている。

斜め下から突き出るビームサーベルに貫かれているのだ。

理解が追い付かなかった。なぜこんな場所から突然ビームサーベルが生えるのか。

答えは余りにも簡単。最初から相手の脚に装備されていた。それだけだ。

ヘヴィゼータの脛部装甲に使用されていたのはAGE3オービタルの腕部装甲。ビームサーベルを収納し、収納状態で剣としても使えるギミックがある。それを使った変則的な膝蹴りがジャステイマのバランスを破壊したのだ。

そして一瞬であろうと、パワーダウンした隙をガドは逃さなかった。

ガンダムの頭を掴んでいた手を払い除け、ヘヴィゼータはお返しとばかりにジャステイマの角を掴む。

ヘヴィゼータのバイザーに覆われた顔が、ジャステイマを睨み付けた。額に備え付けられた大砲にはメガ粒子の光がぎらぎらと輝いている。

「ガドさんー!」

「負けられないんだよ、お前のためにも！」

ガドは叫び、ハイメガキャノンが雄叫びをあげる。最大出力50メガワット。コロニーレーザーの20%にも匹敵する絶大無比なエネルギーが、至近距離のジャステイマ目掛けて迸った。

第15話 傷の記憶が疼こうと

二機の僚機をバイクに乗せ、GNアーチャーがデブリ帯に差し掛かろうとしていた時だった。

宇宙を駆けるバイクを操りながら、レーダーを注視していたコーヤは、進行方向に強烈な光が瞬いたのを見た。

光が見えたのはほんの僅かな瞬間だったが、落雷の様な激しい輝きはコーヤ達三人の目にもしつかりと焼き付いている。

「今のって、まさか……」

バイクにしがみつくアツシマーの中。コルムは目にした閃光の激しさに息をのみ、不安げに口元を抑える。

急がなければ。真剣な眼差しでコーヤは彼方の宙域を見据え、コルムとキナの二人に告げる。

「飛ばすよ。みんなしつかり掴まってて」

「分かった！ 遠慮なくやっちゃって！」

「は、はいー！」

同乗者の了承を得て、コーヤは正面コンソールを操作。表示させるのは、トランザムの文字だ。

GNアーチャーを改良してた時の副産物。バイクの車体にはほとんど手を加えていなかったが、改良により本体のバランスが向上したのか、六秒しか持たなかった効果時間は十数秒まで延長を果たしていた。

それを使って一気に距離を詰める。そう意を決めて、トランザムを起動しようとした時だ。

不意に、コツクピットに通知を示す電子音が鳴る。GNアーチャーのセンサーが奇妙な反応を拾った音が、コーヤの指を止めさせた。

「なに……?」

センサーの目を向けると、そこにはデブリ帯の外周を漂う小さなカプセル。

その中を示すアイコンには、UNKNOWNと表記されたダイバー名があった。

「ごめん、一度止まる!」

コーヤが告げるや否や、GNアーチャーは前方のスラスタを噴かし制動をかける。バイクが十分減速するとGNアーチャーはハンドルを離し、無重力空間へと機体を泳がせる。

「コーヤどうしたの!?! 今は急がないと!」

「ごめん！ けどここに、もしかしたらルメちゃんがいるかもしれないの！」

手を伸ばすシャイにくガンダムにGNアーチャーが振り向きながら答えてまた正面へ向き直る。目前に目標の物体、カプセル型のオブジェクトを視認し、最大望遠でカプセルの中を確認する。

コーヤの目に映ったのは、褐色の肌と翡翠色の髪をした少女が、カプセルの内壁に手をつけて立っている姿だった。

「ルメちゃん！」

GNアーチャーがカプセルを抱えると、すぐに接触回線でルメの声が聞こえてき。啜り泣く様な、悲痛な声だった。



一条の閃光は闇を切り裂き、ハイメガキャノンの咆哮は真空の宇宙に束の間の轟音を轟かせた。

照射時間は僅か数秒に満たないながら、射線上にあるデブリの悉くを蒸発させ、そして光はデブリ帯にぼっかりとした虚空を作る。

宇宙に穴が開いたようだ。自身が作った破壊の跡を見ながら、ガドは大きく息を吐

き、愛機を動かす。

朽ち果てた沈没艦に背を預けていたヘヴィゼータが、朽ちた装甲を足場にして虚空に飛ぶ。その右手は喪失していた。

「ボックスの野郎、あの状態でよくもやりやがる」

ハイメガキャノンを発射する瞬間、ジャステイマは右手のサーベルを捨て、マニピュレータで直接ガンダム横つ面をぶん殴ってきた。その一撃で射線が僅かに逸れ、ヘヴィゼータは自身の大出力ビームを浴びたために右手を失っていた。

ハイメガキャノンはエネルギーの大半を消費する大技である事はこのGBNでも変わらない。さらに右手も消失。左腕はビームサーベルを受け止めた時に手首を根本から抉り取られ、固定武装のビームガトリングは相手の武器を接射で破壊した際に壊れていた。さらにジャステイマから受けていたダメージの蓄積もあり、今使える武装は右肩のビームキャノンと、左足に残ったビームサーベル兼用のビーム砲一門。状態は満身創痍の一步手前といったところだ。

だが、ガドの眼前に漂っている機体の損傷の度合いは、ヘヴィゼータ以上のものだった。

ハイメガキャノンを至近距離で受けたジャステイマは左半分が完全に消滅していた。頭部の左目を始め、強固なビームバリアを張る肩も跡形もなく消えている。

そんな状態でありながら、ジャステイマのメインカメラにはまだ闘志を示すように光が残っていた。機能停止同然でありながら、紙一重で健在と判定されているのだ。その証拠にシステムは未だにどちらにも勝利宣言を出していない。

「いい根性してるじゃねえか」

「ありがたい、ごさいますねえ……。じゃあ、続きやりましょうか」

ぎりぎりに残された体を火花を散らし軋ませながら、ジャステイマはヘヴィゼータへと向き直る。

様々なエラーとアラートで真っ赤に染まるジャステイマココックピットの中、ボツクスはまだ消えない闘志でガドのガンダムを睨みながら、最後に残ったビームサーベルをボロボロの愛機に掴ませる。

「まだ、俺もジャステイマもやれるんですよ……。油断してたらバツサリいつちやいまずからね」

何がバツサリだ。

ジャステイマは丸腰も同然だった。ビームライフルは自ら放棄したため既に無く、手にしているビームサーベルはろくに刀身を作ることすら出来ない。右肩にファンネルミサイルが数発程度残されているが、打撃力不足は否めない。

ガドも火器のほとんどを消耗しているとはいえ、最早勝負になろうはずもない。にも

関わらず、相手からまだプレッシャーに似た戦意が放たれている事を、ガドは肌で感じていた。

「もうよせよ。やろうとしてるのは違法だつて分かつてるだろ？ まだ未遂だ。情状酌量だつて見込めるんだぞ」

「できませんね。それに理不尽な目にはあつてゐるなら、一個くらいお目こぼしがあつてもいいつて、思いませんか？」

「悪いが思わん。こればかりは断言だ」

「ははつ。手厳しい。けどね、やっぱ必要なんですよ。だから」

勝つて、通ります。

ボックスの闘志は本当に失われていない。ポロポロのジャステイマからは本気で喉笛を狙う気迫をひしひしと感ずる。

感じて尚、ガドの口を突いたのは、深いため息と、覚悟を確認する様な問いだった。

「お前が納得してるのはよく分かった。けど、世間とお前の妹がそれで本当に納得すると思つていいのか？」

「そんなもの、俺が黙つていれば」

「お前一人が黙つたところで、漏れるときは漏れるんだ」

半壊したジャステイマへ、ヘヴィーゼータが接近。しかし攻撃するそぶりは無い。ガ

ンダムは半壊した左腕で相手の残された右肩へと触れる。より近くで言葉を届けようとする様に。

「お前がやった事が明るみになって、その金で妹さんが歩ける様になった事が分かった時。世の人間が同情だけすると思ってるのか？ この何度も誹謗中傷を繰り返す世間様がよ？」

「大袈裟な！ たかがゲームのリアルマネートレードごときで」

「甘くみてんじゃねえぞ小僧。金が絡むって時点で軽い話して済むか。犯罪者の身内っただけで、面白おかしい叩きの種だ」

ELダイバーの誘拐。それが今の司法でどんな罪があてがわれるか等、ガドには分からない。

だがもしそれが明るみになった時。その当事者にボックスと彼の妹の名が挙がった時。このGBNのダイバー達が過激な行動に出ないとは言いい切れない。

愛するものを侮辱された時、人は胸にどんな色の火を燃え上がらせるか。その片鱗を知っているからこそ、ガドはボックスへ言葉を続ける。

「非合法的な真似をしてまで治した妹を、くそ下らねえ遊び道具にしたいのか？」

「……そんな事、そうそうある訳が」

「あるんだよ。少なくとも、俺がマスダイバーだった時はそうだった」

「……………え？」

マズダイバー。GBNでは久しく聞く事のなくなつた、チートプレイヤー達を指す忌まわしい名前。かつてそうであつたというガドの告白に、ボックスはただ目を丸くした。

「俺も良かれと思つて、ブレイクデカールに手を出したんだ。全然勝てなくなつて、空気の悪くなつたフォースを良くしたかつた。どんな事をしても勝てばきつと好転する。そう思つたんだよ。バカな事にな……………」

「貴方のフォースは、どうなつたんですか？」

「勝つたよ。けど、それが皆とやつた最後のバトルになつた……………」

ガドは無意識の内に、自分の胸を鷲掴みにしていた。掘り起こした辛い記憶に耐えようと、力で自分を制する様に。

「終わつた後、散々言われたよ。卑怯者、恥知らず、汚い真似までして勝ちたくなかつた。お前なんか……………出ていけ。それで言われるまま出て行つた。それだけで終わればまだマシだつた」

胸を抑えるガドの手に、一層力が込められる。

「不正をやつた奴の仲間だから……………そんな理由でみんな一緒ただだ。俺の抜けた後もマズダイバーを抱えていたフォースつてだけで皆腫れ物扱い。まともなバトルすら受け

付けて貰えなくなって、空中分解……笑える話だろ？」

そう言ったガドの顔こそ、悲しげな半笑いを浮かべていた。

ガドはあのフォースが好きだった。一緒に笑い合い、共に切磋琢磨するのが楽しかった。新作は何を注目している？ この改造を見てくれ。次はあのミッションを、みんなです。そんな他愛ないやりとりのために毎日何時間もダイブした。

あの場所を守りたかった。守りたかったのに、自分の手で粉々に壊してしまった。

「たかがゲームでこれなんだ。金の絡んだりアルならもつと酷い事にだってなりかねない。だから分かってくれよ、ボックス」

「ガドさん、でも……俺はもうやっちゃまった後なんだ！ もう突っ切るしか——」
「やり直せる。もう一度立ち上がれる」

ボックスの諦めを否定する様に、ガドは己の言葉を重ねて遮る。

そしてどういうわけか、ガドの言葉はボックスの耳にもどこか馴染み、覚えのあるフレーズに思えた。

「ガドさん、それ……」

「知らないか？ 今GBNで一番流行っている動画に出てきた言葉だぜ……」

そう、これはあの時ガドというダイバーを救った言葉だ。

アヴァロンのフォースネストを舞台にGBNのオールスター共演となった、あのアル

スイベント。

そのライブ配信中で、とあるダイバー達が言っていた言葉だ。

セラヴィーガンダムシエヘラザードと共に戦った白いSDガンダム。そしてキャプテンジオンと共にアルスの戦闘艦を両断した、イージスガンダムの改造機。それぞれのダイバーが叫んだ言葉だ。

あのGBN中が熱狂した大イベントを、ガドはリアルから見ている。

二人の言葉がガドに一番奥に突き刺さり、塞いでいた情熱が溢れてくるのを止められなかった。

そして思ってしまったのだ。こんな卑怯者の自分もまたやり直せると、願ってしまったのだ。

燻ぶっている自分を認め、自分の過ちを思い出す度、心の中でいつも唱えていた。そして、もう一度GBNを始めようとした時。何度この言葉を繰り返して自分を鼓舞したか。

だからこそこうして、愛機と共にこの場にガドは居る。

「さつきも言ったろ。お前さんは、ギリギリ踏み止まれているじゃねえか。まだ取り返せる。ここで仕舞にして戻ろう……分かってくれ、ボックス」

ボックスにも伝わっている。ガドは真摯に、自分のやろうとする事を止めようとして

いる。だが頭で分かってても、それでも脳裏に過るのは、あの日の妹の表情だ。もう歩けないかもしれないと言われた日の、縋る様に笑う妹の姿がボックスの呼吸を苛む。

毫るように喉を抑え、ジレンマと息苦しきで心がどうにかなりそうなその時だった。

辛うじて生きていたジャステイマのリーダーが、彼方から矢のように飛来する緑色の光と三体のガンブラを補足する。そして三機の内の一体が、本来ならば宇宙での行動を想定していないアツシマーだと分かった瞬間、ボックスは目を見開き、到来した機体を見る。

「そんな、まさか」

驚愕しながらも、ボックスは頭に浮かぶ想像を否定しようとする。が、それを否定する様に便乗していたバイクから飛び出して、アツシマーのダイバーはボックスへ向けて叫ぶ。

「兄さん！」

慣れない宇宙空間に飛び出し、不恰好に手足をばたつかせるアツシマーは、組み合ったままのボックスとガドの元を目指した。

アツシマーのマニニューバは赤子の様に覚束なく、亀の様に遅い。いつまで待っても、こっちは届かないと見かねたのだろう。

「行つていこよ」

へヴィーゼータがジャステイマをアツシマーのいる方角へ向けて、壊れた腕で突き上げる様に押した。発生した慣性に流されるままジャステイマはアツシマーの元へと漂着し、その腕に抱かれる。

接触回線が開き、ウインドウに見知らぬ少女の姿をしたダイバーが表示される。それが妹のダイバールックだと気付くには、数瞬の時を要した。

「お前、こつちだとそんな姿なんだな」

「全部聞いた、ルメちゃんって子に。私、兄さんにそんな事して欲しくないよ」

話したんだ、ルメちゃん。最近まで一言も言葉を話さなかったELダイバーの少女がお喋りになった事に少なからず嬉しさを覚えてしまった。そんな筋合いなどもうないというのに。

「まだ、かもしれない、の段階だから。絶対に歩けないじゃないから。リハビリ頑張るから。まだ無理しなくていいし、これからもバカな真似だけはしなくていいから」

「……だけど」

「手は動くんだし、ちゃんとガンプラ教えてよ。このアツシマー可愛く塗りたいたんだから。なんなら塗ってくれてもいいんだからね」

「そこは、自分でやれよ」

「じゃあ尚更。ちゃんと教えるためにも、いてよね」

「……分かったよ」

メニューを操作し、ウインドウをポップアップ。表示にはこうある。

『Surrender? Yes or No』

ボックスの指は迷わずに、Yes をタップした。

間を置かず、システムがガドの勝利を告げるのを聞き届けると、ガドはため息で髭を揺らし胸を撫で下ろした。

「間に合ったみたい、かな」

「うん。お手柄だよコーヤ。今日の君はGBNとダイバーの平和を守ってくれたヒーローだ。後で金メダルを進呈してしんぜよう」

ふふん、と。通信ウインドウで得意げに笑って見せるキナ。コーヤも調子を合わせて微笑笑をする。

「ならもうちよつと色付けてよ。お手製のメダルよりポイントちようだい?」
「調子にのんないのー」

そしてコーヤとキナの二人は笑い合うと、改めてキナのシャイニングガンダムが手にするカプセル内のルメへと通信を開く。

「もう大丈夫。二人の喧嘩は終わった。心配しないでいいよ」

「あ、ありがとうございます。コーヤ、さん」

「コーヤでいいよ。ルメちゃん」

はい、とルメは短く少し恥ずかしそうに答えた。

コーヤがデブリ帯の傍でカプセルに接触した時、ルメは泣きながらカプセルの壁を何度も叩いていた。二人を止めてと叫び続けながら。

ガンプラの声が聞こえる彼女には、ジャステイマの悲鳴が痛いほどに届いていたらしい。そして声の中には、ボックスが行動を起こした動機も含まれていたため、三人が事態を理解する助けにもなったのだという。

「ボックスのガンプラ、お礼言ってる。間に合ってくれて、ありがとうって……」

「そう、なんだ。なら、私も嬉しいな」

「うん。そうだね……」

一件落着。コーヤとキナがアツシマーと、抱き止められるジャステイマを目を細くしながら眺めていると。

穏やかな空気を引き裂く様に、全機のコックピットにアラートが鳴り響いた。

「なに!? どこ!?」

「キナ後ろ!」

コーヤの声と背後から強襲する存在に、キナは反応できなかつた。

バイクに掴まっていたシャイニングガンダムの背中に衝撃が走った。

弾き飛ばされ、真空をぐるぐる回りだした機体の腕の中から、ルメの入ったカプセルがこぼれ落ちる。

その瞬間をめざとく、まるで獲物をつきさらうトンビの様にそれは現れ、カプセルをルメを奪い飛び去っていく。

青い機体色とエイを思わせる独特なシルエット。そんな機体は多種多様なガンブラの中でも一つしかない。

「ハンブラビだと!? ボックスお前! 最初からこのつもりだったのか!」

「違う! これだけは本当に分からない!」

「ごめ、コージャごめん! とにかく、お願い!!」

苛立つガド、困惑するボックス、悲鳴を上げるキナ。

暖かだった空気がぶち壊され、混乱し散らばろうとする心を奮い立たせる様に、コージャは叫ぶ。

「トランザム!」

瞬間、GNアーチャーは赤く輝く風になった。

残像を伴いながら全速力でアクセルを吹かし、GNアーチャーは無粋な乱入者であるハンブラビを追撃。

ひどい気分だ。それを律しようと込めた力に操縦桿を掴む手がびりびりと震えてい

る。すべてが丸く収まるはずの場面を台無しにされた。絶対にやってはいけない事をあの機体はやった。

許せるはずなんてない。

コーヤの怒りに呼応するが如く、GNアーチャーはこれまで出したことも無い速度を發揮し、一迅の彗星の様な勢いで宇宙を駆け抜けていく。

ハンブラビもかなりの速度で飛んでいるが、追い続けるGNアーチャーの速度と加速は次元が違う。青いMSとの距離は見る間に縮まり、コーヤは射程圏にハンブラビを捉えた。バイクの両ハンドルを外し、二丁のビームライフルとして構えながらバイクに立乗りの姿勢となって逃げるハンブラビをロックする。

「このバカヤロオオー！」

感情を爆発させた叫びと共に、コーヤは引き金を引いた。

高濃度圧縮粒子がライフルの銃口から解放され、二条の閃光が走る。一本は閃光はハンブラビの翼に直撃。もう一本は、カプセルを掴む右腕を撃ち抜いた。

「ルメちゃん！」

損傷して飛び去るハンブラビを無視し、コーヤは限界寸前のトランザムを解除する。そのままバイクを足場にGNアーチャーをカプセルへ向かって飛び出させる。

飛びつく様に回収したカプセルの中身は、空っぽだった。この狭い空間の中にルメの

姿が確認できない。

一瞬宇宙に放り出されたかと焦ったが、カプセル本体には損傷は見られない。

「前にもあったエリア移動……？ それともさっきのハンブラビ？」

コーヤは周囲を見るが、既にハンブラビの機影は消えていた。エリア内にも居ないようだ。

自分のガンブラに他人を乗せることは出来るが、逃走するハンブラビがそんな素振りを見せてはいない。カプセルに外傷が無いことから、ハンブラビのダイバーが接触したとも思えない。

だとすれば、ルメ自らエリア外に移動したとも考えられる。最初に出会った時の前例もある。希望的な話ではあるが、そうと願わずにはいらなかった。

第16話 ELダイバーを探しに

目覚める。目覚めると、自分が存在していて戸惑った。

触覚があった。嗅覚があった。聴覚、視覚があつて、それらが感じ取るモノ達への知識があつた。

例えば、周囲に立ち並ぶのは樹木。生い茂る緑色のモノは植物で、色とりどりに咲いているのが花というのも分かる。そういった景観からして、ここは森林と呼ばれる場所なのだろうと予想した。

受容する様々な事柄はどれも初めて見聞きするものばかりだったが、思考はそれらを整然と処理し、滑らかに結論を連続させる。

分かる。理解ができる。けれど分からない。

突然どうして、私は体を手に入れ、ここに立っているのだろうか。

所在無げにその場へあたり込んで自問自答をしていると、聴覚が何かを聞き取るのを感じた。知識にある自然界の音ではない。それは意思伝達を目的として生物が発生する音声。

「……言葉？」

初めて発した、自らが生み出した音。それが自分の声だと分からずに驚く。深呼吸して、もう一度耳を澄ませてあの音……声を探す。

「……聞こえた」

彼女は引き寄せられる様に、声のする方へと歩いていく。それは会話をしたかったからから、孤独を埋めるためだったのかは彼女自身も分かっていなかった。ただ森を抜け、轍を踏み越え、他者を求めて歩いた。

そして、視界の開けた場所にたどり着いた時、彼女はそれを見る。

戦う二体の巨影の姿を。

彼方からでも巨体と分かる威容と、ステップの度に伝わってくる激震に彼女は怯え、木陰へと身を潜めさせた。

そして太い木の幹を盾代わりにして、彼女はおそるおそる二体の巨人を観察する。

光る剣を振るう白い巨人と、赤い斧を携えた一つ目の緑の巨人。

武器を持った二体が戦っているのはすぐに分かった。剣と斧が打ち合う度に巻き起こる大音量の激突が衝撃となって彼女の肌をびりびりと撫で擦る。

もしも、傍でどちらかの指一本でも切り落とされ、頭上に落下してきたなら、間違いなく大ケガでは済まないだろう。

だが、彼女が本当に恐怖したのは、巨人の姿や大きさではなかった。

近付いた事ではつきりと伝わってきた。

二体の巨人はどちらも喜んでる。

二体は楽しんで、互いを攻撃しあっている。喜んで痛みを享受し、嬉しそうに相手を傷付けている。

彼女は既に痛みについて知識を持っていた。理解しているからこそ、痛みを与え合う行為に喜びを感じるなんて、狂っていると思えなかつた。

おそらく二体の巨人……ガンプラは創造主であるビルダーの想いに応え、互いに競う喜びと相手の強さの嬉しさに、最高の動きで応えようとしていたのであろう。

だが、彼女の心は不幸にも幼すぎた。

繰り広げられる戦いを、荒れ狂う暴力として受け止めた彼女は、その暴力がいつか自分に向けられるのではないかと本能的に恐怖し、二体の巨人に背を向けて走り出した。

遮二無二に足を動かし、あらん限りの力で両耳を塞ぎ、遠く遠く。あの巨人たちの嬉しそうな声が届かない場所を目指して走った。

ルメというELダイバーが誕生して、僅か五分。彼女の生は、恐怖から始まった。

／／／

水平線に太陽が沈んでいく。広大な海が夕日の色に染まり、夜が訪れる前の海岸を彩っている。

電子の世界に再現された美しい海岸線を横目に、バイクを駆るGNアーチャーが走り抜けていく。

そのスピードは緩やかで、跨がるガンプラも時折首を横に振り、何かを探す素振りを見せながら、浜辺にタイヤの跡を一本のラインとして刻み駆け抜けていく。

GNアーチャーのコックピットの中、コーヤはレーダーやセンサー、外部映像に注意を払いつつ機体を操作していたが、不意に聞こえてきた電子音にバイクの速度を下げ始める。

眼前。GNアーチャーの前に広がる果てしなく続くように思えた海岸線に、不意に終わりが現れたのだ。

移動エリア限界。コックピットに表示されたウィンドウにコーヤはふつ、と小さなため息とともに、目にかかる艶やかな黒髪をかきあげた。

「……これで全部、か」

コーヤの瞳に映る海岸はあくまで映像。景色ではなく、壁に描かれた風景画。いかに広大なGBNといえど限界はあり、果てしない地形の完全再現には至っていない。だが有限の大地でなければ、コーヤのやろうとしている事にはもつと途方も無い時間が必要

になっていたことだろう。

ここもハズレ、と残念に思いながらコーヤは通信を入れる。間もなくニトラとの回線が開き、眼帯を付けた細面の青年が表示された。

「どうしましたコーヤさん？ 探索終わりましたか？」

眼帯をしていない右側の鋭い目と、剣呑な相貌には似合わない落ち着いた声にコーヤは頷く。

下校後すぐにGBNにダイブしたコーヤは、予定を合わせていたニトラと合流し、GBN中のデイメンションを虱潰しに探索していた。

目的は、先日のガドとボックスの決闘後行方不明となったルメの搜索。そして今日で一週間になるがまだ痕跡さえ見つける事は叶っていない。

「お疲れ様です。私の方調べ終わりました。ニトラさんの方でまだ手を着けてない場所ってありますか？」

「いや、こつちももうすぐ終わる……今回もいなかったなルメちゃん」

「……ルメちゃん」

一見古い時代のギャングもかくやという見た目のニトラが、幼い少女をちゃん付けで呼ぶと、何となくミスマッチな気がして、コーヤは思わず彼の言葉を口にしてしまった。

「なんか、変でしたか？」

「いえ、そんな事はないんですけど……なんか」

変な事を気にしてしまったと、コーヤは後悔するが取り繕うより正直に言おうと考え直し、言葉を続けた。

「ニトラさんがちゃん付けするのがちよつと意外で……」

さすがに失礼だったかと、申し訳無さそうに苦笑するコーヤだったが、ニトラ本人は「そうかな？」と神妙な顔をして首を傾げてみせる。その真面目な様子が可笑しくて、コーヤは口元を抑えてついつい笑ってしまった。

どちらかと言うとカマキリや爬虫類を思わせる人相と、作り上げる奇抜な作品の印象の強いニトラだが、彼の人となりと言葉遣いは見た目よりずっと柔らかい。コーヤがニトラと二人だけで行動するのはこれが初めてだったが、まだまだ知らない面がたくさんあるのだろう。

「見た目がリアルから見ても年下とはいえ、ちゃんと知り合いにもなれてない相手を呼び捨てにはできないでしょう」

「ニトラさん、その辺り律儀ですよ。私だけさん付けで、いつも大体敬語で話してますし」

「そういえば、そうかもしれない……いやそうだな実際」

「キナやデニアさんと話してる時と同じ感覚でいいと思いますよ。実際私、ニトラさんより年下だと思っんで」

「こういう場でリアル年の年功序列というのも考えものだが、まあいい。善処するよ」

「お願いします、とコーヤも応じる。ニトラは構わないかもしれないが、コーヤとしては少しこそばゆかったのだ。年上と思しき相手に敬語を使われるのもそうだが、キナ達と違い、一人だけさん付けで呼ばれる事に少し疎外感を感じていたのが主な理由だ。勿論ニトラに区別している意識等ないとは分かっているが、キナやデニアと同じ様に呼んでくれたほうが嬉しい。」

「ともかくだ。別のエリアへ移ろう。あと一ヶ所くらいなら、今日中にどうにか周れるだろう」

「分かりました。すみません、手伝ってもらっちゃって」

「手伝うも何も、俺の目的でもあるんだ。それにこっちは概ねして暇な大学生だ。時間の許す限り、彼女を探してみるさ」

大学生。やっぱり年上なんだ、と思いつながらコーヤはニトラへと一礼を返す。

「ありがとうございます。けど、学業に支障を来さない程度にお願いしますね?」

「いやいや、そいつはむしろコーヤ……の方だろ。时期的にもうすぐじゃないか、中間テスト」

「むう……」

憂鬱なイベントを思い出しコーヤは項垂れる。

中間と期末という高校生には避けるに避けられないテストは、ニトラの言う通りもう間近に迫っていた。

本音では試験など放り出してGBNに入り続けたいところだが、流石に学生としての良識はある。

「テストなんて滅びればいいのに……」

「そこは諦めよう。誰もが一度は通る道だ」

覚えるべき公式の数々を思い浮かべて項垂れるコーヤに、澄まし顔でニトラは告げる。

本当に大学生が暇と言うなら、早く自分もなりたいたいものだと思ってしまう。

「……本当にやばいなら、この後は俺だけで探そうか？」

「いえやりません。というか、区切り悪くて勉強に集中できません」

「了解。それじゃあ、このあとロビーで」

通信が切れる。ニトラの顔が見えなくなると、コーヤは小さく息を吐いた。安堵のため息だ。

「ニトラさん、もう怒っていないのかな」

先日ボックスが起こした、誘拐未遂事件を集まってくれたニトラとデニアに話した時。

事の顛末を聞いたニトラの怒りは顕著だった様に見えた。皆の前で暴力を振るったり、何かに八つ当たりをした訳ではない。だが、一瞬で感情を押し殺すような無表情になった時には、背筋がぞつとしたものだ。

ニトラにもリアルでのボックスの妹の事情も話したが、彼は立ち上がると一人、「憂さ晴らししてくる」と称しては大腿に歩きながらミツシヨンへと向かっていった。

あいつは任せて、と後を追っていったデニアが上手くとりなしてくれたのだろう。

どんなゲームにも言えるが、ルールに則り、真面目に遊んでいるプレイヤーから見ればリアルマネートレードはチートと同等の唾棄すべき不正だ。ニトラが怒るのも無理はないし、それが普通のプレイヤーの反応だろう。

だがその彼の怒りに敢えて付け足すならば、裏切られたという気持ちがあったのではないかと、コーヤは考えていた。

初めてボックスと会った後、コーヤとニトラ達はボックス、ガドを交えて状況把握のため話し合いをしていた。結果は依然五里霧中という確認でしかなかったが、それでもニトラは少し嬉しそうにボックスを信用できる相手、と言っていた。それを無下にされたという想いは、少なからずあったのだろう。

「ニトラさんや他の皆さんにも謝ってもらえると、助かります」

騒動のあと、運営のガードフレームに連行される前にボックスはそう言っていた。

その後ボックスがどうなったかはコーヤの元に連絡は届いていない。アカウント停止になったか、もつと他の罰則があったのか。

「あまり、ひどい事にならなければいいけど」

そこまで考えて思考を止めた。気が滅入るばかりで良くない。

少しだけ、気分転換をしよう。

ニトラと合流する前に少しだけ、少しだけの時間、思いきりバイクを飛ばそう。

そう思いバイクをターン。旋回するタイヤで砂を巻き上げながら機首を巡らせ、アクセルをかけながら来た道を引き返す。

バイクといってもGBNの操縦桿に本物のバイクの様に捻るアクセルはない。操縦も見ている景色もあくまで擬似的な体験だが、今コーヤの目に映る加速の世界はきつと本物と比べても遜色はない。そんな気がする。

本物ではないが、本物に負けない広さを誇る世界の中から、たった一人を探し出すのが如何に困難な事かコーヤも重々承知している。だが、やる価値はあると信じている。

少なくとも一人きりで動こうともせず、なんとなく、出会えたらいいな、と考えていただけのあの時とは違うのだから。

横目に眺めていた夕焼け色の水平線の美しさにため息をついた時、ふと思い出した事があった。

それは以前小耳に挟んだ、風変わりなダイバーの噂だ。

見たこともない小さなオリジナルのガンダムを使う、凄腕のダイバー。これだけなら時折現れる猛者の一人で済むのだが、その突飛な行動を耳にした時コーヤは純粹に呆れた事を思い出した。

なんとバトルロイヤルミッションで勝利しても、報酬を他人に渡してエリアの探索をさせて欲しいと申し出たらしい。

何て勿体ない。そして広大なエリアの探索なんて、よほど暇なのか。それとも隠しミッションのフラグでも探しているのだろうか。そんな噂が一時上ったことがある。

最後に聞いた噂は「第二次有志連合戦で致命的な何かをやらかしてフォースを辞めさせられた元アヴァロン」等というひどい尾ひれがついていたので、それきり興味も失せていたのだが、こうして実際にGBNのディメンションを足で探す真似をしていると彼の苦勞が少し分かりそうな気がしていた。

彼は今どうしているのだろうか。

探し物は見つかったのだろうか。

第17話 この繋がり先の先

「なるほど。ガドさんGBN歴っていうか、ガンプラ歴長いんですね」

「一応そうなるか。けど別にただ長く好きなかだけだ。何も大した事じゃない」

「いいえ。同じものを長い間好きでいられるって、それだけで才能つすよ」

そんなものか、と。ライオン姿のダイバー、ガドは呟きながら、左手の川の中から飛び出し、襲い掛かってきたアツガイを、濃紺色のZZガンダムの改造機——ヘヴィゼータ両腕部のビームガトリングで迎撃する。

ばら蒔かれるビームの飛礫をいなしながら果敢に突貫するアツガイだったが、クロウの間合いには一步及ばず。ジャンプし飛び掛かろうと瞬間、ヘヴィゼータの肩部ビームキャノンの狙撃に射抜かれて爆散する。

「こっちはクリアだ、加勢する！」

「了解！ けど大丈夫つすよ！」

ガドの機体の背後。高低様々な樹木に覆われた森林の手前で、デニアのオレンジ色のレギンレイズがクロスボーンガンダムX1のビームザンバーを得物の大斧で弾き飛ばした。二体の真上にビームザンバーが回転しながら舞い上がり、その軌跡を追いかけて

しまった事がクロスボーンの敗因だった。

「余所見なんかして！」

デニアが力強く笑むとともにレギンレイズ背面に増設した複合ブースターの出力を全開。複数のブースターの生み出す推力と自重を合わせたタックルがクロスボーンを強かに打ち据えた。

3 m近い体格差の衝突に小柄なクロスボーンは吹き飛ばされ、地面に倒れ込んだところにはかさずレギンレイズは追い打ちをかける。一回転させた大斧を高々とかかげ、そのまま一気に振り下した。

落雷のような轟音を響かせて大斧はクロスボーンの胴体を両断し、その衝撃に地面が浅く陥没する。圧倒的な剛力で引き裂かれたガンダムが沈黙すると、間もなく脱落者として光に包まれ消えていく。

「随分とまたワイルドなスタイルだな。いや心強い限りだ」

「ありがとうつす。やっぱ女子力は物理っすからね！」

レギンレイズを操る金髪のダイバーのデニアは蜂蜜色の目を片方閉じて、ウインクと敬礼をガドへと返してみせる。

レギンレイズもデニアに合わせて敵機を屠った長柄の大斧をくるりと回し、ヘヴィゼータへと一礼を返す。

「で、ガドさん。辺りに敵も居ないみたいすし、アレを始めて見るっすかね？」
「了解した。警戒に入る」

ガドの応答を合図にして、傍らに立つレギンレイズが居住まいを直すように背筋を伸ばす。そして頭部装甲を開きセンサーボールを起動して左右に首を振りながら索敵を開始。

僚機のガドに周囲の警戒を任せつつ、ゆつくりと森林の奥地へ向けて前進しつつ、周囲一帯の観測を開始した。

現在ガドとデニアは協同でバトルロイヤルミッションに参加していた。ステージ中央に大きな川が一本流れる広大な森林を舞台とした、オーソドックスなバトルロイヤル形式で、開戦から3分が経過。既に何名かのダイバーが脱落した乱戦の中、デニアとガドのタッグは出会うダイバー達と交戦し、順調に各個撃破を続けている。

だが二人の参加目的はミッション報酬ではない。姿を消したルメの探索だ。

ルメが姿を消してから一週間が過ぎ、未だに足取りは追えていない。過去の例からして彼女の出現場所はおそらくランダム。

そういつた予測から、コーヤやニトラがその足でGBN中を探し回っているように、デニアとガドはバトルロイヤルやレイド戦など戦闘の激しいミッションに率先して参加し、戦いながらルメを探しているのだ。

「やっぱ簡単には見つからないっすね、ルメちゃん。まあこんなドンパチの場所に居てくれない方が、安心っすけど」

「かといって、参加者全員に事情を説明するのは色々と障りがあるからな。こうして地道に探すしかないだろうよ」

やむにやまれぬ事情とはいえ、ガドは小さく息を吐く。

ダイバーたちがGBNに訪れる理由は、一重に楽しむためだ。事情があるとはいえ、こちらの都合に他のダイバーを巻き込むのはガドも避けたいと考えている。

それにこうして搜索活動をしているのは、自主的な面が強い。当然だが、ルメの搜索は運営とELバスセンターが既に乗り出している。

先日の誘拐未遂事件のあと、ELバスセンターのメインスタッフらしきエルフ耳の青年ダイバーはコーヤ達に何度も申し訳無さそうに頭を下げて謝罪をしていた。

信頼していたスタッフから事情はどうあれ背信者が出ってしまった以上、そうなるのも無理はない。今度こそ自分たちに任せてほしい、と青年は言ったが、コーヤは首を振り、彼へ告げた。

「私も彼女を探します」

青年は一瞬呆けた顔をしたが、すぐにしかしと言葉を返す。あくまでセンター側の責任であり、一般のダイバーに迷惑はかけたくないと。だが、隣にいた二トラも拳手し搜

索に参加表明をすると、あとは皆競うように手を上げてルメの搜索協力を申し出た。

そして現在に至る。全く、奇得な連中が揃ったものだ。その時を思い出しながら、ガドは蠶を撫でながら、何気なくデニアへと言葉をかけた。

「それで、前から聞きたかったんだが」

「お、なんででしょう？ そんな気にして頂けることなんて、あつたすつかね？」

生い茂る森林の枝を払いつつ周囲の搜索を続けるデニアから、朗らかな声が返ってくる。

だからガドは、

「ルメを見つげ出したら、お前さん達はどうするんだ？」

なんの気兼ねもなく、そう問いかけた。

途端。周囲を探索していたレギンレイズの足が止まり、ゆっくりとその場に立ち尽くす様に静止した。

「そうっすよね。その後の事も、考えなきやですよね……」

立ち止まったレギンレイズはセンサーボールを開いたまま、空を見上げる。その顔は口を半開きにしたカエルの様で妙な愛嬌を持っているが、デニアが発した声は明らかに陰りが感じられた。

「すまない、答えにくかったか」

狼狽えた声とモニタ越しに慌てるガドの様子が見えると、デニアは小さく首を振った。

「いえいえいえ。答えにくいとか、そんなんじゃないんです。どちらかというところ、考えない様にしてたつてのが正しいっすね」

隠すほどの事でもない。正直に答えよう。

レギンレイズも顔面のハツチを閉じ平常時の無表情に戻すと、デニアは抱えていた不安の一端をガドへと話し始めた。

「実はルメちゃんが見つかったらなんすけど。ニトラの奴がどうしても聞きたかった事を答えてもらおうって事になって……それでその答え次第によつては、ニトラGBN辞めちゃうかもしれないんすよね」

デニアの言葉に、ガドは驚き思わず目を見開いた。

「そいつは……確かに穏やかな話じゃないが、しかしどうしてそんな事になったんだ？」
訝しげに問うガドへデニアは以前クリアした熱砂のミッションでの出来事を話し始めた。

認められたい欲求と、その理想に見合わない自分の技術と才能。

そのギャップから来る板挟みから逃れようと、ニトラが継ろうとしたのがE.L.D.Iバーの能力、ガンプラの心を感じる力だった。

ルメと出会い、自分の作り上げたガンプラが一体どんな心を秘めているかを確かめる。その後に、今後GBNひいてはガンプラ製作そのものを辞めるか否かを判断する。という事をデニア達はニトラ本人からの宣言を聞いている。

「なんやかんやあつて、ニトラも大分前向きに考えるようになってくれているんですけど、いざキツツイ答えを突きつけられたら……あいつ、案外メンタル脆いんで本当にどうなるか分からないんすよね」

苦笑混じりに話すデニアに、ガドは釈然としなさそうに自身の髭を指で弾いた。

確かに周りが納得していたとしても、デリケートな話題だ。しかし、デニアからはまだニトラと一緒にGBNを遊びたいという気持ちがそれとなく伝わってきている。おそらく他の二人も同じ気持ちなのだろう。そしてニトラ自身も。

これからGBNを辞めるかもしれない人間がこんなにも積極的に、そして困難続きながらも楽しげにダイブしているのだ。付き合いの短いガドでさえ、見ていて分かるほどに。

「心配はいらないと思うぞ」

ガドの口から、自然と言葉がこぼれた。

それがデニアには意外だったらしく目を丸くして、

「そうっすかねえ……そうであつては欲しいっすけど」

「先ほど見せ間違を潜めてデニアは力ない声で返すが、ガドは敢えて強く頷いて見せる。」

「あくまで俺の見立てだが、あんなに居心地良さそうにしている奴が、今現在辞めるための苦勞をしているとはとても思えない。いつそ、ルメも含めてフォースでも結成していないじゃないか。一応これからもつるんでいくつもりなんだろう？」

「ああ……それも悪くないっすね。ルメちゃんとは私も普通に仲良くなりたいつすし」「むしろ、今まで組んでいなかった事の方が驚きだな」

「フォース組むだけが繋がりじゃないっすよ。それに私も、夏場はあんまりログイン出来ないと思うんで、なるべく緩い方が気が楽っすから、今のままでも全然OKっす」

「……そうかい」

「フォースを組むだけが繋がりじゃない、か。破綻しかけのフォースを必死に守ろうとしていた、過去の自分に聞かせてやりたいもんだ。」

ほんの少しだけ自嘲気味に、ガドが笑ったその時だ。

レギンレイズが急に、閉じていたセンサーポールを展開し、慌ただしく首を振って周囲を見回し始めた。

「ガドさん、ちよつと動かないで」

緊張感を増したデニアの声に、ガドも自機の火器を周囲へ向けて警戒を強める。

「敵か？ ルメか？ どこにいた？」

ガドも目を凝らして周囲を確認するが、周囲にはステージに配置された森林以外何も動く物は見えない。レーダーも同様だ。この付近には自分とデニアの機体以外に何も反応を示していなかった。

デニアの気のせいか、という考えが一瞬過るが、

「分からない。でもなんだか臭いっす」

静かにそう告げると、デニアはレギンレイズの左手を腰の後ろへと伸ばす。腰部には弾倉等を取り付けられるハードポイントがあるが、デニアの機体にはさらにガンダムバエルから移植した刀剣対応のホルスターが増設されており、ホルスターに下げていた武器の柄を掴み、引き抜く。

手にした武器は鉤状の刃を持つ内向きに反った大振りのナイフ。鉄血のオルフェンズ出典のガンダムフラウロスが劇中で使用していた、アサルトナイフと同型の武装だ。

そしてデニアは前方の森林の奥、蜂蜜色の瞳で睨みつけた一点目掛けてナイフを投げ付ける。

無造作なフォームながら、唸りを上げて回転するナイフは飛燕の様に鋭く飛び、そして森林の奥深くに消えるより早く、重い響きと共に虚空に突き刺さり停止する。

その一瞬、景色がぐらりと歪むのが見えた。

レギンレイズの後ろでヘヴィゼータが身構えると同時。ナイフの突き刺さった空間が剥がれるように変色し、隠れ潜んでいた機体が姿を現していく。

黒い機体色と細身の鋭いフォルム。投げ付けられたナイフが深々と刺さった頭部は、二つの目とV字のアンテナを持ったガンダムタイプのものであった。

「ブリッツガンダムか……」

ミラーージュコロイドによる迷彩機能が特徴の機体。しかし、迷彩展開中はPS装甲の恩恵も無くなるという設定はGBNでも再現されている様だ。通常なら耐性を持つ物理攻撃に脳天を割られたブリッツガンダムは力なく倒れ、脱落者としてステージから消失した。

「所謂、ヘッドショット判定っすかね？ どっちにしろ、ラッキーっすけど」

意外な呆気なさに拍子抜けした風に、デニアはいつもの調子で言う。一方のガドはデニアの神業じみた直感を目の当たりにして、驚きと呆れの入り交じったため息をついた。

「よく気付いたな……普通気付かんぞ」

「ええいや、偶然っすよ。なんだか一瞬変な風に草が揺れたりしたのが見えたくて、試みに投げたらビンゴだっただけっすから」

「……どういいう目をしてんだ。それだけで十分過ぎるくらい変態だ」

「いやはは、褒めて下さってるんでしょうけど、女の子に変態はひどいっすよ」
苦笑を返しつつ、デニアはまた戦地の奥へと進み始める。

これがセンスというものか。

改めてデニアの非凡さに畏れ入りながらも、今後ログインが減るという事に勿体無さを覚えずにはいられなかった。

夏は長期休暇と重なるため、大型イベントを実施するゲームは多い。GBNもその例に漏れず、今年も様々なイベントを催すことだろう。

デニアがフォースとして参加すれば、きっと良い成績を残せただろう。

世の中はままらぬものだ。と、ガドは先行するレギンズレイズを追い探索を再開した。



バトルロイヤルが終了した。

勝者はZZとレギンズレイズの二人組。どういう手品か、ミラージュコロイドで隠れ潜んでいた自分を見つけ仕留めた相手だった。

「くそ……」

そのダイバーはロビーに戻るや否や悪態とともに舌打ちをする。

大柄な体躯の頂点に乗る敵めしい顔に澁面を作り、苛立たしげに禿頭をかく様子は、ほとんどパチンコに負けて出てきたおっさんの姿そのものだった。

このところ色々なものにアヤがついてる。

初心者をいびっていた時、変なバイクに乗った女と戦った時からずっとこうだ。上手く行かない。同じ手口で初心者狩りはもうできず、G—TUBEからも締め出され、そして肝心のバトルにも勝てなくて、フレンドの二人もフラストレーションが溜まっていた。

そして少し前に、ソロの白いデナン・ゲーに三人がかりで負けてから二人はログインもしなくなってしまうた。

仕方なくこうしてココソコとバトルロイヤルに参加した方がいいが、結局何もならず無為に時間を浪費しただけだった。

ブレイクデカールがあえば。あの日から何度そう思い、連戦連勝の日々を思い返してはため息をついたか。

ガンダムは好きだが、勝てなければ面白くないし、嫌いになりそうだった。

いつともう見切りを付けるべきか。

そう悩み出したときだった。

ログインしなくなったフレンドから久しぶりのメッセージが届いた。久しぶりにGBNをやりたくなかったのか。それとも引退することへの挨拶文か。機体と不安を抱きながらメッセージを開封すると、思ってもみなかった事が書いてある。

それはGBNへの復帰の話でもなければ、引退の挨拶でもなかった。

それは誘いだった。

文章にはあまりにも見慣れない文字がある。

「ELダイバー狩り、だど？」

途切れかけの繋がりがから届いた言葉に、本当にやるのか、とただ戸惑い、そして間の悪い巡り合わせは続いてしまう。

「……」

あの女が、目の前に立っていた。

第18話 ミヒロの理由

合縁奇縁。それは望む望まざるに訪れる不思議な縁の事を言う。だがどうせなら、誰だって好ましい巡りを望むものだろう。

GBNのメインロビーでコーヤはニトラを待っていた。

最後の連絡後、デイメンションの海岸でひとつ走りしたため遅刻するかも思ったが、ニトラの姿はロビーにはなかった。

「時間は……まだ大丈夫かな」

現在リアルでの時刻は19時を少し過ぎたところだ。コーヤがログインしている模型店も閉店時間が近い。

本当にあと一回のミッションが限界だ。

早くニトラが戻ってくることを期待しつつ、ロビーを見回していると、だ。視界に入ったダイバーの姿にコーヤは顔をしかめた。

大柄な体躯と禿頭が特徴的なダイバーだった。屈強な体格とタンクトップにニツカポツカというガテン系の風貌の男は横柄な足取りでのっしのっしとコーヤの方へと近

寄ってくる。メニューウインドウを歩きながら見ているせいか、コーヤが立っている事に気がついていない様子もない。

コーヤはそのダイバーのことを知っていた。名前は知らないが、悪い意味でよく覚えている。

自然とため息がこぼれた。こんな時に出くわしたくない相手。そしてこちらに気付いていないなら自分から去るまでだ。

顔を伏せ気味にして、コーヤは向かってくるダイバーに対し直角方向へと姿勢を変える。

向かってくる男はまだウインドウを眺めたままだ。歩きスマホは危ないですよ、と内心で小言を言いながらその場を去ろうとした時だ。

「E! ダイバー狩り、だど?」

背筋が凍るような不気味な眩きに、コーヤは思わず反応し振り向いた。

男も急な動きをしたコーヤの存在に気付き、二人の視線が交錯する。男もコーヤの顔を見た途端、誰だったか理解した様子だった。一瞬目を見開くと間もなく視線を下げる。

「……お久しぶりです」

コーヤは硬い表情のまま、ぎこちなく目の前のダイバーへと会釈をする。

「……あ、ああ」

禿頭のダイバーは戸惑った様に相槌を返す。目は変わらずコーヤを見ていないが、コーヤは別段不満とも思わない。むしろ、ある意味当然の反応と考えている。

何しろコーヤにとって禿頭のダイバーは悪質な初心者狩りであり、男にとってコーヤは自分たちの活動を邪魔をした厄介者。

本来なら目も合わせたくない相手だ。

だがそれを圧してでも、コーヤは真偽を確かめねばならない。今だけは苦手意識を押し込め自分を奮い立たせながら、コーヤは男へと言葉をかける。

「聞き違いならばいいんですけど、ELダイバー狩りって言ってますでした？」

目に力を込めたコーヤは相手を睨むように、自分より大きな男へ問いかける。

聞いていたのかと、男は呟くと慥然とした顔で、コーヤを無視する様に早足になって歩いていく。

関わり合いになりたくない。そう男の背中が語っていた。

だとしても、引き下がるわけにはいかない。

「待って！」

コーヤは声を上げて立ち去ろうとする男の腕を掴む。

「おい、なんだってんだ」

「さっきのELダイバー狩りって、本当なんですか？」

「だから何だよ！ あんたになんの関係がある」

「あるんです……いえ、あるかもしれないです！ だから教えて下さい！」

食い下がり、声を張り上げるコーヤに周囲からの視線が集まる。男は迷惑そうに渋面を濃くすると苛立たしげにコーヤに言う。

「……わかったよ、わかった！ ちょっとこっち来い」

男はコーヤの手を掴むと小走りに歩き出した。

人の少ない場所を選んで進み、そのままロビーを抜けて屋上庭園へ到着する。

周囲はリアルでの時刻を反映してか、すっかり夜の景色となっている。上空には一面の星空が映し出され、タワーから一望する景色もライトアップがされて綺麗びやかに光り輝いていた。

男は周囲を見回して他のダイバーがいない事を確認すると一息つき、ようやくコーヤの手を離れた。為すがままに連れられたコーヤだったが、その瞳に怯えの色はない。むしろようやく本題に入れると男に詰め寄る様にして再度同じ質問を口にする。

「ELダイバー狩りってどういうことですか？」

「分かった、分かったから落ち着けよあんた」

距離を詰めてくるコーヤにうんざりしてか、男は両手を上げ降参のポーズで一步下が

る。

「本当に教えてくれるんですね？」

「ああ。だから連絡先教えろよ」

「……はい？」

今度はコーヤが一步後退った。身を守る様に体の前で腕を組み、汚らしいものを見る様な冷たい視線を男に向け始めた。男もコーヤが何を思ったかすぐに察して慌てて言い繕う。

「違う、勘違いすんな！送られてきたメール転送するから、連絡先教えろって」

「……ならそうと言って下さいよ」

安堵のため息を一つ、コーヤはウインドウを操作し、連絡先を男へと開示する。男の方もこのやり取りに疲れたらしく、深いため息をついて先程仲間のダイバーから送られてきたメッセージをコーヤの宛先へと転送。コーヤはメッセージをすぐに開封して身の確認を始める。

内容はほぼコーヤの予想したとおりだった。

文面は丁寧に文章も整っているが、そこには確かにE.Lダイバー狩りの文字がはつきりと記されている。未登録のE.Lダイバーを捕らえ、確保したダイバーに対し懸賞金を支払うというのが概要だ。当然、運営の認可などない違法行為であることは間違いな

い。

非道と言って差し支えない行いは当然として、本当にこんな事をする人間がいるという事実には、コーヤはがっかりする。

ボックスの話でさえ信じ難いものだったが、実物を目の当たりにすると、本当に気分が悪くなりそうだった。

コーヤは眉をしかめながらも読み進め、最後に記載されていた懸賞金の金額に目が止まる。何かの間違ひのような桁の並びに、思わず目を見開いた。

「これを送って来たの、貴方のお知り合いですか？」

努めて静かな声でコーヤが問うと、男は首肯した。

「ああ。だがこんなことを企画する度胸も金もない。どっかからメッセージもらって俺に回してきたんだろう」

「そう、ですか」

内容と法外な報奨金の提示からして十中八九。このメッセージの発信元はボックスが受けた依頼の送り主と同一人物だろう。

だがボックスにルメを攫う指示をした相手の手掛かりになるかもしれないとも思っただが、残念ながらそれは困難だろう。

「これでいいな。俺はもう帰るぞ。あとは通報するなりなんなり好きにすればいい」

「いいんですか？ この人友達なんですよね？」

「たしかにフレンドだ……リアルでもな。けど、こんな金まで絡むことに手を出したらもう縁切りだよ」

「……はあ」

「なんだよ？」

想定外に淡白な男の言葉に、コーヤはだいぶ呆けた顔をしていた様だ。

胡乱な表情で男はコーヤに問いかけると、

「あ、いえ別に」

「元マスタイバーの言うセリフじゃないってか？」

「ええ、まあ……申し訳ないですけどそう思います」

「本当に正直に言うねえ、あんた」

凶星を突かれたのもあってコーヤは大人しく白状すると、男は大げさなくらい大きなため息をつく。

「まあ俺らのやってた事考えりゃ、そう思われても当然だけだな」

ははっ、と自嘲気味に笑う男をコーヤは不思議そうな目で見る。

先程の言葉もコーヤの嘘偽りない本音だ。この男には悪い印象しかないが、それでも純粹に悪いことへの境界が不思議だった。

「俺にだってこの程度の分別つくんだよ。その言い訳にしかならねえが、あくまで俺は気持ちよく勝てればそれで良いんだよ、ほんと」

「……それで初心者狩りやつてるのは、やっぱり最低だと思えます」

「ぐぬ……ああそうだよ、最低ですよ。否定しないしできませんよ、まったく」

追い打ちの言葉に不貞腐れた様に男は唸る。が、

「それで、おたくこそ何なんだよ」

突然投げかけられた言葉に、コーヤ問の意図がわからず聞き返す。

「何が、ですか？」

「いやほら、何でそんな事を気にしてるんだよ？ キャプテンジョンみたいにマナーだ

何だって言う方じゃないだろ、あんた？」

ああ、そうか。

そう問われて初めて、コーヤは外から見た自分を改めて省みた。

コーヤは特別でも何でもない。ただの一般ダイバーの一人に過ぎない。

この騒動に最初から関わっていたという当事者意識が先行し過ぎていたとは思いますが、完全に自分本来の立ち場を忘れていた。

これは貴重なE.L.ダイバーと大金が絡む、大きな物議を醸しそうな案件だ。経緯を知らない側からすれば『運営関係者でもなければ、解決能力もないただの小娘が興味本位

で大事に首を突っ込もうとしてる』という見方が精々だろう。変に勘繰られても仕方ない。

理由はある。それもとびきりのちっぽけな理由が。それを言うべきか逡巡していたが、男はすぐに言葉を翻した。

「やっばいいわ。正直そこまで興味もねえし」

それじゃあな。

男はそう言つてコーヤに背を向けると、そのまま歩き始める。

星明かりの下、とぼとぼと去っていく男の背中はどこか寂しそうに見えた。

「いた、みんなコーヤちゃんいたよー」

背中の方から声が聞こえた。

振り返るとデニアを先頭にして、ニトラとガドの三人が走ってくるのが見える。

そうだった。話し込んでいて忘れていたが、ニトラとの待ち合わせをしていたのだつた。

「探したぞ。何かトラブルか？」

開口一番、ニトラが尋ねるがコーヤは首を横に振る。

「いえ。ちよつと知り合いに会ったもので」

「知り合いって、さっきの人？」

「うん。本当にちよつとした知り合い。それより、みんなに話したいことがある」
今しがた得たメッセージをさらに三人に転送する。

その時コーヤは皆に知り合いと説明しておきながら、相手の名前も知らなかった事に
気付く。

届いていたメッセージの送り主の名前を見る。そこにはカツノ、と記載されていた。

／／

ELダイバー狩り。

GBN運営ではない第三者が勝手に流布したと思われる件のメールを、コーヤ達は速
やかに運営へと報告した。

一報を受けたGBN運営の対応は極めて迅速で、対応についての方針について翌日の
午前中に全ダイバーに宛てて一斉に通知がされた。

運営はELダイバー狩りに纏わるメッセージを大規模なスパムメールとして扱い、本
日深夜0時から緊急のメンテナンスを行うという報せだった。

各ダイバーには情報に踊らされない様にと警告を発し、実際にELダイバーに営利目
的で危害を加えた場合はアカウント停止と併記して知的財産権侵害、不正アクセス禁止

法違反という文が並んでいる。

不正アクセス禁止法についてはミヒロも少し調べたが、この法律にはゲームアカウン
ト等の転売についても触れられていた。GBNの他のELダイバーも個人のアカウン
トを持っているらしいので、それを不正に売買しようものなら、この法律に抵触するの
は避けられない。

これでどこぞの誰かが打ってきた喧嘩に対しGBNは正攻法で反撃すると宣言した
のだ。

これで安心。と、解決したことのできれば良かったのだが、コーヤ——タケウチ・ミ
ヒロの心は未だに晴れてはくれなかった。

「ミヒロちよつと……ミヒロ？」

「……」

「おーい？ ミヒロ？」

「……」

「コーヤ後ろから来るよ！」

「！ 分かったすぐに……あれ？」

結わった三編みを振り回して急に後ろへと振り向くミヒロだったが、後ろにいたのは
迫りくる敵機ではなく、ボブカットのクラスメイトだった。目を細めニマニマした笑み

と一緒に、手をヒラヒラと振っている。一瞬理解が及ばずに目を点にするミヒロだったが、ほどなく冷静になり、ようやくここが教室で今しがた帰りのホームルームが終わった事を思い出すと、みるみる顔を真っ赤に変える。そして自分の言動を心底恥じながら、机上のスクールバッグにめがけて突っ伏すのだった。

「超恥ずかしい……死ぬ」

「まだ死ぬなく。それにテスト地獄はこれからだよ」

後ろの席についたまま手を伸ばし、オオハラ・シノブはミヒロを慰める様に背中をさすり、

「何となく分かってたけど、本格的に重症ね。まあ分かるけど……」

二人の傍らに立つスギミ・ユキナはポニーテールを揺らしながら、大袈裟にため息をついた。

「昼休み辺りからずっと上の空だけど、本当に大丈夫？」

「いやいや昼どころか朝からでしょ。タケウチさんがお弁当持って来なかったの初めて見たよ」

「面目しようにもございません……うう」

シノブの言うとおり、今日のミヒロは弁当を持たず登校してきた。理由は寝坊。原因はルメが気になって眠れなかったから。さらに言うなら、テスト勉強も全然手に付いて

いない。

確かに重症だ。それはミヒロ自身も自覚はあってもコントロールが出来ていない。それほどまでに、ルメの安否は大きなウェイトを占めてしまっている。

しかし、それは普通に考えればよくないこと。分別はミヒロ自身できている。できてはいるのだが……。

「さすがにのめり過ぎじゃないかな？ 傍目にはゲーム廃人一步手前だよ」

「うう……言わないで。まだ課金とかしてないから廃人認定だけはどうか……」
人に言われると重く感じるものである。

ゲームのことを考えすぎて上の空になり、そしてさっきの反応だ。シノブの言葉はミヒロの心には尚更グサグサと刺さる。

「でもガンプラたくさん買って遊んでるんだから、実質課金じゃないのかな？」

しかしダメ押しとばかりにシノブはさらに一言。

「言われてみればそうかも。ミヒロのバイクも結構お金かかっているよね？」

ユキナもさらりと加わると、当時の冷え込んだ懐事情を思い出してしまい、また憂鬱になりそうだったので、ミヒロはバッグに沈めていた顔を上げる。

「確かにそうだけど……ガンプラ三体分くらいじゃきかないけど、GBNじゃこのくらい普通だし。それに形に残るから全然無駄遣いだなんて思っていないですし」

ちなみにミヒロの言う三体の内、素体となったマシンライダー以外の2体は比較的大箱のHGである。そしてそれらを繋ぎ合わせるためにジョイントパーツを多用し、さらにバイクを操るGNアーチャーもあるのでコストの嵩み具合は中々のものだった。

「なるほど。もしかしてGBNって思ってたよりリッチな遊びだったりする?」

「その辺は遊び方次第だと思うけど。まあそれはそれとして、ミヒロは今日も行くの? 行くなら付き合うよ」

「え?」

「ちよ、ユキナ!」

ユキナの申し出にミヒロは目を丸くして、シノブも驚いた様子で聞き返す。

「あんた本気? テストもうすぐだよ」

「分かってるし、まだ自信もないよ。けどこんなミヒロ見てたら……ねえ。どうせ行くつもりだったんでしょ?」

「マジ? タケウチさんそうなの?」

「あ、はい。実はそのつもりでした」

さらっと問題発言をするユキナと、更なる驚きで目を見開き問い詰めるシノブに、ミヒロは慌てて答える。適切に凶星を突かれていたので、認めるしかなかった。

「今日メンテがあるって聞いたから、ルメちゃんを狙ってる人達、きつと血眼になって探

すと思う。だからその前に」

「ちよ、ちよつと待って。運営が動くってもう決まってるんだよね一応？」

「……うん。でも——」

「なら専門家に任せなつて。それにネットゲーム相手に足で人探しなんてナンセンスだよ」

「わかつてる。けどそれでも、少しでも可能性があるなら力になりたいの」

「……さすがにそこまでいくと、ちよつとおかしくない？」

普段見せないミヒロの頑固さに、シノブは辟易した様子で目を細める。

その視線が少し痛くて、バッグを握るミヒロの手に力が込められた。

「推しのゲームに大いに嵌まるのは結構だけど……なんか度が過ぎるっていうか、何でそこまでするかが見えてこないっていうか……」

「動機が分からない、って事ですか？」

「それ、それよ。そのELダイバーだっけ？ それにタケウチさんは何でそんなに入れて込んでるの？」

「それなら私もずつと気になってた」

小さく手を上げ、ユキナは言う。その表情はいつもより真剣に見えた。

「ELダイバーに会いたいわって言ったのは知ってるけど、どうして会いたいわは知らな

いから。今まで突っ込んで聞く気は無かったけど、さすがに教えてもらいたいな」

ユキナとシノブの二人の視線にさらされて、ミヒロは目を伏せる。シノブは今言った通りだが、ユキナも同じ気持ちだったのだろう。そしておそろく、デニアやニトラもきつとそうだ。

言葉にするのは、正直気が引ける。けど、シノブに納得してもらうためだけじゃなく、気を利かせてくれたみんなにもちゃんと説明しなきゃいけない。そう考えた。

ふう、とミヒロは腹を決めるために大きく呼吸をした。

「本当に……ほんつとうに。大した理由じゃないよ？」

「それでいいよ。テストから逃げたいだけってのじゃないなら何でもね」

「ただ嘘だけはナシよ？ 水くさいから」

「……うん」

ふつと、改めて空気を胸に満たす。そして意を決してミヒロは秘めていた想いを言葉として震わせた。

「友達が、欲しかったの。私を否定しない友達が」

紡がれたのはあまりにも今更な言葉だった。

ユキナとシノブは二人揃って困ったように顔を見合わせる。そして互いに自分自身を指さして。

「私は違うの?」

不安そうな声できれいにハモって言うのだから、ミヒロは耳まで真っ赤にしてもう一度バツグに顔を埋めてしまった。

「絶対そうなると思ったああ。だからやだったのにい……」

「ええ、そういう事……じゃなくてももう少し説明を」

「オオハラさんまだ傷口広げたいの……?」

「ちがうちがう、いやじゃなくてほら」

「……大丈夫。半分冗談だから」

そう言うのと笑みを作ってミヒロはまた顔を上げる。耳はまだ赤いままだった。

「思ったのは本ただけど、それは一番メンタル病んでた時の話だから。もちろん二人とも友達とってているよ」

「あ、うん、ありがとう。いやそれより、病んでたって大丈夫なの?」

ユキナは心配そうな顔でミヒロの顔を覗き込む。整った顔立ちがずっと近づいてくるので、ミヒロはまた別の意味で気恥ずかしくなった。

「そっちはもう平気……でもないか。実を言うとまだ尾を引いてる」

「引いてるんだ……というか聞いていいのかな?」

うん、とミヒロは頷く。そして居住まいを直し、ユキナとシノブを見るとミヒロは語

り始めた。

「……原因はGBNというか、ガンプラ関係のことで母親とちよつと衝突しててね。恥ずかしい話なんだけどね。でその……拗れてからずっと家出中なの。おばあちゃんの家にだけど」

第19話 一水四見

バイクに乗りたくてGBNを始めた。

こんな変な理由でGBNというか、ガンダムというジャンルに触れたのはきつと私くらいのものだろうか。

随分と見当違いな動機。だけどこんなきっかけでも、GBNに触れたことを私は一度だつて後悔しなかった。

まだ幼稚園に行っていた頃だったか、再放送のアニメの女盗賊や日曜朝に放送しているヒーローに憧れてバイクに興味を持った。けど私の家族にバイクに乗る人はいなくて、たまたま父が持っていた雑誌の広告を飽きもせず眺めたり、自転車を漕ぎながらバイクの排気音を口で真似るという中々女の子らしくない遊びをしていた。

そんな私の姿を見かける度に、母は毎回こういったものだ。

「恥ずかしいから辞めなさい」

自転車に関しては母の言うとおりだったが、広告を見るのが恥ずかしいというのは少し分からなかった。それでも私は素直に従った。

そして私はほどなくして、母の意図を知ることになる。

「女の子なのに特撮番組を見るなんて恥ずかしいわ。もう卒業しようね」

「アニメなんて子供の見るものなんだから、見ちゃダメよ」

「ゲームなんてしていると勉強ができなくなるでしょ。ミヒロはもう高学年なんだから、遊ばなくてもいいわよね？」

私がサブカルチャー系の娯楽に熱中すると母は事あるごとにそう言った。恥ずかしいから、年齢らしい事をしろ。

クラスの子はみんなゲームやアニメを見ているよ、と反論すれば決まっとうちはうち、他所様は他所様よ、と返ってくる。

そして極め付けはこれだった。

「バイクなんて危険だし、あんなもの不良が乗るものなんだから」

とどめには十分な言葉だった。

母は自分が低俗と判断した事に触れさせたくないだけなんだ。枠に押し込めたいだけなんだ。

そう思った時から家でテレビを見なくなっただけなんだ。バイクについても隠れて調べる様になっただけだった。

幸い一部の漫画や小説は購入を許された。世間的に認められている原作の漫画は母的にはセーフらしく、私自身も物語の世界に没入する感覚は好きだったのでしばらくの

間は母とも衝突せずに付き合っけていられた。

けれども。通学途中でバイクを見かけたり、路上に停車している姿を見るとどうしても目で追って、思ってしまう。

触れたい。手触りを感じたい。

頭の空想だけではない確かな感触に焦がれていた時に出会ったのがプラモデルだった。

中学が上がって初めての夏。祖母の家へ行く途中にあつた個人経営の模型店。そのショーウィンドウに飾ってあつたバイクのスケールモデル。とつくに生産中止になつた車種が小さな玩具とは思えない出来栄えで飾られているのを見て、私は思わず食い入る様に眺めてしまった。

その時は眺めるだけで店には入らず、何より男の子の店という思いが私に足踏みをさせていたが、数日後意を決して入店した。

目に飛び込んでくる棚にはバイクだけでなく車や飛行機に城、そして当時はよく知らなかつたガンプラたちが積まれていた。別世界に飛び込んだ様な緊張と高揚感の中、私は大股気味に店内を歩くと、バイク系の棚の前で思うままにキットを物色した。積まれた箱を手にとって確認してを繰り返し、棚の端から端まで見るだけで30分。そしてその中から一つ選ぶのにまた30分かけて吟味してようやく初めてのプラモデルを購

入。

店を出た私の手には1/6スケールバイクとニツパー、そして店の人から必要と教わって追加購入した接着剤の入った紙袋。

この時の感情は言葉にできない嬉しさで、スキップでもする様な足取りで祖母の家に向かった。家で作つたら何を言われるか分からないからだ。

もつともすぐに組み立てる難しさと、展示されていた作品との雲泥の差に半べそをかく羽目になるのだけだ。

それでも楽しかった。信じられないくらい楽しかった。祖母は母と違って私のやる事に口を出さず、楽しそうにしている私が見れて嬉しいと言ってくれた。

それから週一で祖母の家を訪れる日々が続く。母には祖母の手伝いと料理の勉強という名目で伝え、実際その通り料理は今も祖母に鍛えてもらっている。

料理もだが、どうやら私は手先を使って何かを作るのが好きな性分らしい。プラスチツクの硬さと厚みを感じながら、少しずつ形が出来上がる毎にワクワクした。めげずに初めて自力で一台を組み上げた時の感動は冷めやらず、次々と新しいキットを買っては塗装や表面処理を勉強して、ゆつくりとしたペースで完成品へと仕上げていった。

そして転機が訪れる。たまたま店で流れていたGBNの宣伝用PV。アニメの宣伝程度の認識で大して興味もなかったが、宣伝文句に私は耳を疑った。

『君の作ったガンプラを君の手で操縦する！』

ガンプラ、つまりはプラモデルを自分で操る？ そんな遊びがあることが当時の私にはただ衝撃で、気付けばループするPVから目が離せなくなっていた。

ガンダムなんて名前だけしか知らなくて、模型店の棚の半分を占拠する人気キット程度の認識しかなかった。けれどPVの中で縦横無尽に舞い踊るガンプラはただ純粋にカッコよく、しかもこれを作った本人が操っているというのだ。

未知の興奮が全身を駆け巡り、やってみたい、と思った。瞬間母の苛立たしげな顔が脳裏を過る。それでも逡巡は一瞬だった。

ガンプラと思しきコーナーへと移動して棚をぐるっと見回す。奇しくもバイク型に変形するロボットを見つけるとすぐ手に取ってレジへと向かったのだ。

結果、それは見事な勘違いで新たにGNアーチャーを買い、ミキシングでバイクをこさえたのは今ではない思い出。

そんな勘違いばかりで始まったGBNだったけれど。この自由すぎる世界は、母と同級生の陰口の件もあって気落ちしていた私の心がちりと掴んで離さなかった。

初めてダイブした時はただ驚き、巨大になったプラモデルの姿を見上げ、そして操縦した時などは物語の主人公になれた様な興奮を覚えた。あとは、坂を下る様に私はGBNにのめり込んでいった。

ミキシングの継ぎ接ぎバイクに手を加え、ヘンテコだけこの世にひとつしかない一台をどう作るか考えて、眠れないことなんてしょっちゅうあった。使っているGNアーチャーの出ているアニメを見たらガンダムアニメにもハマってしまった、毎晩親の目を盗んでスマホで配信動画を視聴して、確実に私の世界は深まっていった。

母から理解を得られなくてもいい。語り合える友達もいなくていい。GBNでも戦闘の役には立たないので、積極的に誰かに関わるつもりもない。

作って、直して、この世界で走ることができるならそれで満足できた。

そうやって一人、母に隠れてコツコツと続けるうちに季節はめぐり、高校受験の準備を機に少しだけGBNを離れることにした。

受験勉強の日々は心底疲れたが、我慢の甲斐あってか試験前にどうか志望校の合格ラインに届いた。目処が立った。その想いが気が緩ませたのか急に自分のガンプラが恋しくなってしまった。

そして受験前夜。祖母の家からお守り代わりにとガンプラを自分の部屋に持ってきたのは正解であり、間違いだった。

試験には確かな手応えを感じていて、帰り道の足取りはすごく軽かった。マンションのエレベーターに滑り込むと鼻歌を歌いながらボタンを押し、受験中ずっと我慢していたGBNへのダイブに心を躍らせていた。

けれどもそれは、自分の部屋に入るまで。

部屋に入って間もなく異変に気付いた。

机の引き出しの鍵が開けられていた。

昨夜、久しぶりに触れた愛機を閉まっていた引き出しだった。

最悪の予想が過る。

呼吸と心臓が止まりそうになりながら引き出しの中をかき漁り、中身を全て外に出す。あるべきものはそこには無かった。

私は半狂乱になって家中をひっくり返した。リビング、台所、両親の部屋、果ては浴室まで探せる場所は全部探した。

それでも無い。私のガンブラがない。

天国から地獄に転落した心地だった。私は散らかった家の中で膝をつき呆然としていると、玄関のドアが開く音がして、

「何なのよ、これは一体？」

母の声がした。ゆっくり首を向けると買い物袋を持った母が入ってきた。

「ミヒロ？ これはあなたがやったの？」

母は苛立たしげな声で私に話しかけてくる。機嫌の悪い母にはいつもなら恐怖を感じるのに、今はもつと別のものが湧き上がってくる。

確信に似た疑念。そして黒色の感情を抱きながら私は、母に質問をした。

「私のガンプラ、知らない？」

ああ、と頷いた母の顔は鮮明に覚えている。合点がいったゆえの失望の顔だ。

「あの玩具なら捨てたわよ」

心底つまらなそうに彼女は言った。

「隠れて何かやってるとは思ってたけど、まさかあんな玩具で遊んでたなんて母さん恥ずかしくて悲しかったわよ」

話す言葉はとてもクリアに頭に入ってきた。意味もよく理解できた。

「もう高校生になるんだから、別にいいでしょ。それよりこれ、どうしたの？ まさかあの玩具を探してたの？」

やっぱり、か。納得したら全身に力が湧いてきた。

立ち上がる。散らかした部屋を出て、制止する母の手を振り払い、私は自宅から外に出る。

家の中のゴミ箱は既に確認していた。あるとしたら外のゴミ捨て場しかない。

エレベーターを下り、マンション備え付けのゴミ置き場の蓋を上げる。明日が燃えるゴミの日なせいとか、もう大きなゴミ袋が五つも置かれている。どれが母の出したゴミ袋か分からなかったから、私は片っ端から開けることにした。

口の結ばれたゴミ袋を開き、手を突っ込み調べる。制服の袖が汚れ、手にドロドロした感触がこべりついて不快だったが構っていられない。通り過ぎる住人から奇妙な目を向けられてもお構いなしに一つ目、二つ目と袋を開けて調べる。

「やめなさい！ 何をしてるの！」

手を掴まれた。母の手だ。鬱陶しくて払い除けると、今度は肩を掴んで私を引き離そうとしてきた。

「邪魔しないでよー！」

叫び、母を力任せに振りほどいた。滅多に大声を上げない私に驚いたのだろう。尻もちをついて目を見開いている母を尻目に、私は搜索を再開。三つ目のゴミ袋を開き腕を入れる。

二度中身を掻いた時。硬い、手に馴染んだ感触があった。

見つけた。指先を頼りに捉え、引き上げる。

GNアーチャー。食品の容器に残っていた汁やゴミに塗れてべつとりと汚れているが、関節やアンテナは折れていない。

良かった。そう安堵するのは一瞬。すぐにバイクの方を探し始める。そして――

「……………うそで」

ようやく探し当てたバイクはドロドロに汚れ、前後が真つ二つに割れた姿になってい

た。乱暴に放り込まれたのだろう。車体中央の接続軸が折れている。

不幸中の幸い、なんとか修理はできるだろうと分かった。けど冷静でいられるのはここまでだった。

怒りたくて悲しくて悔しくて、私の全部がぐちゃぐちゃだった。

私の仕上げた作品の出来栄えは拙い。グランプリを取る様な作品とはとても比べられない玩具だろう。

けど一生懸命作った。嘘偽りなく全身全霊だった。

玩具だから。女の子らしくないから。幼稚だから。

そんな理由で私が好きなモノは、ここまでされなくてはいけないのか。

丹精込めて磨き上げたモノは、ゴミ同然に汚されなければならないのか。

背後へ振り返る。私の作品をゴミと断じた人はまだ尻もちの姿勢で呆然としていた。

情けない恰好。そんな彼女の姿を見たら少しだけ心の熱が冷めた。

そして息を一つ吐くと、私は母をガンプラを抱えて自宅へ戻った。

部屋に戻るとすぐにガンプラを洗淨してあげた。そのあとシャワーを浴びてすぐに寝てしまった。

この日を契機に私と母のなんとかやれていた関係は完全に崩壊した。一言も会話がなくなり、春休みに入るとほとんど祖母の家でガンプラの修理や適当に辺りを歩いてば

かりで、家にはほとんどいなかった。

そして入学手続きを一通り終えた後、学校の道具と私物をまとめた私は祖母の家へと向かった。

少し離れて暮らして、色々と反省がしたい。というのが建前。

本音は母親への反抗。息苦しさから逃げ出したかった。

どちらにしろ、祖母とそして父から了承を得られたのは幸いだった。一方で、心の片隅には母の言葉が棘の様に刺さっている。

恥ずかしい。ある側面においてその評価は間違いではない。そう考える人がいる以上、また私は否定される。

否定されるのは、いやだ。

もし私の好きなものを知られたら、かつてのクラスメイトや母の様に嘲るのではないか。不安と恐怖はより大きくなっていて、一人でも構わないと思っていたのにいつしか寂しいときえ感じていた。

私はおかしくない。下手でも弱くてもいい。こういう好きがあってもいい。

私への否定を、誰かに否定して欲しい。

そう願うようになっていた。

そして、ダイバーたちの好きという想いが生み出した存在が、かのELダイバー達と

いう噂を聞いて以来、彼らならと期待をしてしまった。人間でない彼らなら私を否定しない。ガン普拉に纏わる事ならなんでも肯定してくれるはず。

そんな後ろ向きな気持ちでG B Nを走り続けていたら、もう高校に入学して今に至っている、という訳なのだ。

たかが玩具で、と言ってしまえば実のところその通り。

今にして思えば本当に下らない事でウジウジして、家まで飛び出してしまった。

こんな無茶苦茶な私だけど、こういう話を聞いてくれて凄く感謝してるよ。

ミヒロは最後にそう言って話を締めくくった。

彼女の言う通り無茶苦茶な理由。そして無理もない理由ともユキナは思った。

ガン普拉に限った話ではなく、自分が努力して作った作品をゴミとして扱われたなら怒らない人間はいない。ユキナ自身も同じ事をされたなら家出に発展しないまでも、当然怒りを覚えただろう。そしてミヒロの怒りと悲しみは家を出る理由として十分だった、という事だ。

なんとなく幼少のころ聴いた歌をユキナは思い出し出していた。角砂糖を食べたゾウとアリの歌だ。

角砂糖はゾウにとっては途方もなく小さな食べ物でも、アリにとっては自分より大きな食料になる。同じものでも受け取り手次第で価値は全然違ってくる。あの歌はそ

ういう事を言いたいのだと最近になって分かった。

ガンプらはミヒロにとっては大きな角砂糖。彼女の母にとっては取るに足らない小さな角砂糖。そういうすれ違いだったのだろう。

そして彼女にとつてELダイバーはまだ「大きな角砂糖」らしい。

ミヒロが今でもELダイバーを探そうとする理由は言わなかった。ユキナも尋ねたりしなかった。

友達が大事にしている。付き合う理由なんてそれで十分。

GBNへとログイン完了。オオカミ耳を付けた青い髪に、赤いマントを羽織った少女のダイバーは、待ち合わせをしていたライダーズジャケットを着た黒髪のダイバーの元へと駆けて行った。

第20話 最低の上塗り

——疲れた。もう、どこにも行きたくない。

不意に飛ばされた光の無い道をとぼとぼと歩いていた。動いていた足がついに止まった。

ここは、どこだろう？ 砂埃にまみれた翡翠色の髪を振りながら辺りを見渡す。上下左右のどこにも明かりは見えない。手を伸ばしてみると、硬い壁に触れた。このざらざらした感触は岩か何かだろうか。壁伝いに歩いてみても、岩の感触と闇だけが続くばかりだった。

もしかしたら、ここはどこかの洞窟なのかもしれない。

そう思った時、ルメは一つ息を吐き、

「良かった」

誰もいなくて。ルメはを冷たい岩の壁へ背中を預けながら、その場にずるずると座り込んだ。

ガドとボックスの決闘からずっと、ルメは転移と放浪を繰り返していた。それはすべからず、彼女の意思によるものではなかった。

本人の意思によらぬランダムな転移。それがルメというELダイバーがGBNを彷徨っていた理由。患ってしまった病とも言うべきバグだった。

ある時は廃棄された基地、ある時は砂漠の街。そしてまたある時は雪と戦火が覆う戦場の真つ只中。

いつも何の前触れもなく飛ばされてきたルメに、他者との正常な交流が出来るはずもなく。広がり続けるGBNの世界でいつ終わるとも知れない孤独な旅を続けていた。

ルメにとつて、それだけでも十分過ぎる苦労だった。だというのに、最近に至つてはそれだけではない。

街のフィールドでは、誰かに話しかけられることが多くなった。バトルフィールドで巨大なガンプラに追いかけられることが増えていた。

人なんて簡単に握りつぶしそうな、巨大な手が迫ってきた時はどうしようもなく怖くて、必死に走った。

明らかに自分を狙っている。狙って捕らえようとしている。

そう思える事が日増しに多くなっていき、孤独な放浪がいつしか逃げ場のない逃避に変わっていた。GBNという巨大な牢獄をルメは懸命に逃げた。逃げて逃げて逃げ続け。

とうとう今日、限界がきた。

おしまいでしょう。そう思うと、必死に動いていた足は容易く進むのをやめた。窒息しそうだった呼吸も楽になった気がした。

この世界を旅して、初めて穏やかな気持ちになれた気がした。

どうかこのまま、穏やかに眠らせてほしい。

そんなささやかな願いとともに、ルメは瞼を閉じようとした時、ルメは不意に彼女の名前を口にしていた。

「コーヤ……」

知り合いも味方が誰もいないこの世界で、明確に自分を助けてくれたのはコーヤと、その仲間たちだけだった。

最後に飛ばされて以来、一度もコーヤ達と巡り合えていないが、今彼女らは何をしていいるのだろうか。

もう忘れてしまったのかな。それともまだ探してくれているのかな。探してくれているといいな。そう考えて、ルメは自分の心に気付く。

「あいたい、よ……」

ルメの言葉は、涙とともに闇に零れた。

一度綻んだ心を再び縫い合わせる術を今のルメは持っていないかった。涙は嗚咽とともにとめどなく流れ続け、あいたい、たすけて、というか細かい声と共に闇の中へと溶け

て消えていく。

そして泣き疲れたのだろう。目元を赤く腫らしたルメの嗚咽が寝息へと変わっていった。

そんな少女のE.L.ダイバーの傍らに聳える巨影があつた事を、ルメは最後まで気付かなかつた。

ダイバーでもガンプラでもない。岩の様であり、同時に人工物とも言える様な奇妙な質感をした物体。半ば岩の中に埋もれながらもその威容は小山のように大きく、本体から突き出した翼のような突起は天井に突き刺さり、さながらこの空間を支える柱のようになっていた。

そしてここに置かれる奇妙な物体はこのスペース特有のものではない。この岩のようだが、このステージ、ロストマウンテンの至るところに配置されているのだ。

／／

つくづく思う。俺は最低の人間だと思う。

ブリッツガンダムのコックピットの中。カツノは、苛立たしげに禿頭を搔いていた。

現在、カツノは深い闇が続く広大な洞窟の中にいた。

洞窟内部は無骨な岩肌に覆われており、さらに壁や天井、足元にも奥へと続く穴が点在し、迷路さながらの様相を呈している。

周囲に光源はなく、自身のガンプラが放つ光が頼みの綱という悪条件下ではあったが、そこはゲームの中というべきか。ダイバーが最低限の行動はできる程度の照度は確保されており、さらに洞窟内はガンプラでの行動が可能なほど幅に余裕がある。

ガンプラを飲み込むような巨大な岩の迷宮の深奥を目指す、正にガンプラを使ったトレジャーハント。かの有名な考古学者の活劇映画が好きなら心が踊るようなシチュエーションだっただろうが、カヅノの胸中は高揚や興奮には程遠く、周囲に蔓延る闇の様に暗鬱だった。

『おいどうだ？　いたかE.L.ダイバー？』

『いねえよ。ていうかさつきも言っただろそれ。口動かさないでもつとよく探せよ』
すぐそばにいるバスターガンダム、カラミティガンダムのそれぞれのダイバーからの通信が聞こえてくる。

二体のガンダムは装備した巨砲や火器を構えもせず、代わりに頭部メインカメラからのライト光で辺りを見回し、低くした姿勢で周りにある岩塊をどかし、そこに何かいなかを確認している。

まるで夜中の虫取り少年。このステージに入ってからこの二体はずっとこうだ。ガ

ンダムにこんな滑稽な動作させて何が楽しいんだ。

——こんなことをするために、ダイブしている訳じゃないだろう。

四つん這いのガンダム達に憐れみを感じながら、カツノは乗機のブリッツガンダムで手近な石を動かし、探しているふりをする。

こんな金まで絡むことに手を出したなら、もう縁切りだ。

昨夜、コーヤというダイバーに告げた言葉を忘れたわけではない。

むしろ今も、脳が焦げつく様な不快感がカツノを苛んでいる。

全ては自分の甘さと、仲間への未練。

彼らとは本当に縁を切るつもりだった。今日二人から持ちかけられたELダイバー探しの誘いも断るつもりだった。

しかし期待してしまっただの。願ってしまった。二人にもう一度、本来のGBNの楽しみ方を思い出させることが出来るのでは、と。

会った時に真摯に話し、簡単でもいいから一緒にミッションをこなして、初めてこの世界に触れた時の様に楽しめれば。

そして目論見はいとも容易く破れて今に至る。

「今日のメンテナンスまでにELダイバーを探し出すぞ！」

「最近つまんなかったけど、ようやく楽しくなってきたな！」

心底楽しそうな様子で話す二人に、カツノは話を切り出すことすら出来ず、残ったのは深い後悔。

あとは流れで二人に付き合い、ずるずるとこのエリアに、ロストマウンテンに連れてこられた。

本当に何してんだろう。ブリッツの指で石をつまみあげて右に移し、そして時間をおいてまた左側へと戻す。

暗雲の覆う荒涼とした表層部から、内部に続く立坑を潜り、二人に付き合うふりをし、無意味な反復を繰り返してはコーヤに言われた『最低』という評価を思い出す。

「最低の上塗りたあ、このこった……」

『カツノ？ なんか言ったか？』

「なんでもねえ。ただの独り言」

『あつそう。けどお前真面目に探してるか？ さつきから同じとこにばつかじやねえ？』

「大丈夫だ。ちゃんとやってるよ」

バスターからの通信に生返事を返すと、カツノは言い訳の様に別の場所へ移ろうとした時、ブリッツの右腕に装備した武装のトリケロスが岩壁の一部にひっかかる。接触箇所から拳大の石がこぼれ落ち、間もなく光の粒子となって消滅する。

「相も変わらず、不便なんだよなコレ」

それなりに長く使っていたが、ブリッツガンダムという機体は結局カヅノには全く馴染まなかった。

悪い機体ではない。だが盾に各種武装をまとめたせいで、片腕に重量が偏る特有の機体バランスも、ミラーージュコロイドによる迷彩能力も、はつきり言ってカヅノの趣味では無かったのだ。

——あいつらに合わせずに、宇宙世紀の機体で通してればもう少し違ったのかな……リアルルの自室に飾っている、丹精込めて作った本当の愛機にカヅノが思いを馳せたその時だった。

『二人ともこっち来い！　なんか抜け穴っぽいのあるぞー！』

カラミティから興奮気味の声が飛んできた。

呼ばれたカヅノはバスターともどもカラミティの傍まで寄ると、四つん這いになった緑色の機体が岩壁へ向け、指先をつんつんと指し示す。見れば確かに小さな穴のような黒い空隙があった。

ただし大きさはおそらく直径1.5 m程度。到底カンプラに乗ったままでは通過できないサイズだった。

『一度降りて確認してみるか』

『賛成。カヅノはどうする?』

「……一緒にいく」

カヅノ自身探すふりをしているのにも飽きていたところだった。それに、もしかしたらこれで諦めてくれるかも、とここまで考えて辞めた。

——未練がましい。

今更だ。期待するだけとつくに無意味。

だから成るように為れ、だ。

カヅノはブリッツのコックピットから転送され、マウンテンサイクルの暗闇へと降り立つ。

アイテム欄からハンドライトを選択し、手元呼び出して点灯すると、二人分の足元が見えた。

一人はバスターを駆るダイバー、エスカベ。ガンダムSEED原典の連合の白い制服を着崩して着用し、刈り上げた赤髪と顎に髭を蓄えた、歴戦の兵士を思わせる風貌をしている。

もう一人はカラミティ使い、スレキ。紫色の派手なジャケットにオールバックの黒髪に細面をした美形のダイバー。ルックをしている。

そして禿頭強面ガテン系のカヅノを加え、3人のダイバーは皆姿勢を低くして抜け穴

へと潜り込んでいった。

光源や光を反射するものは一切無いので、穴の中は完全な闇だ。手付かずの山を再現したのであろう手の込んだ作りだが、闇に竦む気持ちも俄に湧き上がってくる。ただ幸いにも子供の背丈程度だった入り口は奥に進むほど徐々に広くなっていったので、三人は思っていたよりも閉塞感を感じる事なく進むことができた。

中腰だった姿勢は程なく背筋を伸ばせる様になり、横幅も広くエスカベとスレキの二人が並んで歩ける程度になっていった。

「これ、ひよつとして当たりじゃねえ？」

エスカベが周囲を見回しながら少し嬉しそうに言うのと、

「いやELダイバーがいるとは限らねえだろ」

まだ早い、とスレキが返す。

「違う違う。このミッシヨンの当たりだって。ロストマウンテンって確かすげえレアアイテムなんかも埋まってるって話じゃんよ」

「ああ……そっちの方が」

つまらなそうにスレキが返した時、カツノもこのロストマウンテンの特徴を思い出した。このロストマウンテンも所謂採取エリアと扱われているが、ターンエーガンダム劇中

の設定を活かしてか、他のエリアとは毛色が大きく違っている。

違いとしてまず挙げられる点が、採取できる報酬が他のエリアよりも豪華ということだ。ナノマシン残滓に覆われたオブジェクトはパーツデータとして回収可能で、リアルでの形成射出機用のデータにも転用できる。それが高性能なレアパーツである場合も多いというのだ。さらには金塊などの換金率の高いアイテムのドロップ率が、他のエリアとは一桁違うとも噂されている。

しかしながら、当然と言うべきか。悪名高いロストマウンテンの銘を打たれたエリアが甘いだけのはずも無かった。

アクシデントイベントの頻度と難易度が尋常ではないのだ。アイテムの質に釣られた駆け出しのダイバーが、トラップに引っ掛かり泣きを見たという話も少なくない。

代表的なアクシデントである原作再現、〈夜中の夜明け〉も一筋縄ではない。『核弾頭が起動した』と、突如として告げられたが最後、広大なエリアの端部まで退避できなければ核の炎で採取アイテムごと焼かれて終了。しかもカウントダウンは存在せず、起爆はランダム。最悪表示直後に起爆という場合さえある。

それ以外にも埋没していたあらゆる世界のMS・MAが再起動し、強力なボスユニットとして立ち塞がるパターン等々、ありとあらゆる嫌がらせがこの荒野には潜んでいる。そんな危険地帯という事もあり、あまり他のダイバーが探りを入れていないだろ

う、という考えからエスカベが提案したのだった。

「今更レアアイテムなんて拾ったって仕方ねえだろ。E.L.ダイバー見つけて売っぱらったら、このゲームもそれきりだろ？」

「いやでもよー。やっぱ見つけたら嬉しいじゃんよ」

「見つけても触んなよ。何が起爆スイツチか分からねえからな」

さつきまで手当たり次第に探し回っていてよく言う。

エスカベとスレキの会話を後ろから聞くカツノは何度目か分からない小さなため息をつく。

やはりもう付き合いきれない。スレキが言う様に下手を踏んで焼かれるのも馬鹿らしい。二人に気付かれぬように静かに踵を返そうと思ったとき、先行する二人の足が止まった。

怪訝に思ったカツノも二人と並んで正面のライトを当てて目を見開く。

「おお……」

「こいつはまた」

エスカベはヒゲを撫でながら唸り、冷めた態度を見せていたスレキでさえ感嘆の声を零すほどだった。

穴を抜けた先は広い空間だった。三人のライト光が照らし出していたのは、天地を貫

く様に聳える巨大な岩塊の姿だった。カヅノはライトを向け、下から上に光でなぞる様にして確かめるが、巨岩は天井にまで食い込んでいて全容は見えない。だがおそらく自分たちの使用しているガンプラ並に大きい。見えているだけでも、高さは20mは優にあるだろう。

そしてこれはただの岩ではない。照らされた表面に浮か模様とウインドウの表記を見て三人は理解した。

「これ……全部ナノマシンの塊なのか？」

エスカベが呆然としながら言うが無理もない。ガンプラで運搬できるサイズが一般的なサイズであるのに、ガンプラよりも大きいというのは三人の誰もが見たことがない。

もし回収できれば一体どんなお宝になるのか。エスカベは感嘆したまま、ナノマシン残滓に覆われた遺物に触ろうとするが、その手をスレキが制す。

「やめとけ。こんなの工事でもなきや掘れねえし、何よりデカすぎて怪しい」

たぶんトラップだ、とスレキに言われて、エスカベは伸ばそうとした手を引つ込めるのを見ると、カヅノは二人へと問う。

「……でどうする？ 戻るか？」

カヅノの質問にスレキはすぐ首を横に振り、ライトを眼前の岩塊からずらして周囲へ

向ける。この場所は岩塊を中心にした広いスペースになっていくらしく、まだ奥行きがある様だった。

「せっかくならんだ、ここも探すぞ。もう時間も無いし、ちよつとでも可能性に賭けたい」

「おう、いいぜ。諦めなきやなんとかなつからな、意外と」

エスカベも賛同し、カツノも無言で首肯したことで方針は決定。三人は正面の岩塊を避けつつ探索を再開した。

エスカベとスレキはさらに奥へと向かい、カツノは手近な壁伝いにこのスペースの探索を開始する。

「可能性に賭けたい、とか言ってる事はカツコいいんだけどな」

片手を岩に添え、ゆっくり壁伝いにカツノは歩く。

可能性はゼロではないだろう。ただし、本当にそんな冗談みたいな偶然、あるはずもない。

こんな事のために時間を割くために、GBNを始めた訳ではなかったのに。もつと楽しむために始めたのだから、負け続ける事に腐らず、普通のダイバーの様に腕を磨き、自分の機体をビルドし、あまつさえブレイクデカルなんぞに頼らなければ、今も別の景色を見ていたのだろうか。

最初からやり直したい。心臓を高鳴らせながら初めてダイブしたあの日に戻り、違う未来を選択できれば……

「こういうところだけ、ゲームじゃないんだよな……」

仕方ない事だ、忘れよう。そして何気なくライトをずらして横手を見た時。

足元に石以外の、柔らかな感触を覚えて、ぞつとした。

ありえない。ありえない。NPDがいる様なエリアではない。それにこのエリアに入っているのは、間違いなく自分たち三人だけだ。

「……ウソだろ」

足元をライトで照らすと、そこには少女が体を丸めて寝転んでいた。

赤銅色の肌と、翡翠色のボサボサ髪。以前からこの場で寝ていたのだろう、ボロボロのマントには薄く埃が堆積している。

仲間から転送された、E.L.ダイバー狩りを誘うメッセージ。読み流していた一文がまざまざと蘇る。

《対象のE.L.ダイバーはログが残らない》

まさかそんな。絶句するカツノは自分の悪運を本気で呪う。

石の床で寝ていた少女の臉がゆつくりと開かれた。

第21話 ラストチャンス

物音と瞼越しに眩しきを感じて、ルメは目を開いた。

目を覚ますと、そこには見知らぬ大きな男がライトを向けて自分を見ている。

筋肉で盛り上がった体格に作業着のような衣服を纏い、場所が場所だけに鉱夫の様に見えると思った。頭髮の無い男の大きな顔が、ぬつと覗き込むように徐々に近づいていく、と認識した瞬間ルメは弾けた様に飛び起きた。

「ひゃああつー！」

情けない声を上げ、ルメはカヅノから距離を取ろうと立ち上り、

「ふぎやー！」

足元の出つ張つた石に躓き、勢いよくその場にすつ転んだ。

真つ暗な視界の中で頭の中に火花が飛ぶ。額がじんじんと痛み、顔面から全身に浸透して瞳には薄つすらと涙が滲んできた。

「うっ、ううう……」

痛みとストレスでぐちゃぐちゃになった感情は涙に変わり、額を押さえて蹲つたルメの瞳から溢れ始める。

しかしながらこの状況に困惑したのはルメだけではない。

「……あーその、大丈夫か？」

カヅノは腰を落として石床に突っ伏したままのルメに手を差し伸べた。

カヅノにしてみれば、洞窟で寝ていた女の子が自分の顔を見て驚いたはずみで転倒した、という意味不明な状況だ。居た堪れなくなるのも仕方ない。

「驚かせるつもりはなかったんだが……いや、それはいい。とにかく、今はあんまり物音を立てない方がいい。あんたを探している奴らがいる」

肩を震わせていたルメの全身がびくりと揺れる。そしておずおずと顔を上げると、真っ暗なままの周囲を見回し始める。石床に打ち付けて赤くなつた額と、赤銅色の肌の整った顔が見えたが、涙と砂埃ですっかりぐしゃぐしゃになつている。

「結構あつちの方に行つたから、大きな音出さなけりや大丈夫だろ、たぶん」

カヅノが二人の向かつた先を指で示しながらそう言うと、ルメは少しだけ安堵した表情になつて、その場にぺたんと座り込む。そしてカヅノへ振り返る表情に涙を浮かべているが、少しは落ち着きを取り戻した様に見えた。

「誰、ですか？」

「……カヅノ。あんたは？」

「ルメ、です……。なにをしてるんですか？　こんなところで」

「……ELダイバー探しの手伝いをさせられている」

「……っ！」

「待てって、話終わってない。それにまた転ぶぞ」

飛び退る様に逃げようとするルメを、カツノは極力声を抑えながら制止する。

ルメも額の痛みを思い出しか、渋々という風だがカツノに従い、改めて向き直る。

「あんた、ELダイバーなのか？」

「……」

ルメは無言で首肯した。

「最近追われてる自覚はあったか？」

首肯。

「何でそうなったか分かるか？」

否定。ルメは小さく首を振り、悲しげにうつむく。

ELダイバー。GBNの電子生命体。リアルの体を持たないダイバー。

耳にただけでは、なにか凄いAI程度の認識でしか無かったが、こうして出会った
実物は泣いている女の子の姿をしていた。

何も知らない女の子を、寄ってたかって追い回してる。それがELダイバー狩りと呼ばれる
非合法イベントの実態なのだろう。

そして彼女の怯えきつた反応を見ているだけでも、どんな目に遭つてきたかカツノにもおおよその見当はついた。

「……正直なところ、俺はE.L.ダイバー狩りの話を気に入ってない」

この吐露はカツノの本音だった。

GBNはガンブラで戦うことを楽しむための空間。どれだけルールとマナーに背いても、負けっぱなしで腐つても、それだけはカツノの中で揺るがなかった。

だからこそ、GBNで金儲けをするのは明確に嫌だと言えた。

「むしろ、あいつらの邪魔をしたいと思ってる。今は」

自分は今、虫のいいことを言っている。

胸が痛んだ。最低と言った、あの女ダイバーの顔がちらついた。

元マスダイバーで初心者狩り。弱いものいじめを散々肯定してきた人間が、今更過去を棚上げしていじめを止めようと言ってるも同然だ。

醜悪な矛盾、だとしても。何でもいいから善行を積みば少しでも最低ではなくなる気がする、カツノは言葉が続ける。

「だからその、こうして会ったばかりで、こう言うのもあれだがよ……」

ゆっくりとした動作でカツノは腰を落とし、ルメと視線を合わせる。自らエディットした強面の顔に穏やかな笑みを作り、カツノはルメに手を差し伸べる。

「もしあんたにその気があるなら、一緒に来ないか。あんたを運営まで連れていきたい」それはあまりに唐突な申し出。カヅノの言葉を受けたルメは、戸惑いを見せる。

信じてもいいのだろうか。その思いが浮かぶが、ルメは以前自分を保護した白衣の青年を思い出し、信じようとする気持ちが沈んでしまう。

今のままではいけない。けれどどうすればいいか分からない。正しい答えを虚空に求めて、ルメの視線は無意味に彷徨い続ける。

無論カヅノはルメの迷う理由など知る由もなかった。ただ何も言わず、E.L.ダイバーの答えを待つ。彼の中に無理矢理にでも連れて行くという選択肢は無かった。この場にいる二人を意識して、急ぎたい気持ちはあつたが、彼女を見て湧き上がった思いやりが、本人の意思を尊重したいという気遣いとして顕れていた。

だがやはり、悪手と呼ぶよりなかった。

「カヅノ、誰よそいつ？」

時間切れとでも言う様に、カヅノとルメをスレキのライトが照らし出す。

向かい合っていたカヅノとルメが同時に向いた先には、エスカベとスレキの二人の姿。薄闇の中でも、浮かべている表情がはつきりと分かった。

——ゆっくり探してろよ、もう少し。

胸中で毒づきながらカヅノは顔を顰める。しかし、喜色満面の僚友二人は、カヅノの

変化に気付きもしなかった。

「マジかよやべえぜ、おい。ここには俺達しかいないってのに、このガキ表示も何もねえじゃんよ。これ本当にマジもんの大当たりじゃねえのか!？」

大袈裟に天を仰ぎ、ウインドウを操作するエスカベは嬉しげに野太い声を上げる。

スレキは薄ら笑いを貼り付けたまま、カツノとルメを交互に見やり、

「カツノお前も人が悪いぜ、さっさと教えてくれりゃいいものをよお」

スレキが軽薄な笑みと湿った視線でルメを見る。そして思い出したようにカツノへと視線を移す。

「それとも一人でコイツ捕まえてトンスラするつもりだったのか？ 賞金独り占めか？」

「そーいやお前、前にもレアドロップを黙って持ってたたりしたよなく。またやる気か？」

「バカか！ ちげえ——」

二人の言葉は冗談か本音かは分からなかった。カツノは反射的に思わず否定を入れるが、ルメの表情はもう変化していた。

瞳目するルメの瞳が失望から、瞬く間に憎悪へ。

違う、そうじゃない、信じてくれ。俺は本当にあんたを――

「うそつきー!」

カツノへ向け言い放つなり、ルメは暗闇へ飛び込むように走り出した。

「くそつきー!」

ルメを追ってカツノも駆け出し、さらにエスカベとスレキも続くように走り出す。

最悪な展開。これでは三人がかりで追いかけているも同然ではないか。

どうする。エスカベとスレキの

対処。ルメへの誤解。どちらも難題。そして避けては通れない。薄暗い闇を物ともせず走るルメの背を必死に追いながら、カツノは思考を巡らせ、徐々に狭くなる穴を走る。

そして、先頭のルメが穴を抜け、大きな空洞に出る。直後。

「ひっー!」

何かに驚いたような短い悲鳴を上げ、ルメは足を止めてしまう。

ルメの視線の先に居たのは、カツノらが乗ってきたガンダムだ。出口に残っていた三体のガンダムを目にした瞬間、ルメは竦むように足を止めてその場にへたり込んでしまう。

気になるが、カツノに理由を考えている暇はなかった。

「ブリッツ！」

コックピットへの転送範囲内に入ると同時、カヅノは自機の名を叫んだ。薄闇の中、黒いガンダムが応じるようにメインカメラを輝かせると、カヅノの視点は岩に覆われた洞窟の風景から、見慣れたガンプラのコックピットへと変化する。

カヅノはコンソールグリップを握り締めると、すぐに視線を今しがた出てき抜け穴の出口に向ける。

居るのは未だ呆然と座り込むルメ、ただ一人。スレキとエスカベはまだ出口を抜けていない。

「間に合えっ！」

祈るように声を発して、カヅノはブリッツの右腕——トリケロスの盾を出口めがけて突き出した。

ガンダムそのものを使い、唯一の出口に蓋をする。カヅノの目論見は間一髪で間に合った。

地面に突き刺すような勢いで伸ばされた盾は、あと一步で抜けようとしていたスレキ達を出口目前で阻む。盾をカンカンと小突くような小さな力と、微かに聞こえる怒声はスレキらのものだろう。これで厄介は一つ減った。

「あとはあの子を保護して……ってあいっ！」

カヅノが視線を戻した時、竦んでいたはずのルメはいつの間にか立ち直っていた。立ち直り、ブリッツガンダムの眼の前を半ベそをかけた少女が一心に足を回して横切っていく。

「大人しくしてくれよ……!」

舌打ちして、カヅノはブリッツガンダムの左手でルメを追いかける。だが、右腕を壁に押し付けた姿勢のままでは思うほど腕は伸びなかった。ルメはブリッツガンダムが精一杯に伸ばした左腕を迂回する様に躲し、手の届かない距離へと走り去っていく。

このままではルメを取り逃してしまう。かといって、ここで動けばスレキたちを開放することになる。そうなれば二人は自分のガンダムに乗り状況はさらにややこしくなる。

右手か左手か。また迫られる判断。ジリジリと脳が焦げる様な不快感がカヅノを苛む。

決断は右手。

壁に密着させていた右腕を離し、機体全体でルメを追う。

迫る巨大な足音に反応し、ルメが振り返る。必死の形相が見えた。

また胸が痛んだ。それでもカヅノはたじろがない。

ブリッツガンダムは大股な一步を踏み、ルメの頭上を飛び越し、反転。ルメの進路上

で片膝を付き、身を屈めながら左腕をルメへと伸ばす。ルメも急転身してガンダムの手から逃れようとするが、今度はブリッツの方が速い。

黒いガンダムの左手は地面を這う様な低空軌道でルメに迫る。その動きは握るでも掴むでもなく、掬い取る動作だった。ルメに近づくとつれて速度を落としながら最小限の衝撃で接触。小さな体を手中に捉えるとゆっくりとした動作で機体の胸元まで持ち上げた。

ブリッツの手の平に収まると、少女の体は本当に小さく見えた。まるで生まれたばかりの仔猫の様だった。

ルメはまた震えていた。怯えた目でガンダムを見上げている。自分のした事を顧みれば、この反応は当然のもの。もう謝罪の言葉も浮かばない。

それ以上に、謝罪している暇もないのが実情だった。

ルメの様子を見ついてもカツノの意識はさっきまでいた抜け穴の入り口に向けられている。

そこで今まさに、駐機していた二体のガンダムに火が入ったのを認めたのだ。

「揺れるが我慢してくれ！ 絶対に——」

砲声があった。カツノの声を掻き消し、ブリッツの間近にビームが着弾する。

「っ……………」

ルメを持つ左手に僅かに力を掛け、彼女を固定。そして右腕の盾の内側へ庇うように移しながら、黒いガンダムは飛び退り2発目の実体弾を回避する。

『……何のつもりか知らねえがよ、結論俺らの邪魔したいって事でいいんだよなあおいカヅノ?』

砲撃の張本人。バスターガンダムからエスカベ

の声が響いた。外部スピーカーから出力された声には容易に分かるほど強い怒気が込められていた。

その傍らスレキのカラミティガンダムが一步踏み出す。ブリッツガンダムへ向け、背中から伸びるビーム砲を向けた。

『お前の行動意味不明過ぎて下がるんだよ。とりあえず、折角のチャンスを台無しにしようとした落とし前、つけろや』

スレキの声に応じる様に、カラミティガンダムの両肩から光条が放たれる。続くようにバスターも砲撃を再開し、砲撃機二体分の集中砲火がブリッツガンダムに降り注ぐ。

「くそがつー!」

悪態をつき、ブリッツはスラスターを全開噴射。二体のガンダムに背を向けてロストマウンテンの洞窟の奥へと進んでいく。

ロストマウンテンの中は迷宮だ。迷宮の奥へ進む意味をカヅノも分かっていたが、今

はこうするよりない。

『逃がしやしねえよ！』

バスターとカラミティもスラスターを噴かし、ブリッツを追撃。高速移動しながらも絶えず砲撃を続ける。バスターの二丁の砲、カラミティ胸部のスキュラが光り、破壊の火線がブリッツの間近で炸裂する。破裂する炎熱がブリッツの機体を揺らし、カツノはルメを落とすまいとブリッツの両手で彼女を支えだした。

「ばかすか撃ちやがって……自分たちが何しに来たのか覚えてねえのかよ！」

牽制目的でデタラメに撃ちまくっている様子だったが、時折ロックオン警報が入る。チエックすると、カツノは現在僚機がいない状態。つまりスレキ達のチームから既に除外されたという事だ。同士討ちを避けるため、味方機はロック対象から除外されるのが常のため、この処置は道理ではある。

不利な条件がまた増えるが、かろうじて洞窟内というステージはカツノにも利はある。スレキとエスカベのガンダムは筋金入りの砲撃型。頑丈な遮蔽物のおかげで射線はある程度は限定される。またMSが通れる大きな横道も少くない。

『そのガキ置いて死ねよカツノ！』

『死ね死ね死ね死ね死ね！』

絶え間ない砲撃に混じってスレキとエスカベの声がするが、カツノは努めて無視す

る。

気を逸らすな。まだ勝ち筋はある。目眩がするほど細くとも。スレキ達を撒いて、どうにかしてロストマウンテンの出口に漕ぎ着けさえすれば――

『……もう……だ』

か細い声だった。偶然でも外部集音器が拾わないような声が機体の外から……ブリッツの手の中から聞こえた。

『もうやだ！ みんなヤダ！ ほつといてよ！』

ブリッツの手の中。ルメの叫びが聞こえた。気味が悪いほどはつきりと。

『もうイヤ！ みんなみんなイヤ！ 大キライ！』

物理的距離。接触回線。確かな理由はあるだろうが、聴こえている言葉が全てだった。

拙い語彙での悪態は続いている。ずっと震えていたルメが急に大声を張り上げたのが衝撃的だったからか。

違う。むしろ自然なのかもしれない。

会った時に薄々感じていた。彼女はもうとつくに限界だったのだ。

孤独な放浪。昨今のELダイバー狩りという非道な追い打ち。ボロボロだった心に、突如始まった砲火の逃走劇が致命的なひびを入れた。それが今になって破られた。

ずっと押し込めていた本音が限界を超え、悲鳴となって噴き出している。沢山の涙と一緒に。

『はなしてよ！ おろしてよ！ もうこわいの……いや……いや……いやあ
あああああ!!』

言葉は徐々にぼやけ、叫びはいつしか啜り泣く声と嗚咽に変わっていった。

辛い。苦しい。怖い。悲しい。少女のか細い泣き声を聞いているだけで、ありつたけの負の感情が針の様にカツノの心へ突き刺さる。

——俺達がした事も、結局はこういう事かい……。

何も知らない初心者を後ろから撃ち、それを楽しんだ。

やめてと言われても、笑って撃ち続けていた。

やられた側がどんな思いをしたか、それをこんな形で味わうと思わなかった。

後悔と自分の愚かしさを心底恥じながら、カツノはブリッツの速度を上げ、逃げるように手近な横穴に機体を滑り込ませた。

侵入した穴——通路はさっきよりも狭くなっていた。加えて棘の様に迫り出した岩が、通路中に点在して、最高速度での移動は困難。岩の棘を避けるためブリッツは否応なく速度を落とし、蛇行する様に通路を進む。

好転したのは砲撃の音が止んだことくらい。それも束の間。代わりにルメの音が余

計にはつきりと聞こえて、カヅノの表情が一層険しく変化する。

もう聞きたくなかった。友だった二人の怒声も、手の中で泣き続ける少女の悲鳴も。聞きたくなかった。

『助けてよ……コーヤ』

自分の歯車を狂わせたあの女の名前を、よりによってこんな時に。

「おいあんた……ルメー！」

カヅノは反射的に、先程聞いたE.L.ダイバーの名前を呼んでいた。そして続けざまに彼女へ問う。

「あの女の事か、コーヤってのは!?!」

カヅノの声は、ルメの悲鳴を止めた。

ぐしゃぐしゃになった泣き声を驚愕の表情に変え、ルメの相貌がブリッツガンダムの顔を見上げる。

『コーヤを……知ってるの?』

「ああ! 髪が黒くて、背が高くて、それで……でかいバイクのガンプラに乗ってるあのコーヤで合ってるんだな!?!」

カヅノの言葉にルメは頷いた。カヅノがコーヤの特徴を口にする度、ルメは大きく何度も頷いた。頷く度、ルメから怯えが消えていく気がした。

——なんだよそれ……。

一体どれだけ巫山戯た巡り合わせだ。

不可解だった点が線で繋がる。

だから、自分を最低呼ばわりした女はE.L.ダイバー狩りの話題に食いついたのか。

癪な話だ。ああ、癪な限りだ。

だが、あの女に貸しを作れる。それはそれで面白い。

そんな発想に至る辺り、つくづく自分は小物の様だ。そうカツノが思うと同時に、また後方から砲声が轟いた。

『カツノおやおお！』

怒声をがならせて、バスターとカラミティの二機の追撃が再び始まる。

「しつこいんだよお前らも！」

カツノはスラストターを吹かし、ブリッツを再加速させる。岩の棘をギリギリの距離で避けながら、黒いガンダムはロストマウンテンの迷宮へ飛び込んでいく。

加速を続けながらカツノは思った。きっとここが分岐点だ。

恥ずべき自分と決別するためのラストチャンス。

不思議と笑みが浮かんだ。波々付き合っていたお使いは、既に達成すべき命題になっていた。



逃げるブリッツ。それを追い、火力を行使するバスターとカラミティ。

三体のガンダムの戦いは、一方的な追走劇へと至ったが、その激しい砲撃はロストマウンテンの洞穴を揺り動かした。

その振動はルメとカツノ達がいいた場所まで響き渡っていた。

ぽつかりと空いた広間の様な空間に、鎮座する巨大ナノスキンの塊。金属とも岩ともつかぬ大きな物体は、バスターとカラミティの砲撃が轟く度に揺れて、破片となって零れていく。

そして一際大きな破裂音が上がった時、ナノスキンの塊から大きな破片がズルりと剥がれ落ちた。

剥がれた場所から顔を覗かせたのは、磨きたての様な白く光る金属。それは機動兵器の装甲。

ナノスキン塊の蠢動は激しさを増していく。グラグラと揺れながら、ナノスキンは瓦礫となってバラバラと崩れ落ち、やがて覚醒した巨大な力が金属被膜を周囲一帯に吹き飛ばす。

その様は、卵を破って世に生まれる雛鳥のようでもあった。

ただしその雛は、既に巨大な鋼鉄の翼を携えた怪鳥とでも言うべき威容だった。

／／

「……んんん？」

そのダイバーは自機のコックピットの中で、今しがた届いたばかりのメッセージを鼻歌交じりに開封していた。

差出人の名称はスレキ。彼も今日送られてきた何十通もの知らないメッセージ同様、顔も知らないダイバーからだ。

「ギリギリになって届く情報も増えたけどお。この子のは当たりかな？ ハズレかな？」

ダイバーの声は愛らしい少女のそれで出力されていた。

これまでのメッセージは全てハズレ。的外れなダイバーの姿か、あるいは既にGBN側に登録されたELダイバーの情報だった。目標は確かにELダイバーだが、既知の存在ではダメなのだ。

ポチっとウインドウをタップし、メッセージを開封。そして短い文章を読み、さらに添付されていた画像を見て、ダイバーはにまりと笑う。

「ベンゴ」

画像はGBN内のスクリーンショットだ。薄暗い洞窟内。そこに二人の背中が映し出されている。

一人は禿頭をした作業着姿の男。もう一人は砂色のボロマントを纏う、翡翠色の髪の少女の背中。

GBN中のダイバーに向けてばら撒いたあのメッセージが遂に当りを引き当てた。時間的にもこれがラストチャンス。ならばそう、劇的に演出しなくてはね。

「お兄さんー！ ついに当たりを見つきましたよー！」

ダイバーは自機の手を振り上げ、眼下にいる青い機体へと合図を送る。

ここはハードコアディメンション・ヴァルガ。

青い機体——グフ・イグナイテッドの周囲ではスクラップになった機体が、次々と光の粒子に変わり消失していく。

「さあ、ここからがゲームの本番だよ」

ダイバーは心底楽しそうに笑う。

彼女の機体、ハンブラビは大きく手を振り続けている。